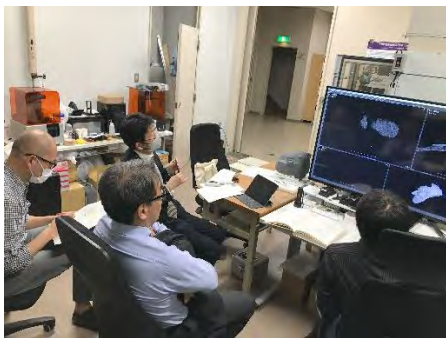


中項目	1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信		
事業名	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究		
【年度計画】 ・ I-1-(4)-(4館共通)ア			
担当部課	東京国立博物館学芸研究部 京都国立博物館学芸部 奈良国立博物館学芸部 九州国立博物館学芸部	事業責任者	部長 河野一隆 部長 尾野善裕 部長 吉澤悟 部長 白井克也
【実績・成果】 外部資金を活用した調査研究を下記件数実施した。 (東京国立博物館) ・ 科学研究費補助金：12件 ・ 学術研究助成基金：33件 (京都国立博物館) ・ 科学研究費補助金：5件 ・ 学術研究助成基金：5件 (奈良国立博物館) ・ 科学研究費補助金：2件 ・ 学術研究助成基金：2件 (九州国立博物館) ・ 科学研究費補助金：3件 ・ 学術研究助成基金：7件			
【補足事項】 本項詳細は統計表c-⑦参照			
【年度計画に対する総合評価】 評価：B		【判定根拠、課題と対応】 外部資金を活用し調査研究を行い、その成果を博物館の文化財の収集・保管・展示・教育普及活動に活かすなど着実に成果を上げている。また外部資金を活用した調査研究件数は、前中期計画期間中（平成28年度～2年度）の平均43.4件と比較すると約1.5倍増と、多くの外部資金を活用した研究を実施することができた。	
【中期計画記載事項】 文化財に関する調査研究を実施し、その保存と活用を推進することにより、次代への継承及び我が国の文化の向上に寄与する。			
【中期計画に対する評価】 評価：B		【判定根拠、課題と対応】 文化財の調査研究における外部資金の獲得件数は、年々増加傾向にある。獲得した外部資金を通して文化財の保存と活用の一助となった。6年度以降も引き続きより多くの外部資金獲得を目指し、調査研究の活性化を図る。	

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	1)収蔵品等及び各博物館の特色に応じた歴史・伝統文化に関連する調査研究 ア a.特別調査「法隆寺献納宝物」(第43次)		
【事業概要】 当館では、昭和54年より、法隆寺献納宝物の調査を館内及び館外の専門研究者とともに共同で行ってきた。本事業は全ての研究者に対して、画像や概要など研究のための情報を提供することを目的とする。			
【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	調査研究課長 小山弓弦葉 絵画・彫刻室長 土屋貴裕
【主な成果】 (1)調査概要 ・法隆寺献納宝物の重要文化財「伎楽面」31面(他、舞楽面と鬼面)について、全点を対象としてX線CT撮影を実施した(7月3～6日、7月31日～8月3日、8月21～24日、12月6日、12月20日)。また、従来のデジタル写真に加えて、面裏の撮影も実施した(8月2日、10月2日、11月20日)。各自でCTデータの検証を進めたうえ、担当者合同で検討会を行った(11月30日、12月22日)。 (2)調査の成果 ・伎楽面については、第1次の特別調査で対象とされ、概報のほか大型図録も刊行されているが(東京国立博物館編『伎楽面』東京国立博物館、昭和59年)、旧版ではX線撮影を一部に実施したにとどまるため、全点をCT撮影することにより従来の品質構造に対する知見を再確認した。そこから、旧版の記述を訂正・追記すべき点も明らかになり、法隆寺献納宝物の基礎情報を充実させることができた。 ・以上の成果をまとめ、『法隆寺献納宝物特別調査概報43 伎楽面X線断層(CT)調査』(PDF形式)を刊行した。			
 伎楽面 呉公  X線CT撮影  CTデータ検討会			
【備考】 報告書：『法隆寺献納宝物特別調査概報43 伎楽面X線断層(CT)調査』(PDF形式)(6年3月29日発行)			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	法隆寺献納宝物のうち重要文化財「伎楽面」等の調査については、全点を対象にX線CT撮影を実施し、従来の研究蓄積を検証するとともに、新しい知見も得た。こうした科学分析による最新の知見を反映した報告書を刊行し、その成果を社会に還元することができた。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	文化財に関する基礎的かつ総合的な調査研究の成果を、展覧事業・教育普及活動等に反映できたことにより、中期計画を遂行できている。献納宝物にはまだ調査対象となっていない作品も多く、今後も新たな調査を進めるとともに、調査済みの作品についても科学分析等を用いた再検討を行う予定である。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	1) 収蔵品等及び各博物館の特色に応じた歴史・伝統文化に関連する調査研究 ア c. 特別調査「工芸」(第13回)
【事業概要】 当館で保管される工芸（陶磁・漆工・染織・金工・刀剣甲冑）の収蔵品・寄託品に関する調査研究である。毎年、該当する未調査の作品あるいは再調査を要する作品の中からテーマを設定し、当館機構内の担当研究員、あるいは、専門の研究者を招聘し、年に1回、数日間の調査を行う。調査研究の成果は、来年度以降の展示等に活用する。	
【担当部課】	学芸研究部調査研究課
【プロジェクト責任者】	調査研究課長兼工芸室長 小山弓弦葉
【主な成果】 (1) 調査の概要 5年度以降3回にわたって寄託となるJ. フロントリテイリング史料館所蔵染織資料（松坂屋コレクション）の内、琉球染織を中心とする68件の染織資料について、その概要を把握するための調査を行った。作品1点1点につき採寸を行い、熟覧および顕微鏡調査によって、その素材の特定・織や染の技法について調査を行った。調査には、当館担当研究員の他、J. フロントリテイリング史料館の学芸員である翠川萌恵氏が参加した。 (2) 調査の成果 J. フロントリテイリング史料館が所蔵する琉球染織は、戦前に染織コレクターが蒐集したコレクションが中心であり、沖縄戦で失われずに伝世することとなった貴重な資料である。今回の調査で、当館のコレクションにはない琉球独特の素材である芭蕉、桐板、麻（上布）といった素材による織物や東南アジアの影響を強く受ける琉球の織物の組織などを調査し、その概要を把握することができた。また、琉球独特の型染である紅型については、安土桃山時代から江戸時代にかけての日本の模様との関連性が理解できた。	
 黄色木綿地震桜に菖蒲文様衣裳 第二尚氏時代・19世紀 J. フロントリテイリング史料館  芭蕉黄地格子着物 第二尚氏時代・19世紀 J. フロントリテイリング史料館	
【備考】	

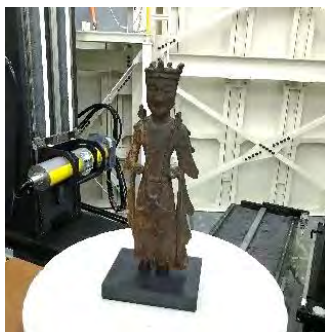
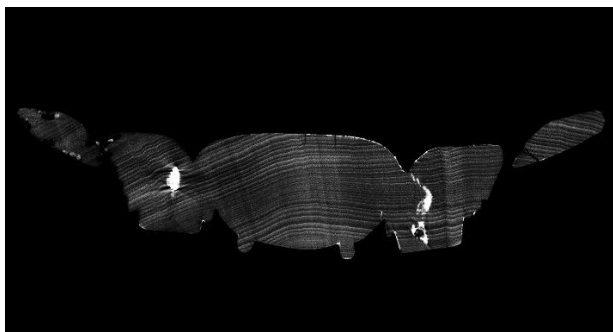
年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	当館では琉球の展示が常設されているにもかかわらず、その染織資料は限られていた。今回の寄託による調査により、第二尚氏時代における琉球染織資料が充実し、本土とは異なる独特の素材や技法を持つ琉球染織資料の基礎的なデータを得ることができた。6年度以降は、専門的な知識と調査実績を持つ専門家を沖縄から招聘し、今回得られた調査データを精査して、さらに琉球染織資料の調査研究を進展させていく計画である。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に基づき、当館で保管する工芸作品の継続的な調査研究を行うことができた。4年度は新型コロナウイルス感染拡大の懸念から特別調査が実施できず、5年度も染織作品のみの限定的な寄託品調査にとどまった。6年度以降は、機構内における担当研究員および高度な専門的知識を有する研究者も招聘し、機構全体の調査研究をレベルアップさせる事業に拡大していくとともに、工芸の他分野の特別調査も充実させていく計画である。また、調査研究の成果は、順次、展示などで活用をはかる予定である。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	1)収蔵品等及び各博物館の特色に応じた歴史・伝統文化に関連する調査研究 ア d.特別調査「彫刻」(第11回)		
【事業概要】 社寺等所蔵の仏像、神像、肖像彫刻等を調査し研究報告論文活動に結び付けあるいは寄託増加特別展等の企画につなげて示質向上を図る。5年度は、館蔵品及び寄託品に対して、X線CT撮影を実施し、分析研究を行った。			
【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	調査研究課長 小山弓弦葉 絵画・彫刻室長 土屋貴裕
【主な成果】 (1)調査概要 ・館蔵品及び寄託品に対してX線CT撮影を実施し、担当者各自でCTデータの検証を進めた。今年度は国指定重要文化財ならびに乾漆技法を用いた作品の撮影を重点的に行った。 ・調査日は以下のとおり。4月18日、25日、5月9日、11日、16日、18日、6月1日、6日、8日、15日、20日、7月6日、25日、9月29日、10月3日、5日、12日、17日、19日、26日、11月9日、16日、28日、29日、12月7日、11日、14日、21日、22日、6年1月9日、11日、30日、6年2月6日、13日、15日、20日、27日、29日、6年3月14日、18日、19日、21日、25日、26日、28日 (2)調査の成果 ・X線CT撮影によって、外見から確認できない作品の構造や保存状態が明らかとなった。過去にX線撮影を行った作品であっても、その知見を大きく更新する必要を認めた。 ・CT撮影データで樹種を特定するため、小型作品の一部は微小部観察用X線CTスキャナーで撮影を行った。今後、森林総合研究所と共同でデータ分析を行い、非破壊調査により樹種の鑑定ができるよう検討を進める。 ・成果については、作品解説等に反映するとともに、論文や調査報告として『MUSEUM』誌等で発表する。			
 C-217 菩薩立像  同X線CT(垂直)  同X線CT(水平)			
【備考】 調査日数：45日 調査作品数：119件			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	非破壊による文化財調査のなかで、X線CT撮影は作品の内部を観察する上で不可欠となっている。5年度は、館蔵品及び寄託品について、とくに国指定重要文化財及び乾漆技法を用いた作品を重点的に撮影することで、内部構造や表面仕上げ、保存状態といった点について、新たな知見が得られた。これにより、所期の目的は達成できたと思われる。今後は、さらにデータの解析を進めることで、構造技法の特色について研究を進め、逐次その成果を展示や刊行物等によって紹介したい。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	収蔵品など文化財に関する基礎的かつ総合的な調査研究の成果を、展覧事業・教育普及活動等に反映するという中期計画に沿った調査研究や研究成果の報告ができた。引き続き調査を進め、逐次その成果を展覧会の企画や出版物のなかで広く一般に発信していきたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	1)収蔵品等及び各博物館の特色に応じた歴史・伝統文化に関連する調査研究 ア e. 特別調査「絵画」(第8回)		
【事業概要】 戦前の当館は宮内省所管だったこともあり、コレクションには京都御所ゆかりの作品が含まれている。当館の歴史、及びコレクションの来歴等を再検討するため、4年度に引き続き京都御所ゆかりの絵画作品を対象に調査を実施し、特集展示、研究に活かすことを目的とする。			
【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	絵画・彫刻室長 土屋貴裕
【主な成果】 (1)調査の概要 当館が設立されて以降、帝室（帝国）博物館時代には京都御所ゆかりの品々が移管された。以上の経緯を踏まえ、台帳上判明する宮廷ゆかりの作品を選出し、調査を行った。4年度は主に賢聖障子関係作品の調査を実施し、一部の主殿寮（御所の調度類を管理していた部署）引継ぎ品の調査を実施したが、5年度は主殿寮引継ぎ品の調査を継続して実施した。結果、従来展示等では全く活用されてこなかったが、近世美術史を考える上で重要な作品も見いだされた。あわせて、これまでは宮廷由来といった観点に着目せずに展示していた作品もあり、こうした観点からまとめて考察することの意義も認められた。 (2)調査の成果 調査研究の成果の一部は、5年度実施の特集「近世のやまと絵—王朝美の伝統と継承—」で公開した。本特集では、「近世やまと絵と宮廷」という章を設け、絵画作品のみならず書跡作品も含め、宮廷由来の美術の一端を展示公開した。			
 主殿寮引継ぎ品調査の様子 源氏物語図屏風（若菜上・紅葉賀） 梅戸在親筆 江戸時代・19世紀 A-1005 在親は原在中の子で、花山院諸大夫の梅戸家の養子となり、安政度の小御所障子制作にも参加した。			
【備考】			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	従来、「京都御所ゆかりの絵画作品」といった観点から調査を実施することはなかったため、当館の歴史とも深くかかわる作品群の調査を実施した点は大きな意義が認められる。対象作品は、当館の歴史を物語作品群であり、個別の作品研究もさることながら、今後の館史研究にも寄与するところがある。加えて、従来ほとんど注目されてこなかった作品を保存状態を含め改めて精査したことで、今後の展示等への活用の見込みも立った点も大きな成果として挙げられる。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に基づき、作品調査の実施、調査研究、展示公開という見込みを立てることができた。とりわけコレクションの再評価という点では大きな意義があった。調査については、新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から、外部の専門家を招聘することは見送り、調査の日程及び時間についても限定して実施したが、より多角的な視野で調査研究を進めるためにも、機構内外の専門家を交えての調査は不可欠と考える。新型コロナウイルス感染症の感染状況を慎重に見極めながら、今後の課題としたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	1) 収蔵品等及び各博物館の特色に応じた歴史・伝統文化に関連する調査研究 ア f. 特別調査「考古」(第1回)
【事業概要】 当館所蔵の作品及び寄託品にかかる日本考古の調査研究である。作品の帰属年代によって、先史(旧石器時代～弥生時代)、原史(古墳時代)、有史(飛鳥時代以降)を大きな区分として対象テーマを設定し、当機構内の関係職員、客員研究員ならびに外部の専門識者を招聘し、1年に1回ないし2回程度実施するものである。研究対象や研究内容は各分野で選定するほか、分野や地域、時代を横断した共通テーマを設定し実施することもある。 なお、考古分野の特別調査は5年度より新たに実施したプロジェクトである。	
【担当部課】	学芸研究部調査研究課考古室
【プロジェクト責任者】	考古室長 井出浩正
【主な成果】 (1) 調査の概要 5年度は当館所蔵の国宝「埴輪挂甲の武人」(J-36697)と関連作品の調査を実施した。当該作品は平成30年から令和元年まで約3年に及ぶ解体修理を経て、4年度に当館創立150年記念特別展「国宝東京国立博物館のすべて」において修理後初の展示を行った経緯がある。5年度は修理調査報告書『修理調査報告書 国宝 埴輪挂甲の武人』の刊行に先立ち、担当研究員を中心に当該作品の肉眼観察による精査と、館内所蔵の関連作品の調査を実施した。 (2) 調査の成果 今回の調査によって、当該作品の出土地とされる群馬県太田市飯塚町周辺の人物埴輪の類例や、同時期の出土品の検討を行うことができた。特に当該作品と類似する館内所蔵の武人埴輪の抽出とその比較検討を通じて、同一埴輪製作工人集団の製作を示唆する作品が存在することが判明した。当該作品を中心に、古墳時代における埴輪の生産体制とその製作者集団を解明するうえで大きな成果と位置付けられる。	
埴輪 挂甲の武人 (J-36697) (解体時) 同 (修理後) 武人埴輪の類例 (J-20916)	
【備考】 東京国立博物館編『修理調査報告 国宝 埴輪 挂甲の武人』 ※6年3月刊行	

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	当館所蔵の作品の基礎的な研究データを得られたことが評価できる。5年度は新型コロナウイルス感染症の影響が懸念される中、館蔵作品の調査に集約したことにより、よりミクロな作品の観察や作品群の比較を行うことができた。国宝「埴輪挂甲の武人」は、わが国を代表する古墳時代の埴輪の一つであり、本格的な修理を経て持続的な活用が予想される。そのため、5年度の調査で基礎的な調査成果が得られたことによって、一層の調査研究の促進とその展開を見込むことができると評価できる。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に基づき、所蔵作品の持続的な管理と活用を目的とする調査研究を行うことができた。これまで、当館では所蔵する考古作品の修理を順次行っており、学術的に特に重要な作品については、外部研究者の協力も得つつ、詳細な調査・研究を実施してきた。今後もこのような基礎調査と得られた成果を蓄積することによって、館蔵作品の適切な管理と活用に至る環境を整えてゆきたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	1)収蔵品等及び各博物館の特色に応じた歴史・伝統文化に関連する調査研究 イ 関東地域の社寺所蔵文化財に関する調査研究		
【事業概要】 平成29年度から実施している関東地域の社寺に伝存する文化財の悉皆調査。新型コロナウイルス感染症感染拡大防止の観点から2年度以降、一時中断していた東京都目黒区の祐天寺所蔵文化財に対する調査を再開した。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	列品管理課長 沖松健次郎
【主な成果】 (1) 調査の概要 2年度まで行っていた絵画作品の調査の続きを行った。 今回は、前回までに調査をしていなかった、涅槃会で掛けられた大型の涅槃図など仏画2件に、近世絵画を中心にした11件を加え、合計13件を対象として2回にわけて調査を実施した。 あわせて、調査をまだ実施していない彫刻、工芸、書跡の各分野の今後の調査予定について祐天寺と協議した。 (2) 調査の成果 ・大型の涅槃図の調査では、人物の顔貌描写に大きな特徴があることがわかり、制作環境を考える上で手がかりを得ることができた。また、修理の必要な状態であることがわかり、調査が対象文化財の保護につながった。 ・狩野派の女性絵師・融女寛好による作品では、男性歌仙を描いた作品に、華やかで可愛い表装裂が取り合わされる珍しい作例があり、女性絵師の感覚によるものなのか、もとの所有者の好みによるものなのか、表装の取り合わせの歴史を考える上で興味深い事例を得ることができた。 ・その他の表具裂においても、徳川家との関係を偲ばせる裂が用いられている作例や、中国製と考えられる裂が用いられている作例など、染織分野の面でも興味深い事例を集めることができた。			
【備考】 調査日数：2日（6年2月13日、6年3月13日） 調査点数：1回目（6年2月13日）2件、2回目（6年3月13日）11件 延べ参加人数：4名			



涅槃図の調査の様子



涅槃図の調査の様子

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	新型コロナウイルス感染症に対する感染防止ガイドラインに従う中で、2年度以降、一時中断していた祐天寺所蔵文化財に対する調査を再開できた。 涅槃図のように調査が修理実施に繋がった作品があったことや、表装の歴史や文化を考える上で興味深い事例がわかるなど、地域の文化財の保全に関する貢献や、表具裂という絵画作品の調査では今まであまり注目されてこなかった観点の導入など、着実な成果をあげつつ調査を進めることができた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画2年目まで新型コロナウイルス感染症の影響で実施できていなかった調査を再開し、主な成果に上げたように着実な成果をあげることができており、次年度以降の計画も、祐天寺と協議をしつつ、各分野との調整を進めているので、中期計画を着実に進められているといえる。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	1)収蔵品等及び各博物館の特色に応じた歴史・伝統文化に関連する調査研究 ウ 収蔵品等の有形文化財に関する調査研究		
【事業概要】 東京国立博物館所蔵の朝鮮絵画約 100 件について、客員研究員の鄭美娟氏（韓国・国立中央博物館研究員）と協力して、撮影および調査研究を行い、館内外での展示等のための基礎データを整備する。			
【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	絵画・彫刻室主任研究員（兼 東洋室） 植松瑞希
【主な成果】 ・概要：東京国立博物館所蔵の朝鮮絵画の撮影を進めた。4月27日、8月18日、10月25日、6年1月25日の計4回にかけて、そのうち29件の調査研究を行って調書を作成した。また、朝鮮絵画史上重要だが保存状態が悪く、積極的に展示に活用できなかったものについては、保存修復室にて応急修理をほどこした。 ・撮影：表装含む全体、本紙全図、部分図、落款印章、付属品などを撮影し、一部を画像検索や Colbase でウェブサイト上で公開した。 ・調査研究：品質形状や員数、計測値、落款印章等、題跋等、付属品、保存状態などの作品基礎データを採取し、鄭氏と議論のうえ、作品名称（主題）、時代・世紀、作者表記（真贋含む）などに修正を加え、調書を作成した。			
			
調査風景		撮影写真（付属品）	
【備考】 調査完了列品件数：29 件			

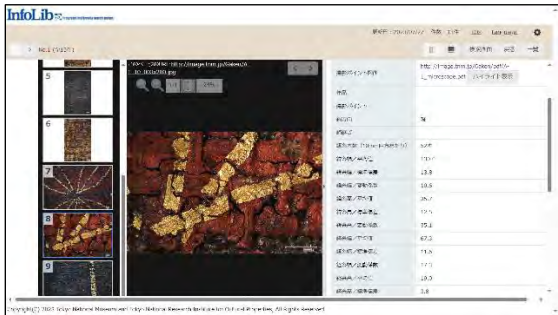
年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	朝鮮絵画は、韓国からの来場者がもっとも興味をもつ東京国立博物館コレクションのひとつである。また、東京国立博物館には朝鮮後期の絵画の優品が多いが、これまで基礎データが不十分であり、十全には活用されてこなかった。本事業により、撮影や調査研究を通じて、展示活用できる所蔵品の範囲が広がり、展示が充実することが期待される。5年度は、計画通り、30件について基礎データを整備することができた。よって年度計画は順調に実施できた。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本事業は5年度に着手し、7年度に完了予定である。5年度は全体のうち約30%について、撮影・調査研究を完了できた。よって中期計画は順調に実施されている。6年度も5年度の内容を継続して行う。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	1)収蔵品等及び各博物館の特色に応じた歴史・伝統文化に関連する調査研究 エ 美術工芸品に用いられた画絹及び染織品の組成にかかる共同研究		
【事業概要】 東京文化財研究所と協力し、画絹（絵画の基底材に用いられた絹製品）を主な対象として、マイクログラフを用い、経・緯の糸の太さや本数の比率、断面形状などを調査・計測し、地域や時代による特徴・傾向を抽出する。			
【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	列品管理課長 沖松健次郎
【主な成果】 5年度は、当館の研究情報アーカイブズにおけるデータベース公開等の準備を進めた。 6月5日と27日、6年2月29日に、博物館情報課とプロジェクト参加メンバーで、テストページに対する協議を実施し、これをもとに、画像や数値のサンプルデータの表示形式、データベース構成について修正を加えた。また、並行してこれまでのサンプルデータのうち、4件（A-1「普賢菩薩像」、A-250「毘沙門天像」、A-10944「一遍聖絵 巻第七」、TA-137「紅白芙蓉図」）の整理を行った。			
			
データベーステストページ			
【備考】			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	4年度に引き続き、データベースの仕様について改善を重ね、公開に向けて準備を進めることができた。 マイクログラフによる画絹の調査計測は、近年、特に日本の学界で注目を集め、盛んに実施されている研究である。ただ、その成果をデータベース上で公開することは、世界的に見ても初の試みであり、画絹およびそれが用いられた作品についての理解を大きく進展させることが期待される。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	4年度の成果を活かし、中期計画の3年目として、調査研究の成果公開（研究情報アーカイブズにおけるデータベース公開等）の準備作業を前進させた。よって、中期計画は順調に遂行できていると考える。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	1) 収蔵品等及び各博物館の特色に応じた歴史・伝統文化に関連する調査研究 オ 東洋民族に関する調査研究		
【事業概要】 東京国立博物館が所蔵する約 3500 件の東洋民族列品を対象として調査研究を行い、展示を充実させる。			
【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	学芸研究部保存修復課保存修復室長 猪熊兼樹
【主な成果】 (1) 調査概要 ・台湾の高雄、屏東、花蓮、台北、烏來の各地において、台湾原住民の集落や工房を訪れて、建築・器物・衣服などの用途・分類および伝統生活文化に関する調査を行った。 ・国立台湾大学人類学博物館、国立台湾博物館、順益台湾原住民博物館、烏來泰雅民族博物館、太巴塢文物館、原住民民族文化園区、三地門郷文化館などの施設において、台湾原住民族の資料の展示活用に関する調査を行なった。 (2) 調査の結果得られた知見 ・当館が所蔵する東洋民族列品のうち、台湾原住民（特にパイワン族、ルカイ族、アミ族、タイヤル族）の建築・器物・衣服の分類や用途に関する知見を得た。 ・当館が所蔵する東洋民族列品のうち、台湾原住民の資料について展示活用に資する知見を得た。 (3) 調査研究の成果 ・今年度の調査では、パイワン族、ルカイ族、アミ族、タイヤル族の集落や工房を訪れて、当館が所蔵する台湾原住民の資料の用途・分類および伝統生活文化に関する有意義な知見を得ることができた。また博物館などの施設を訪れて、展示を見学し、各施設の職員に取材を行なうことで、当館が所蔵する台湾原住民を展示活用するうえで有意義な知見を得ることができた。これらの成果は今後の平常展あるいは特集陳列における展示に活かす。			
			
【備考】 調査メンバー：猪熊兼樹（保存修復室長）、福島修（特別展室研究員）、廣谷妃夏（登録室アソシエイトフェロー） 調査日程：台湾（高雄、屏東、花蓮、台北、烏來）8月29日～9月4日 本調査は、ザ・アール・サーニ・コレクション研究支援事業の支援を受けた。			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	当館の東洋民族列品のうち、台湾原住民資料については、台湾での現地調査が行われてこなかったが、このたび当館の研究員による現地調査によって、台湾原住民資料に関する基礎的な情報を充実させた。 当館が所蔵する台湾原住民資料のうち、特にパイワン族、ルカイ族、アミ族、タイヤル族の建築・器物・衣服の分類や用途に関する知見を得た。 また、当館が所蔵する台湾原住民資料の展示活用に資する知見を得た。 調査期間中に台湾に台風が上陸したために断念した調査は、6年度以降に補完調査する予定である。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	当館が所蔵する東洋民族列品については、中国資料・韓国資料・東南アジア資料・南洋資料・台湾原住民資料などから構成されている。これらの資料は、東洋館の平常展および特集陳列などにおいて展示活用が期待されるため、その分類整理を進めている。 かねてより台湾原住民資料については当館の研究員による現地調査を計画してきたが、5年度に体制が整えることができたので実現した。これによって展示活用できる資料が充実すると考えている。 6年度には、蘭嶼のタオ族の集落などの調査を行うとともに、5年度に台風のために調査できなかった集落の補完調査を計画している。 7年度には、これまでの調査の成果に基づいて、台湾原住民資料に関する特集陳列を計画している。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	1)収蔵品等及び各博物館の特色に応じた歴史・伝統文化に関連する調査研究 カ 特集「親と子のギャラリー 尾・しっぽ」に関連する調査研究		
【事業概要】 恩賜上野動物園、国立科学博物館との三館園連携企画「上野の山で動物めぐり」に関連した特集展示。16回目となる今年度は、「尾・しっぽ」をテーマとし、関連する収蔵品と、動物園、科学博物館からの借用品を一堂に会して展示を行なった。			
【担当部課】	学芸企画部博物館教育課	【プロジェクト責任者】	学芸企画部博物館教育課教育講座室 主任研究員 横山梓
【主な成果】 (1) 事前調査 「尾・しっぽ」に関する館内収蔵作品の選定。各分野収蔵庫にて実見調査を実施。 あわせて、国立科学博物館から本展に借用予定の骨格標本（クモザル）の事前調査、上野動物園から借用予定の尾の実物標本（キリン、クモザル、キツネ、ヤマアラシ）についても事前調査を実施。輸送や展示計画の調整を行った。 (2) 特集展示の実施 4月25日（火）～6月4日（日）に平成館1階企画展示室にて、特集展示を開催。出品件数全32件。展示にあわせたリーフレットを作成、配布。会期中には、1089ブログにて2回、展示の見どころを発信した。 (3) 「上野の山で動物めぐり」オンラインレクチャーの実施 会期中にあたる5月14日（日）に、上野動物園内会議室にてオンラインシステムを使った1時間半のレクチャーを配信。動物園の解説員、科学博物館の研究員とともに、それぞれの専門に則した視点から「尾・しっぽ」について解説を行なった。視聴者数74組（※1組1端末として）レクチャー後は、アンケートを実施した。			
 事前調査の様子  展示風景  オンラインレクチャーの様子			
【備考】 (3) アンケート結果 満足度 90.3%			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本研究では「動物」をテーマに、当館収蔵品の分野（材質）を超えて広く取扱い、一堂に会するという特徴をもち、知られざる収蔵品を紹介する好機でもある。加えて、自然史系博物館・展示施設との連携という点においても、館内でも他に例がない。本年度については、「尾・しっぽ」という特定の部位に着目することで、美術工芸品の多様な見方を提案することができた。あわせて、動物園や科学博物館からの出品によって、生態学的な視点からも理解を深めることが可能となった。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に基づき、作品の事前調査を行い、特集展示にてその成果を提示することもできた。令和6年度以降も、継続して本連携企画及び関連特集展示を実施し、収蔵品の調査研究のさらなる発展に寄与させていきたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	1)収蔵品等及び各博物館の特色に応じた歴史・伝統文化に関連する調査研究 カ 特集「特集初期伊万里の粋-染付から初期色絵まで」に関連する調査研究		
【事業概要】 初期伊万里に関する調査研究、およびその成果としての特集展示。			
【担当部課】	学芸企画部博物館教育課教育講座室	【プロジェクト責任者】	学芸企画部博物館教育課教育講座室主任研究員 横山 梓
【主な成果】 (1) 事前調査 収蔵品のうち、17世紀初めに有田で始まった磁器草創期の作品（初期伊万里）について悉皆調査を実施した。あわせて、京都国立博物館所蔵の初期色絵磁器作品（G 甲 83 色絵花鳥図九角皿）について、借用を実施。なお、本研究は「伊万里焼吸坂手についての一考察：東京国立博物館所蔵の作例を中心に」（『東京国立博物館紀要』第五十七号、2022年3月）の研究もふまえて実施するものである。 (2) 調査成果 ① 特集陳列 5月16日（火）～8月20日（日）に本館14室において特集展示を開催。出品数全30件。 ② 月例講演会 8月5日（土）大講堂にて、同タイトルの月例講演会を実施。参加者302名。			
			
展示の様子			
【備考】 (2) ー② アンケートの回収結果：大変満足・満足 94.2%			

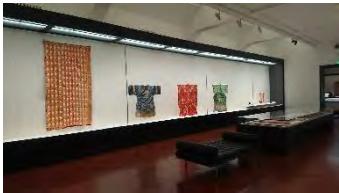
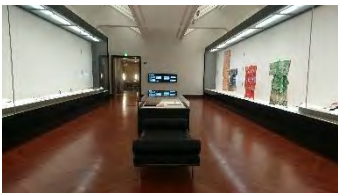
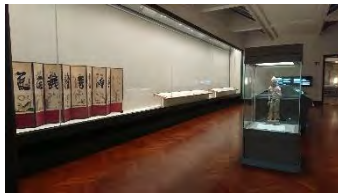
年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	初期伊万里作品については、令和以降寄贈により新たな所蔵作品が増えたこともあり、研究の進展をはかることができ、特集展示によってそれらを紹介する好機となった。あわせて、京都国立博物館の所蔵品も展示することにより、初期色絵作品についての理解を深め、通常の展示とは異なった様相での展示を実現することができた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に基づき、作品の事前調査を行い、特集展示にてその成果を提示することもできた。令和6年度以降も、継続して所蔵品の調査研究のさらなる発展に寄与させていきたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	1)収蔵品等及び各博物館の特色に応じた歴史・伝統文化に関連する調査研究 カ 特集「令和4年度新収品」に関連する調査研究		
【事業概要】 4年度に新たに収蔵品に加わった文化財のうち、寄贈分・購入分より主だった作品を公開し、新収品を通じて文化財収集の意義を紹介した。			
【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	学芸企画部企画課特別展室研究員 高橋真作・学芸研究部調査研究課考古 室研究員 菊池望
【主な成果】 ・各分野担当者による専門的な知見のもと、それぞれの出陳作品について個別に調査研究を進め、各作品解説において最新の情報を提示することができた。 ・出陳作品の概要や法量、希望展示方法、脆弱箇所などを各分野担当者に随時ヒアリングし、平常展調整室やデザイン室等の館内各所と協議を進めながら、効果的かつ安全な展示方法を検討した。 ・5月30日（火）から6月25日（日）までのおよそ4週間にわたり、本館特別1・2室を利用して、34件の新収品を展示した。展示の際は効率的な作業手順となるよう事前に各分野担当者と綿密な打合せを行った。 ・会場の一つとして利用した本館特別1室は、本展示がリニューアル後初めての使用となったが、作業を通じて、ケースの動作方法や室内環境について新たな知見を蓄積することができた。 ・本展示の出陳作品は、今回初めて公開されるものも多く占められた。本展示を通じて、各作品の歴史的意義や保存状態、適切な展示方法等に関する認識をブラッシュアップする重要な機会となった。 ・博物館ニュース 773号「本号のトピック」において、主な作品の解説とともに展示概要を紹介した。			
 特別1室展示風景  特別1室展示風景  特別2室展示風景  博物館ニュース			
【備考】 本館特別1室・特別2室 特集「令和4年度新収品」（5月30日～6月25日） 展示件数：34件			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	当館では日本・東洋各地の質の高い文化財を数多く保有・公開しているが、その全体を体系的に展示していくためには、現在の収蔵品だけでは充分とはいえない。そのため当館では、収蔵品の一層の充実を目指して、毎年、文化財の収集を積極的に行っている。本展では、4年度に寄贈・購入によって収集した作品のなかから34件の文化財を選定し、それらをまとめて紹介することで、博物館における文化財収集の意義を広く発信することができた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	当館のもっとも重要な事業のひとつに位置づけられる「文化財の収集」について、作品展示を通じて広く観覧者に紹介することにより、中期計画を十分に遂行することができた。本調査研究は、単年度実施でありつつも毎年実施している恒例事業であり、今後も継続的に文化財の収集の重要性を発信していく必要がある。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	1)収蔵品等及び各博物館の特色に応じた歴史・伝統文化に関連する調査研究 カ 特集「虫譜づくりの舞台裏—栗本丹洲著『千虫譜』とその展開」に関連する調査研究		
【事業概要】 東京国立博物館が所蔵する図譜コレクションの形成過程、また各図譜の編纂・作成過程・内容の分析を通じた、日本図譜文化の歴史的要遷の研究			
【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	学芸研究部調査研究課書跡・歴史室研究員 長倉絵梨子

【主な成果】

(1) 調査概要

- ・当館所蔵の図譜コレクションは、江戸時代後期～明治中期にわたる幅広い時期、かつ数・種類ともに他の学術機関の中で群を抜くものであり、日本の図譜文化を知るに十分な質量を誇る。本調査は当館所蔵図譜を対象に、日本における図譜の歴史の変遷や意義を追究するという目的のもと、5年度は、コレクション中で大きな割合を占める、江戸幕府奥医師栗本丹洲(1756～1834、丹洲と表記)作成の図譜に注目した。
- ・丹洲が作成した図譜を対象に悉皆調査するとともに、丹洲の図譜は近代以降にも引用・転載されていくことから、当館所蔵の他の図譜との比較調査をした。描かれた図だけでなく、書き込まれた文字情報の分析も行った。
- ・丹洲作成の図譜の中から、虫を対象として作られた図譜について、特集展企画を行った。

(2) 調査で得られた知見

- ・当館所蔵の丹洲作成の図譜、丹洲の他の著作を時系列、かつ、ほぼ網羅的に整理することができた。
- ・当館所蔵の他の図譜との系譜関係や作成・編集過程の一端を知ることができた。
- ・本調査により、図譜に書き込まれた文字情報に注目することで、図譜を歴史資料として活用し得るという視点を見出すことができた。

(3) 調査成果

- ・本館 15 室において「特集 虫譜づくりの舞台裏—栗本丹洲著『千虫譜』とその展開」を開催した。
- ・上記特集に合わせたリーフレット(特集展示と同タイトル)を作成した。



本館 15 室 展示室風景 1



同左 展示室風景 2



リーフレット表紙

【備考】

- ・本館 15 室特集「虫譜づくりの舞台裏—栗本丹洲著『千虫譜』とその展開」(6月20日～8月20日)出品数:30件
- ・リーフレット「特集 虫譜づくりの舞台裏—栗本丹洲著『千虫譜』とその展開」掲載作品数:10件

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	従来の図譜研究は、自然科学や美術史の分野で盛んであった。本調査では、図譜に書き込まれた文章、図譜の内容の引用・転載経緯に注目したことで、当時の人的ネットワークを見出すことができた。また、当館コレクションの形成過程にも踏み込めたことは特筆できる成果であった。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画期間 3 年目として令和 5 年度に実施した調査研究であるが、今後も引き続き展示や出版物等々を通して調査の成果を公開できると考えている。特に今後は、館外の学術機関(東京大学や永青文庫等)所蔵の図譜も分析対象とし、より横断的な調査・研究を行っていきたいと考えている。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究		
プロジェクト名称	1)収蔵品等及び各博物館の特色に応じた歴史・伝統文化に関する調査研究 カ 特集「藤原定家―『明月記』とその書―」に関する調査研究		
【事業概要】 特集展示「藤原定家―『明月記』とその書―」開催に向けた当館列品および寄託品の調査を行ない、古典文化の継承に大きな役割を果たした藤原定家に関わる情報を充実させ、歴史・伝統文化に関心ある当館利用者の需要に応える。			
【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	学芸研究部調査研究課書跡・歴史室研究員 樋笠逸人
【主な成果】			
(1) 調査の概要			
藤原定家に関連する当館の列品および寄託品は、定家の影響を受けた作品、歴史資料を含めると優に 100 件を超えると思われるが、当館での活用は定家自筆として定評ある一部の作品に集中し、悉皆的な検討が進んでいない。本事業では①定家の日記『明月記』、②定家自筆とされる書、③定家と関係の深い人物の書を対象に調査を行った。調査および撮影は、列品管理課アソシエイトフェロー・新井恵理佳とともにを行い、特集展示にて成果を公開した。			
(2) 調査の成果			
・藤原定家の事績を紹介する上で重要となる作品 21 点を精選し、特集「藤原定家―『明月記』とその書―」(会期は 6 月 27 日～8 月 6 日、於 本館 3-1・3-2 室)にて展示した。			
・当館列品および寄託品 33 件を調査、13 件を新規撮影し、最新の研究状況を踏まえて収蔵品情報を更新した。			
・展示対象の当館列品について釈文を作成、当館ウェブサイト上で PDF を公開した。			
・月例講演会「藤原定家の書と『明月記』」(7 月 15 日、於 平成館大講堂)を開催した。			
			
展示風景		釈文 PDF のサイト公開画面	
【備考】			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	独特な書風が書道の趣味層には有名であった藤原定家について、自筆の日記という切り口から定家の人物像に迫る展示を行い、活用機会の少なかった当館収蔵の『明月記』を一挙に公開することができた。月例講演会では定員の350名を超える応募があり、幅広い客層の関心と呼ぶことができた。一方、本事業責任者が機構内他施設へ異動（併任）となった影響もあり、リーフレットの作成を見送り、また平常展調整室の業務負担軽減の観点から、展示室での積文掲載も行わなかった。そうした条件下で、積文PDFデータを公開し、展示室にダウンロード用のQRコードを掲示することにより、歴史や古典文学に深い関心を持つ客層のニーズに応える方法を提案し、実施することができた。と考える。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本事業で対象としたテーマは、『百人一首』や『源氏物語』など、古典文化を代表する作品の成立や継承に深く関わり、書跡にとどまらない多様な作品の展示紹介に繋がることが期待される。他分野の関連作品の調査検討は今後の課題であるが、その中核となる藤原定家自筆の書についてまとまった検討を行い、収蔵品情報の整理を行なった本事業は、中期計画に対して一定の成果を得たと考える。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	1)収蔵品等及び各博物館の特色に応じた歴史・伝統文化に関連する調査研究 カ 特集「儒教の美術―湯島聖堂由来の絵画・工芸を中心にして」に関連する調査研究		
【事業概要】 当館と筑波大学で所蔵する儒教美術に関する筑波大学との共同調査およびその成果発表としての特集展示			
【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	学芸企画部特別展室 福島修
【主な成果】 (1)調査概要 ・当館および筑波大学で所蔵する儒教美術について、当館の特別調査や科学研究費補助金基盤研究(B)「『儒教美術史』構築のための発展的研究―東アジア文化圏の構造解釈と研究資源化」(19H01211)を通じ、同大学と共同で儒教美術の調査を行った。絵画および歴史資料は大橋美織、沖松健次郎、土屋貴裕、古川攝一が担当し、工芸を福島修が担当した。 (2)調査で得られた知見 ・各分野、最新の研究に基づいて作品の位置づけを行った。 ・湯島聖堂由来の積奠器については師範学校(現・筑波大学)と分蔵しており、明治時代に両方で複数の作品を交換していた実態を確認した。 (3)調査の成果 ・調査成果として本館3-1室、3-2室、特別1室において「儒教の美術―湯島聖堂由来の絵画・工芸を中心にして」の特集を行い、これに関連して「『歴聖大儒像』のすべて」「中世の孔子像」「賢聖障子と儒教図像」「湯島聖堂と朝廷の積奠」「積奠器とは」の5章について概要を記したリーフレットを制作した。			
リーフレット 展示風景			
【備考】 展覧会会期：6月27日～8月6日、会場：本館3-1室・3-2室・特別1室、出品件数：38件(うち筑波大学附属図書館所蔵品1件(6幅))、リーフレット掲載件数：17件			

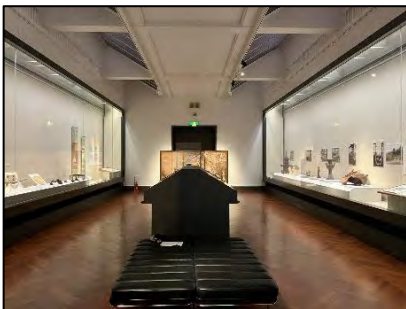
年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	近世の儒教美術の背景となる中世の孔子像や、宮中で使用された賢聖障子屏風を紹介し、また湯島聖堂由来の積奠器に加えて積奠に関する歴史資料を展示することで、より総合的な儒教文化展とした。 当館と筑波大学で分蔵されていた「歴聖大儒像」について、筑波大学から6幅を借用することで、約一世紀ぶりに21幅すべて揃った状態での展示を実現した。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	当館が所蔵する湯島聖堂伝来の積奠器は156件あり、別に津和野藩養老館所伝の積奠器が28件ある。これらは製作年代や献納者が知られる資料が多く、近世の積奠を考える上で基準となるため、その分類整理を進めている。 筑波大学では所蔵の「歴聖大儒像」6幅の修理が4年春に完了し、同年秋に特別展「孔子をまつる：歴聖大儒像の世界」を開催した。当館はこのときに「歴聖大儒像」5幅および積奠器2件を貸与するほか展示作業等でも協力している。本展はこうした共同研究および協力体制のもと実現した。 当館および筑波大学所蔵品は、共通の発祥地と言える湯島聖堂を介して今後も相互活用が見込まれる。 以上から、中期計画を順調に遂行できていると考えられ、B評価とした。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	1)収蔵品等及び各博物館の特色に応じた歴史・伝統文化に関連する調査研究 カ 特集「関東大震災と東京国立博物館」に関連する調査研究		
【事業概要】 大正12年9月1日に発生した関東大震災から100年を迎えるにあたり、震災に関連する当館収蔵品の調査研究等を実施し、その成果に基づく特集展示を開催する。			
【担当部課】	学芸研究部保存修復課	【プロジェクト責任者】	環境保存室研究員 黄川田翔
【主な成果】 (1)実施内容 ・東京帝室博物館における関東大震災の被害、発災後の対応、復旧及び復興の過程について、当館が所蔵する館史写真資料及び歴史資料等を対象に調査した。また、関東大震災をテーマとした他館の展示調査を行った。 ・下記のプロジェクトメンバーで調査を実施した。 黄川田翔、河野正訓、救仁郷秀明、佐藤寛介、長倉絵梨子、古川攝一、増田政史 (2)成果 ・当時、被害件数として計上されている収蔵品以外にも、転倒や落下といった地震被害が非常に多く発生していたことがわかった。博物館建築、展示手法、展示設備等については現在と異なる点が多く、不明な点も少なくないが、大規模地震発生時における展示空間内の損傷挙動について有益な情報を得ることができた。 ・調査研究の結果を踏まえ、本館特別2室において特集「関東大震災と東京国立博物館」を開催した。 ・その他、主な展示作品を紹介したリーフレットを製作した。また、月例講演会にて成果を報告した。			
			
展示会場の様子		リーフレット	
【備考】 ・特集「関東大震災と東京国立博物館」会期：7月11日～9月3日／展示作品件数：26件（一部、前後期入れ替え） ・関連展示の調査：2回（4月20日 東京都復興記念館、9月1日 国立科学博物館） ・撮影：関東大震災関連の所蔵品3件 ・リーフレット「特集 関東大震災と東京国立博物館」 編集・発行：東京国立博物館、文化財防災センター／発行部数：6,500部 ・月例講演会「関東大震災と東京国立博物館」開催日：9月2日／会場：平成館大講堂／参加人数：285名 ・メディア掲載：2件（8月10日美術展ナビ、9月1日新美術新聞 No.1638）			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本調査研究では、関東大震災を切り口に、災害史並びに博物館防災と当館収蔵品を関係付けながら情報収集と分析を行い、その成果を特集展示として適切な時機に公開することができた。現在、首都直下地震や南海トラフ地震といった大規模地震発生切迫性が指摘されている中、我が国では国土強靱化が推進されているところであるが、特集展示や月例講演会等を通じて、博物館の立場から観覧者の防災意識の向上に寄与することができたと考える。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画の3年目として、関東大震災をテーマに当館の特色ある収蔵品について基礎的な調査研究を行い、また歴史・伝統文化のみならず、防災の理解促進に資する展覧事業を実施することができた。また、今回の成果は博物館の防災意識の向上に資するものであり、6年度以降における収蔵品の保存・活用の推進や次代への継承に関しても発展させていく。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究		
プロジェクト名称	1)収蔵品等及び各博物館の特色に応じた歴史・伝統文化に関連する調査研究 カ 特集「姫君婚礼につき一蒔絵師総出の晴れ舞台」に関連する調査研究		
【事業概要】 当館で所蔵する婚礼調度に関する調査およびその成果発表としての特集展示			
【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	学芸企画部特別展室 福島修
【主な成果】 (1)調査概要 ・当館で所蔵する紀州徳川家十代・治宝の娘、豊姫所用と伝わる「竹菱葵紋蒔絵婚礼調度」一式を中心に、女乗物ほか近世の婚礼に関する作品について造形および伝来を調査した。作品調査は福島修、猪熊兼樹が担当し、一部作品についてCT撮影を宮田将寛が行い、野中昭美が応急修理した。 (2)調査で得られた知見 ・「竹菱葵紋蒔絵婚礼調度」は多彩な器形が揃うが、三棚など主要な道具が欠けており、道具一式としての成り立ちに不明な点が多い。今回の調査を通じて道具ごとに蒔絵の表現に微妙な相違があること、また保存状態に差があることが確認され、その製作体制を明らかにするための大きな足掛かりを得た。 ・同調度中の箏については新たに修理の過程で槽内に宝暦十年の年紀と江戸の御用琴三味線師「柏屋因幡」の焼印が認められたほか、CT撮影を通じて大規模な改変が加えられていたことが判明した。 ・調査の過程で、同調度中の目録箱ほか数点に蒔絵印（根引紋）が確認された。これまで『南紀徳川史』の記述から幕末に再利用された可能性が指摘されており、この印はその証左となりうるものと推察された。 (3)調査の成果 ・調査成果として平成館企画展示室において「姫君婚礼につき一蒔絵師総出の晴れ舞台」の特集を行い、これに関連してリーフレットを制作した。 ・特集展示会期中に福島修、猪熊兼樹が「1089 ブログ」において、それぞれ出品作に関連するトピックについて執筆し、研究成果の周知と入館者誘致を図った。			
 リーフレット  展示風景  展示風景  展示風景			
【備考】 展覧会会期：7月25日～年9月18日、会場：平成館企画展示室、出品件数：16件 リーフレット掲載件数：9件			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本研究は、通常まとまった形で展示することのない「竹菱葵紋蒔絵婚礼調度」を一括展示することで、近世大名婚礼調度の壮麗さを体感できる空間を現出することとともに、器種ごとの造形を比較検討して制作背景に関する考察を深めることを目的として遂行した。調査を通じて各作品の状態を再確認したほか、修理を要する作品について応急修理を施し、その過程で新知見を得た。同調度のほか当館には「種姫婚礼行列図」など紀州徳川家関係の作品を多く所蔵しており、本特集展示ではこれらを同時に展示することで近世大名の婚礼について多面から知見を深める機会とした。その成果として婚礼調度について解説したリーフレットを刊行し、その歴史と意義を一般に広く周知した。今後は調査成果を踏まえ、他館所蔵品を含めて考察範囲を広げたい。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に基づき5年度に行ったCT撮影による素地構造の調査からは多くの情報が得られたが、調査対象が一部の作品に留まり、「竹菱葵紋蒔絵婚礼調度」全体を見通す見解を特集展示において示すことができなかった。6年度以降は調査対象を広げ、たとえば特殊な蒔絵印を有する作品とそれ以外との比較や、他館所蔵の同意匠作品の検討を通じて同調度の成り立ちに近づく考察が可能になると考える。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	1)収蔵品等及び各博物館の特色に応じた歴史・伝統文化に関連する調査研究 カ 特集「日本初のチベット探検―僧河口慧海の見た世界―」に関連する調査研究		
【事業概要】 特集「日本初のチベット探検―僧河口慧海の見た世界―」の開催を目的として、対象となる寄贈作品および関連作品について調査を行う。			
【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	学芸研究部列品管理課主任研究員 西木政統
【主な成果】 (1) 実施概要 ・事前調査及び撮影：5月1日、22日、29日、7月19日、24日、8月7日、10月4日、11日 ・プロジェクト担当者：西木政統（同上） (2) 主な内容 ・昭和48年(1973)に姪の宮田恵美氏によって東京国立博物館に寄贈された河口慧海の旧蔵品について、チベット彫刻は客員研究員田中公明氏、中国彫刻は同石松日奈子氏との共同調査により、その製作地や製作年について再検討を行なった。寄贈品のみならず、関連作品を加えた総展示件数は25件となった。 ・その成果は特集「日本初のチベット探検―僧河口慧海の見た世界―」（会期8月22日～10月9日 於本館14室）にて公開した。 ・代表的な作品を掲載したリーフレット（4頁）を発行し無料配布するとともに、公式サイトでPDFを公開した。 ・オンラインギャラリートーク（【オンラインギャラリートーク】8月「河口慧海のチベット探検」）を製作し、YouTubeの公式チャンネル上で公開した。 ・「1089 ブログ」に「チベットを旅した河口慧海の宝箱」（9月7日）を執筆した。 ・同時期に開催された堺市博物館による展覧会「河口慧海 仏教探究の旅」（会期9月2日～10月15日）を企画した同館学芸員堀川亜由美氏、監修者の奥山直司氏と意見交換を行った。			
			
展示風景		リーフレット	
		オンラインギャラリートーク	
【備考】 ・西木政統（執筆）東京国立博物館編集『特集 日本初のチベット探検―僧河口慧海の見た世界―』東京国立博物館、8月22日			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	日本人として初めてチベット入りを果たした河口慧海の旧蔵品が寄贈されてから50年という節目を迎え、「河口慧海将来品とラマ教美術」（平成11年1月5日～3月14日）以来、約20年ぶりに寄贈品の全貌を公開した。客員研究員と共同調査を進め、従来活用の機会に恵まれなかった一連の作品を展示することが可能となったのは特筆すべき点である。以上から当初の年度計画を上回る成果を達成することができたと言え、A評価が妥当であると考えられる。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	文化財に関する基礎的かつ総合的な調査研究の成果を、展覧事業・教育普及活動等に反映できたことにより、中期計画を遂行できている。今後もチベット仏教関係資料の調査研究を継続しつつ、多角的な情報発信を心掛けたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	1)収蔵品等及び各博物館の特色に応じた歴史・伝統文化に関連する調査研究 カ 特集「創立 80 周年記念 常盤山文庫の名宝」に関連する調査研究		
【事業概要】 公益財団法人常盤山文庫が収蔵する作品の悉皆調査、およびその成果発表としての特集展示と図録制作。			
【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	学芸企画部出版企画室 三笠景子
【主な成果】 (1)調査概要 ・創立 80 周年を記念して常盤山文庫の収蔵品（寄託出品）の調査と、特集の企画と図録編集を行った。 日本絵画は高橋真作、中国絵画は植松瑞希、書跡は六人部克典、日本彫刻は増田政史、中国漆工は福島修、中国陶磁は三笠が担当した。 (2)調査で得られた知見 ・各分野、最新の研究に基づいて個々の作品の位置づけを行った。 ・菅原通済氏、壽雄氏、春雄氏の三代にわたるコレクション形成の経緯を知ることができた。 ・東京国立博物館所蔵品との関連から相互活用の意義を見いだすことができた。 (3)調査成果 ・調査成果として東洋館 8 室において「創立 80 周年記念 常盤山文庫の名宝」の特集を行い、これに関連して名品図録『常盤山文庫創立 80 周年記念名品選 蒐集のまなざし』を常盤山文庫と制作した。 ・特集「創立 80 周年記念 常盤山文庫の名宝」期間中には、東洋館 5 室（中国の陶磁）、また本館 11 室（彫刻）で、一部に常盤山文庫の作品を用いて通史展示を行い、入館者の誘致を図った。 ・特集期間中に成果を各担当者が 1089 ブログで発信した。			
   展示風景			
【備考】 当館出品点数：190 件 東洋館 8 室特集「創立 80 周年記念 常盤山文庫の名宝」（8 月 29 日 ～ 10 月 22 日）展示件数：84 件 名品図録「常盤山文庫創立 80 周年記念名品選 蒐集のまなざし」掲載件数：96 件			

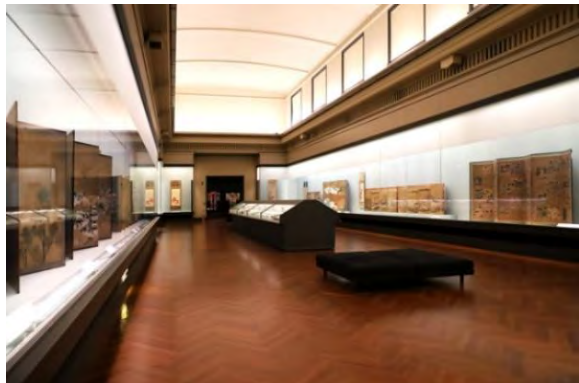
年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	本研究は、これまで当館でまとめて展示を行ったことのなかった公益財団法人常盤山文庫のコレクションについて、最新の研究成果を反映して絵画・書跡・漆工・陶磁の各分野において調査整理を行い、その成果として異なる分野の作品が一堂に会した特集展示を企画し、総合的な名品図録を刊行したものである。日本を代表する第一級の墨跡を有し、さらに歴代理事長のもとで収集と研究活動を精力的に行ってきた常盤山文庫コレクションの歴史とその意義を一般に広く周知することができた。以上により、当初の年度計画を上回る成果を達成することができたので、A 評価が妥当であると考えます。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画3年目として5年度に開催した特集展示にて示した調査成果を受けて、6年度以降も東洋館、および本館の各展示室において常盤山文庫の作品、またこれに関連する東京国立博物館の収蔵品の展示を行うことができると考える。さらに、本調査で得た知見を活かした調査、研究活動も今後継続して続けたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	1)収蔵品等及び各博物館の特色に応じた歴史・伝統文化に関連する調査研究 カ 特集「近世のやまと絵－王朝美の伝統と継承－」に関連する調査研究		
【事業概要】 5年度秋、当館では特別展「やまと絵 受け継がれる王朝の美」を開催する。特別展では古代中世のやまと絵作品を紹介するが、これに続く近世にもやまと絵は描き継がれてきた。本プロジェクトでは、館蔵品、寄託品の近世やまと絵の調査研究を進め、これらの成果を特集「近世のやまと絵－王朝美の伝統と継承－」で公開することを目的とする。			
【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	絵画・彫刻室長 土屋貴裕
【主な成果】 (1)調査の概要 当館には多くの近世やまと絵が所蔵、寄託されている。これらの作品は総合文化展での展示等に活用してきたが、悉皆的な調査は実施してこなかったためその全体像については明らかではなかった。調査にあたっては、①やまと絵の基本である四季や景物を描いた作品、②各流派を代表する絵師による作品、③宮廷ゆかりの作品、の三点に着目して進め、特集での章立てに発展させた。 (2)調査の成果 調査研究を進めた作品は数多くあるが、これらを精選し、特集「近世のやまと絵－王朝美の伝統と継承－」で展示した。会期は9月5日～12月3日、会場は本館7、8、特別2室で、前後期の展示替により総件数86件を展示した。また、リーフレットを刊行するとともに、特集展示作品を中心に解説を加えた『東京国立博物館所蔵 近世やまと絵 50選』（松嶋雅人、土屋貴裕、大橋美織執筆。吉川弘文館）を出版した。			
			
展示風景		リーフレット	
【備考】			
		吉川弘文館より刊行した書籍	

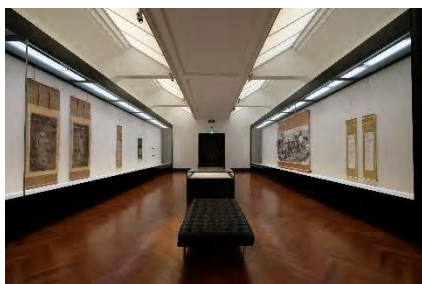
年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	特別展にテーマを合わせた特集として、関連する作品の調査を集团的に進めることができた。特に、従来あまり顧みられていなかった作品を見出すことができ、今後の展示等の活用にも期待が持てることも大きな成果の一つである。その成果を館内刊行物のみならず、外部の出版社と連携して刊行できたことも、今後の一つのモデルケースを提示しえたと思える。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に基づき、作品調査の実施、調査研究、展示公開という流れに沿ったプロジェクトを進めることができた。ただし、今回調査しえたもののほかにも、当館にはまだ多くの近世やまと絵作品が収蔵されている。外部有識者の助力も得て進めていきたいが、新型コロナウイルス感染拡大防止の問題ともかかわって、これらのさらなる調査研究については今後の課題としたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	1)収蔵品等及び各博物館の特色に応じた歴史・伝統文化に関連する調査研究 カ 特集「東京国立博物館の寒山拾得図―伝説の風狂僧への憧れ―」に関連する調査研究		
【事業概要】 本特集は、表慶館で開催された「横尾忠則 寒山百得」展（9月12日～12月3日）に連携し、当館の所蔵・寄託にかかる寒山拾得図を一堂に公開したものである。寒山と拾得は中国・唐時代に生きた伝説上の詩僧で、自由で何ものにも捉われない「風狂」の境地が禅林で尊ばれ、東アジア全域で盛んに絵画化された。本特集では、中国や日本で描かれた寒山拾得図の優品を集め、各時代におけるさまざまな表現を通して、人々が寒山拾得を見つめた様相を跡付けた。			
【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	学芸企画部長 松嶋雅人
【主な成果】 (1) 調査の概要 本特集は松嶋雅人・植松瑞希・大橋美織・高橋真作が担当し、伝統的な東洋絵画の画題として知られる寒山拾得図について、中国と日本、また中世から近代に至るまでの各時代を通覧しながら、当館収蔵品の精査を行った。各研究員が担当分野作品について知見を深めるとともに、それらを盛り込んだ解説文の執筆を行った。また画像データのない作品については新規に撮影を行い、今後の収蔵品の活用にも役立てた。 (2) 調査の成果 改めて館蔵品・寄託品の精査を進めることで、中国・元時代に描かれた伝顔輝筆「寒山拾得図」や、室町時代に描かれた伝周文筆「寒山拾得図」といった古典の名画から、恋文を読む娘と掃除をする女性とを寒山拾得に見立てた浮世絵、幕末明治期に活躍した河鍋晩斎による巨大な掛軸作品など、多種多彩な優品を取り揃えることができた。また調査で得られた知見をA3二つ折リーフレットにて提示するとともに、それをウェブサイト上で公開することにより、より広く研究成果を広めることができた。			
			
展示風景		展示風景	
			
		リーフレット	
【備考】 特集「東京国立博物館の寒山拾得図―伝説の風狂僧への憧れ―」 会期：9月12日～11月5日 会場：本館特別1室 総出品数：18件 主催：東京国立博物館、読売新聞社、文化庁 協賛：紡ぐプロジェクト協賛企業			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本特集では、「寒山拾得図」という伝統的な画題に着目し、中国と日本において寒山拾得が表した意味を考え、人々がどのようにその世界観を見出してきたかを問うことができた。また本特集は、表慶館で開催された「横尾忠則 寒山百得」展と連携した事業であるが、現代美術家である横尾忠則の作品を理解するうえでも、ここで紹介した古典作品へのアプローチがきわめて有効であることが再認識された。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	「寒山拾得図」という共通のテーマを設定することにより、時代・地域を広くまたぐ横断的な収蔵品調査を進めることができた。また表慶館における特別展との連携事業であることから、来館者の館内巡回に関する新規開拓にも大きく寄与したといえる。本特集で得られた成果は、今後の館内事業全般に応用することも可能であり、さらなる研究の進展が望まれる。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	1)収蔵品等及び各博物館の特色に応じた歴史・伝統文化に関連する調査研究 カ 特集「仏画のなかのやまと絵山水」に関連する調査研究		
【事業概要】 本研究は、仏画に見られる自然景、山水表現に注目し、同時代のやまと絵に描かれた山水表現との比較検討を試みるものである。やまと絵は宮中の絵画需要を満たす、宮廷絵所に所属する絵師によって描かれるもので、仏画は絵仏師や画僧によって描かれた。従来、仏画に見られる山水表現は、同時代のやまと絵のそれと共通すると漠然と考えられてきた。しかしながら、一見同じように見える山水表現も描き手が異なる以上、何らかの違いがあるのではないかという問題意識のもと、列品及び寄託品から、山水表現が見られる仏画について考察の対象とした。その際、原本に容易にアクセスできないものの重要な作例については、当館に所蔵される模本を積極的に活用した。			
【担当部課】	調査研究課	【プロジェクト責任者】	教育普及室研究員 古川攝一
【主な成果】 (1) 仏画に見られる山水表現の概要をつかむことができた 浄土図、来迎図、垂迹画に山水表現を見出すことができるが、なだらかな山容、温雅な彩色など、基本的にはやまと絵の山水表現と共通する。一方、描線や形状、画面構図に着目すると、やまと絵山水の方が、統一性が認められ、一定の範囲の中に表現の幅が収まっており、仏画とやまと絵の違いを考える手掛かりになることが分かった。 (2) 模本の有用性を確認できた 平安時代のやまと絵山水の基準作例である平等院鳳凰堂壁扉画は、当館に田中訥言が描いた模本（A-1521）が所蔵される。淡彩が美しい優品で、原本では見えにくい、繊細な描線も写されており、原本の復元的な考察に、模本の活用が有効であることが分かった。 こうした成果は、5年度実施の特集「仏画のなかのやまと絵山水」及び作成したリーフレットで公開した。			
			
		(左) A-1521「平等院鳳凰堂壁画（模本）」田中訥言模の調査の様子。 15枚が折りたたまれて収納されており、展示の際は工夫が必要であった。 (右) 特集「仏画のなかのやまと絵山水」での展示の様子。 展示に適するよう、フラットニングを施し、布製の支持具にマグネットを用いて固定した。	
【備考】 展覧会会期：9月20日～12月3日、会場：本館3室、展示件数：27件(前後期の展示替あり)			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	やまと絵の山水表現と仏画における山水表現は類似すると考えられてきたが、描線や構図に着目すると、両者に違いが見られることが明らかとなった。こうした見解は、5年度に調査した作品から得られた見解であり、次年度以降、対象作品を広げることで、時代による差異、あるいは共通性について考察を深めていきたい。一方、当館所蔵の模本を活用できた点は、コレクションの活用という点及び、原本を容易に見ることができない作例を考察する点で、有意義であることが分かった。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に基づき、作品調査を行い、それに基づいて研究をし、展示公開を行うという所蔵作品を核にした調査研究を進めることができた。とりわけ仏画の背景に注目し、従来とは異なる視点でコレクションを再評価するという点では大きな意義があった。模本の活用についても同様である。なお、成果の公開については、特集展示という形で示したが、リーフレットやトータルブログでの成果披露のみならず、ギャラリートークや、山水表現に着目したワークショップなど、本研究の教育普及事業への展開は、今後の課題としたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	1)収蔵品等及び各博物館の特色に応じた歴史・伝統文化に関連する調査研究 カ 特集「羽黒鏡―霊山に奉納された和鏡の美」に関連する調査研究		
【事業概要】 当館では山形県鶴岡市羽黒山に所在する出羽三山神社の社前に広がる御手洗池から出土した小型の鏡、いわゆる羽黒鏡を都合 58 面所蔵している (E-15385～15442)。和鏡の優品として知られるこれらを一堂に会して展観する特集「羽黒鏡―霊山に奉納された和鏡の美」(9 月 26 日～11 月 19 日)を実施するに伴い、これに関する調査研究を行った。 なお、本特集では、和鏡の優品として知られるこれらを一堂に会して展観し、羽黒鏡の特色や和鏡の特色を示し、和鏡の形式と展開について通覧する機会とした。また、同時期に開催されていた「特別展 やまと絵―受け継がれる王朝の美」(10 月 11 日～12 月 3 日)を補完し、金属に表現されたやまと絵世界を展示することも企図した。			
【担当部課】	調査研究課	【プロジェクト責任者】	清水 健
【主な成果】 4 年度に行った全点の写真撮影に続き、5 年度は全点の採寸を行い、館内データベースに登録した。また、これまで当館所蔵の羽黒鏡については、『東京国立博物館図版目録 和鏡篇』(昭和 44 年)に図版及び基礎データが収載されていたが、本書は所蔵する和鏡を形式別に分類しており、羽黒鏡が様々なページに点在していて網羅しにくいところがあったため、羽黒鏡のみを並べた出品リスト(名称、列品番号等を収載)を作成し、ウェブサイトにおいて公開した。展示会場は羽黒鏡を形式的に分類した上で、形式ごとに概ね年代順に並べ、題箋の解説を以て様式展開の試論を示した。また、形式ごとに分類してコーナーとし、それぞれ特色を示した展示パネルを掲出した。加えて、従来あまり試みられることのなかった鏡の鑑賞上の留意点(鏡面ではなく鏡背を展示していることや素材である青銅の解説など)や羽黒鏡全体の特色、和鏡の説明を記した鑑賞を補助するパネルを掲出し、観覧の手助けとした。さらに、出羽三山神社・御手洗池の写真パネルを掲出し、理解の促進に努めた。 1089 ブログとして、展示品を通じて和鏡の成立と展開を論じた「和鏡への道のり」(10 月 17 日公開)、及び和鏡の文様表現の多様性と特色について論じた「和鏡の文様を愉しむ」(10 月 24 日公開)を執筆・公開し、会場にも QR コードを設置して、鑑賞の補助や普及に努めた。			
			
会場風景(1089 ブログ「和鏡への道のり」より) 出品リストの公開ページ			
【備考】 展覧会会期:9 月 26 日～11 月 19 日、会場:平成館企画展示室、展示件数:58 件 出品リストを公開。1089 ブログ掲載 2 回。			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	出羽三山神社や黒川古文化研究所、細見美術館など他の機関にも多数が所蔵される羽黒鏡について、これまで当館所蔵品全点が同時に公開される機会はなかったと考えられ、羽黒鏡、延いては和鏡の研究上、比類のない機会が提供できたと思料される。また、全点写真付きで公開することは叶わなかったものの、これらを抽出してリスト化したことで、今後公開データベースなどを利用したアクセスが容易になり、研究上に資するところは小さくないと推測される。加えて、「特別展 やまと絵」と併せて観覧することで、「やまと絵」への理解が一層深まり、日本美術史の面白さや多様性に気付く機会を提供できたものと考えられる。 他方、予算の関係で、リーフレット等の刊行物を作成できなかったのは残念であり、写真も新撮しているので、成果の公表については『東京国立博物館セレクション』など当館の刊行する他の媒体で改めて行う機会があればと思う。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	館蔵品についての地道な調査・研究の成果を、展示を通じて公表することができ、一定の目標が達成されたものと思料される。6 年度以降も一層館蔵資料の調査・研究を進め、新たな切り口や視座を提供することで研究の発展に資するとともに、展示や博物館情報の充実を図り、積極的に発信を行うなどして、広く普及に努めたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究		
プロジェクト名称	1)収蔵品等及び各博物館の特色に応じた歴史・伝統文化に関連する調査研究 カ 特集「日本の伝統模様「秋草」」に関連する調査研究		
【事業概要】 日本には、自然の景物を表わした様々な模様があるが、「秋草」ほど日本人が愛好し、日本独特の模様として愛され続けた模様は他にはないだろう。『万葉集』で山上憶良が歌った秋の七草に見られる秋草は、平安時代には王朝文芸に表される絵巻や料紙装飾の中に表現される秋草表現へとつながり、やがて、宮廷内で用いられる蒔絵調度や鏡などの模様にもあらわされるようになった。平安時代から江戸時代にかけての漆工・陶磁・金工・染織などの工芸品に表現される秋草模様を調査研究し、その成果を特集で展示することにより、国内外から訪れる一般の来館者に、工芸の模様に見る日本の美の形を見つめ直していただく機会とした。			
【担当部課】	調査研究課	【プロジェクト責任者】	調査研究課長 小山弓弦葉
【主な成果】 (1) 調査の概要 日本の伝統的な工芸である漆工（蒔絵・螺鈿）、金工、陶磁、染織に表現された秋草模様がそれぞれの技法によってどのように表現されるのか、また、時代によって、秋の七草の表現が如何に変化していくのかを比較調査した。 (2) 調査の成果 本来、四季を自然の変化を通して感じ取ってきた日本人であるが、旧暦から新暦への変化、気候変動などによって、外国人だけではなく日本人にとっても四季を感じさせる模様は縁遠くなりつつある。本展示で日本の伝統模様の中でも特に日本独特の美意識から生まれた「秋草」の模様を日本の工芸品に表わされた模様と通して紹介することにより、国内外の一般の来館者に日本の伝統文化を周知する機会となった。展覧会の内容は1089 ブログで紹介した。また、秋草模様をわかりやすく図入りで紹介したパンフレットを作成し、可能な範囲でバイリンガル表記とし、来館者に会場で提供したのみならず、今後の博物館教育プログラムにも役立つような形態にした。			
			
展示風景①：秋の七草をパネルで紹介		展示風景②：秋草模様を表わした衣装の展示	
【備考】 展覧会会期：10月11日～11月19日、会場：本館14室、展示件数：24件			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	調査で得られた成果を展示で紹介した。調査によって得られた成果は、海外から訪れる来館者にとっても日本文化を知る契機となるため、リーフレットの内容もできる限り英文で掲載し、理解が深められるように配慮した。また、リーフレットの内容は、本特集だけに編集されたのではなく、今後の教育普及プログラムにも活用できるように配慮した編集とし、データも再利用できるようにした。今後も、日本の別の伝統模様をテーマに特集と組むことにより、多彩な日本の伝統模様をわかりやすく詳細に紹介するコンテンツを蓄積することができる。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	伝統文化を、日本美術を通して紹介し普及していく当館の事業にとって、四季や自然に対する日本人の美意識を反映させた日本独特の伝統模様を紹介することに意義がある。さらに、日本の多様で歴史的にもさまざまな展開を見せる工芸の技術から生まれる繊細で美しい模様の表現を紹介することができた。6年度は、別の日本の伝統模様を調査し、その成果を来館者に紹介する特集をすることで、日本の工芸文化の魅力を紹介する機会を広げていきたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	1) 収蔵品等及び各博物館の特色に応じた歴史・伝統文化に関連する調査研究 カ 特集「中国書画精華―日本におけるコレクションの歴史」に関連する調査研究		
【事業概要】 特集「中国書画精華」は、毎年秋に東洋館 8 室で開催される名品展である。5 年度は、中国書画の日本伝来の歴史をテーマとした。			
【担当部課】	学芸部調査研究課	【プロジェクト責任者】	学芸研究部調査研究課絵画・彫刻室主任研究員（兼 東洋室） 植松瑞希
【主な成果】 (1) 実施概要 ・開催期間：10 月 31 日～12 月 24 日 ・開催場所：東洋館 8 室 ・出品作品数：69 件 ・担当者：植松瑞希、六人部克典（学芸研究部調査研究課東洋室研究員）、猪熊兼樹（学芸研究部保存修復課保存修復室長） (2) 成果内容 ・本事業の関係作品について、撮影をし、伝来を示す鑑蔵印・題跋・付属品等の整理を行った。 ・出品作品のうち、TA-88 竹石図軸、TA-143 六祖截竹図、TA-164 李白吟行図軸、TA-177 夢筠図巻については、鑑蔵印・題跋・付属品等の全テキストの釈文を作成した。 ・上記調査研究をふまえ、当館所蔵寄託の中国書画等のうち、69 件を選定し、伝来時期・鑑賞体系別に、「古渡り（室町時代以前）」「中渡り（江戸時代）」「新渡り（近代以降）」の 3 章構成により展示した。 ・1089 ブログにおいて本事業の成果を発信した。			
			
展示風景		付属品等	
【備考】			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	博物館に所蔵される作品の伝来過程は、社会にあまり認知されてこなかったが、本事業によりその観点の興味深さを伝えることができた。中国書画に対する日本人の価値観・美意識の変遷、伝来時期による中国書画の性格の違いを明らかにした。これらの成果は、所蔵作品の基礎情報として蓄積され、今後の調査研究に活かすことができる。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中国書画作品に関する基礎情報を蓄積し、その重要性を展示・教育普及活動等を通して社会に公開することができたため、中期計画は問題なく遂行できている。今後も同様の調査研究を継続し、基礎情報の質量を増加させていく。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	1)収蔵品等及び各博物館の特色に応じた歴史・伝統文化に関連する調査研究 カ 特集「大聖寺藩（石川県）前田家伝来の能面」に関連する調査研究		
【事業概要】 加賀藩の支藩であった大聖寺藩に伝来した能面 123 面、狂言面 43 面は、三井家や鐘紡を経て現在は文化庁の所蔵となり、東京国立博物館に寄託されている。これらの調査を実施し、その成果発表として特集「大聖寺藩（石川県）前田家伝来の能面」を開催した。			
【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	学芸企画部博物館教育課 ボランティア室長 川岸瀬里
【主な成果】 (1) 実施概要 大聖寺藩伝来の能面、狂言面の調査を実施し、その中から大聖寺藩の能楽の様相を示唆する作品を選び撮影、展示を行った。能面調査は浅見龍介、川岸瀬里が担当し、撮影は吉岡由哲が行った。 また、リーフレットの作成と、月例講演会、ブログの執筆を行った。 (2) 主な成果 大聖寺藩の能面の写しを、大聖寺藩が採用していた宝生流宗家が所持していた。現段階でその経緯や理由は不明であるが、大名家と能楽宗家との関係性や、能面における「写し」について検討するうえでも重要な事例である。 また、能面を改作した可能性という、X線 CT 撮影によって得られた情報を紹介することもできた。			
			
展示室の様子		リーフレット	
【備考】 特集「大聖寺藩（石川県）前田家伝来の能面」（本館 14 室、12 月 20 日 ～ 1 月 14 日）展示件数：23 件 月例講演会「能面の魅力」（12 月 17 日、浅見龍介）			

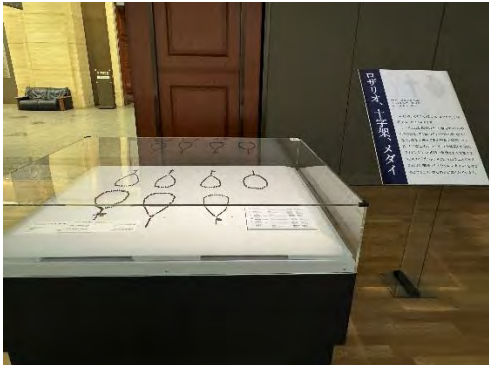
年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	大名家の能楽コレクションの多くは、明治の混乱期に散逸してしまった。そのため現在では、多くの大名家コレクションの全体像を窺うことが難しい。そのなかで、数がまとまって伝来した大聖寺藩のコレクションは貴重といえる。 先行研究では歴史資料との対照が多かったが、今回の調査研究では造形にも注目をした。特に「写し」に着目し、もともになった名物面と大聖寺藩に伝わった名物面の写しを比較したことはほかにあまりない視点であった。こうした研究の実現には、これまで積み重ねてきた能面の調査で得たデータの活用があった。 また、当館で所蔵する能面、特に金春家伝来の能面のなかのいわゆる名物面との比較検討を行えたことで、能面における写しの特殊性を見出すことができた。 更に、今回得た大聖寺藩の能面に関する基礎データは、能面研究のみならず、能楽研究など今後の研究に広く寄与できるものである。こうしたことから評定をBとした。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に基づき、作品調査の実施、調査研究を行い、その成果発表として展示を行うことができた。ただし、今回の調査はあくまで文化庁所蔵の大聖寺藩伝来の能面に限られており、今後大聖寺藩から神社に奉納された能面、あるいは東京国立博物館所蔵の多くの能面との比較検討を実施することで、更に研究を深めていきたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	1)収蔵品等及び各博物館の特色に応じた歴史・伝統文化に関連する調査研究 カ 特集「キリシタンの祈りと聖母マリア」に関連する調査研究		
【事業概要】 館蔵のキリシタン関係遺品のなかの各ジャンルの作品を展示し、日本におけるキリシタン信仰の歴史を紹介した。			
【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	学芸研究部調査研究課絵画・彫刻室 増田政史
【主な成果】 (1) 実施概要 ・作品選定のための調査を実施した。 ・開催期間及び開催場所：11月28日～12月24日 平成館企画展示室 ・担当者：増田政史（同上）、西木政統（学芸研究部列品管理課登録室主任研究員）、児島大輔（学芸研究部調査研究課東洋室主任研究員） (2) 主な内容 ・キリシタン関係品のうち、ロザリオ、十字架、メダイといったキリスト教の信仰の様子を示す品々や、聖母マリアに関連した油彩画やマリア観音像など、59件を展示した。 ・祈りの品（ロザリオ、十字架、メダイなど）や聖母マリアについての会場内パネルを設置して、キリスト教における信仰の様子を解説した。また、踏絵についての会場内パネルによって日本におけるキリシタン信仰の歴史についても紹介した。			
			
展示会場風景（平成館企画展示室）		会場内パネルと展示作品	
【備考】			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	日本においてキリスト教への関心が高まるクリスマスの時期に合わせて開催することで、観覧者に対して、キリスト教の祈りの品々や日本におけるキリシタン信仰の歴史を紹介することができた。また、作品情報に伝来を細かく揭示することで、当館のキリシタン関係遺品の多くが近世を通じて長崎の潜伏キリシタンが伝えてきた貴重な品々であることを示すとともに、各ジャンルの作品から構成されているというコレクションの特色も示すことができた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画の3年目である5年度に、列品の調査研究を通じて、特定のコレクションの特色を紹介するというモデルケースを構築することができた。6年度以降も継続して、列品や関連作品の調査研究を実施して情報および画像データの収集に努め、今回のような特定のコレクションのなかの各ジャンル作品をバランスよく展示するだけでなく、他分野の関連作品なども含めたテーマ性をもった展示も実施していきたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	1)収蔵品等及び各博物館の特色に応じた歴史・伝統文化に関連する調査研究 カ 特集「茶碗 茶の湯を語るうつわ」に関連する調査研究		
【事業概要】 茶の湯の碗に関する調査研究、およびその成果としての特集企画と展示。			
【担当部課】	学芸企画部企画課出版企画室	【プロジェクト責任者】	三笠景子
【主な成果】 (1)調査の概要 ・特別展「本阿弥光悦の大宇宙」開催に合わせ、館蔵品の茶の湯の碗について調査し、特集の企画・展示を行った。 主な担当は、今井敦、横山梓、三笠景子である。 (2)調査で得られた知見 ・従来の茶道研究の見方、および最新研究の成果をふまえたうえで、茶会記の記述に沿った新しい視点で茶の湯の碗をとらえ直すことができた。 (3)調査成果 ・調査成果として本館 4 室において「茶碗 茶の湯を語るうつわ」の特集を行い、これを補うため博物館の茶室で列品の茶湯道具を用いて展示用の動画を撮影、展示室で掲出した。本特集を機に、茶の湯に関する展示を行う本館 4 室を開設パネル・照明等を含めたりリニューアルを行った。また関連企画として月例講演会「和物茶陶の発見と創造」（今井敦、6 年 1 月 27 日 於 平成館大講堂）、および特別講演会「本館 4 室茶の美術リニューアル記念 英語で楽しむ和菓子の魅力」（横山梓、協力：虎屋文庫 6 年 2 月 8 日 於 平成館大講堂）を開催した。			
			
転合庵撮影風景 (1)		転合庵撮影風景 (2)	
【備考】 展覧会会期：6 年 1 月 2 日～3 月 10 日、特集総出品数：23 件 令和 5 年度日本博 2.0 を契機とする文化資源コンテンツ創成事業「東京国立博物館総合文化展の磨き上げによる満足度向上事業」にかかる事業			

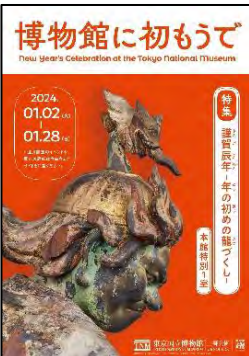
年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	本研究は、当館所蔵の茶の湯の碗コレクションについて調査整理を行い、その成果として最新の研究を反映した特集展示を企画したものである。特別展「本阿弥光悦の大宇宙」との相乗効果や本館4室の展示ケースや展示内容をリニューアルしたこと、関連した講演会を開催したこと等により、海外からの観光客や茶の湯を知らない若年層の来館者を主眼に置き、茶の湯文化についてこれまで以上にわかりやすく紹介するためのコンテンツを生み出し、あらためて多くの観覧者に茶の美術の魅力を発信することができた点は特筆すべき点である。以上から当初の年度計画を大きく上回る成果を達成することができたと言え、A評価が妥当であると考えられる。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	日本文化の象徴ともいえるべき「茶の湯」について、若年層や海外からの観光客など初めての来館者にもわかりやすく伝えるための調査研究、展示の工夫を行うことができた。6 年度以降も引き続き、館蔵品の特徴を活かした博物館ならではの「茶の美術」の展示ができるように努めたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	1)収蔵品等及び各博物館の特色に応じた歴史・伝統文化に関連する調査研究 カ 特集「博物館に初もうで 謹賀辰年一年の初めの龍づくしー」に関連する調査研究		
【事業概要】 特集「博物館に初もうで」は毎年の恒例となった企画で、年初に開催することから多くは当該年の干支をテーマに、各分野を横断して作品を紹介するものである。6年が辰年にあたることから、今回は「謹賀辰年一年の初めの龍づくしー」と題し、当館所蔵品のうち干支にちなんで龍に関わる作品を選定し、展覧会を構成するべく作品の調査を行い、あわせて必要に応じて新規に撮影を行った。			
【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	東洋室主任研究員 児島大輔
【主な成果】 (1) 調査の概要 多分野にわたる館蔵品の中から、各分野担当者の協力を得ながら本企画に適した作品を選定した。また、未撮影の作品等については本展に先立って撮影を行った。得られた画像は、本展で活用されるだけでなく今後の研究基盤として長く活用されることが期待される。本事業は児島大輔(同上)と長倉絵梨子(学芸研究部書籍・歴史室 研究員)が、各分野担当者の協力を得て実施した。 (2) 調査の成果 調査の結果、35 件の出品作品を得ることができた。これまでに活用されてこなかった作品にも新たな価値づけを行い、活用できたことも成果の一つである。今回新規に撮影した画像を含む主要な作品画像と章解説を付したリーフレットを発行し、リーフレットのデータをウェブ上にも掲載することで、成果を広く公開することができた。また、本展の内容を紹介するオンラインギャリートークを行うことで、来館・観覧のこなわなない人々へも成果を公開するとともに、本展観覧者には情報を補完し理解を深める機会を提供することができた。			
 ポスター  会場風景  リーフレット			
【備考】 特集「博物館に初もうで 謹賀辰年一年の初めの龍づくしー」(6年1月2日～1月28日) 総出品数: 35 件			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本特集は恒例となった企画で、5年度は当館所蔵品のうち龍に関する作品を各分野における従前の調査・研究に基づいて集成、選択することで展示を構成することができた。展示構成およびその章タイトルは博物館になじみのない観覧者でも親しみやすいよう、わかりやすく提示した。また、その成果は一過性の展示にとどまらず、リーフレットやオンラインギャリートークとして蓄積することができたほか、広く社会一般に公開できた点は評価に値する。6年度以降も引き続き継続して調査研究を進めていきたい。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に基づき、当該年の干支にちなんだ作品を中心とした展示を行うことで、年初に博物館を楽しむよう企画した特集であり、これまで継続して行ってきた成果の蓄積は大きい。6 年度以降も引き続き継続して館内の各分野担当者との連携をはかりつつ調査研究を進めることが必要で、今後も展示だけでなくさまざまな媒体を利用した方法で成果を公開したい。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究		
プロジェクト名称	1)収蔵品等及び各博物館の特色に応じた歴史・伝統文化に関する調査研究 カ 特集「生誕 180 年記念 呉昌碩の世界—金石の交わり—」に関する調査研究		
【事業概要】 令和 6 年（2024）に生誕 180 年を迎える近代中国を代表する文人、呉昌碩（1844～1927）に焦点をあて、当館の所蔵品・寄託品から、呉昌碩の書画と印譜、および関連人物の作品を調査研究し、特集展示を開催して、呉昌碩の中国書画史における功績を紹介する。本事業における特集展示は、当館と台東区立書道博物館の連携事業の一環として実施する連携企画展示とし、呉昌碩生誕 180 年記念事業として、台東区立朝倉彫塑館、兵庫県立美術館とも時期を合わせて開催する。			
【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	学芸研究部調査研究課東洋室研究員 六人部克典
【主な成果】 (1) 実施概要 ・開催期間及び開催場所：6 年 1 月 2 日～3 月 17 日 東洋館 8 室 ・担当者：六人部克典（同上）、植松瑞希（学芸研究部調査研究課絵画彫刻室主任研究員）、富田淳（前副館長、現九州国立博物館長）、猪熊兼樹（学芸研究部保存修復課保存修復室長） (2) 主な内容 ・当館担当者と台東区立書道博物館担当者（鍋島稲子氏、中村信宏氏、春田賢次朗氏）が連携を図り、本事業の関係作品について調査研究を実施して、画像および資料情報を収集、整理した。 ・当館では、関連する東洋書跡、東洋絵画等 118 件を選定し、「呉昌碩前夜」「呉昌碩の書・画・印」「呉昌碩の交遊」の 3 部構成により展示した。 ・当館、台東区立書道博物館、台東区立朝倉彫塑館、兵庫県立美術館の 4 館の主要な展示作品等 146 件を収録する関連図録（144 頁、当館展示作品 34 件）において、当館担当者が執筆、編集協力を行った。 ・連続講座「生誕 180 年記念 呉昌碩の世界」（6 年 2 月 2～3 日、平成館大講堂）および 1089 ブログにおいて本事業の成果を発信した。			
 展示風景①  展示風景②  関連図録  1089 ブログ			
【備考】 ・台東区立書道博物館編集・東京国立博物館ほか編集協力『生誕 180 年記念 呉昌碩の世界』公益財団法人台東区芸術文化財団、6 年 1 月 2 日			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	呉昌碩は、従来、中国近代の書画史において重要な研究テーマとされてきた。本調査研究では、関連人物の作品を合わせて対象として呉昌碩の作品を相対的・立体的に調査研究し、当館の所蔵品及び寄託品における関係作品について情報を整理することができた。また、特集展示を通して主要な作品を公開し、関連図録、連続講座、ブログ等により、調査研究の成果を広く発信することができた。台東区立書道博物館との連携事業という点では、両館が同時期に同一テーマで開催する連携企画展示の第21回として継続的に実施し、中国書画に関する研究成果を蓄積することができた。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中国書画分野の文化財に関する基礎的な情報整理など調査研究の成果を蓄積し、展覧事業・教育普及活動等を通して社会一般に発信し、中期計画を遂行できている。6 年度以降も所蔵品・寄託品を主として調査研究を継続し、その成果をわかりやすい形で広く発信したい。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	1)収蔵品等及び各博物館の特色に応じた歴史・伝統文化に関連する調査研究 カ 特集「塔と厨子」に関連する調査研究		
【事業概要】 当館所蔵品・寄託品の中から仏塔を表現した造形作品、及び厨子を集め、それぞれの意味や機能、造形的特色、そして相互の関係性などをテーマとした特集「塔と厨子」(6年1月16日～2月25日)を実施するに伴い、これに関する調査研究を行った。 なお、本特集では、仏塔を造立する意味やその具体的な造形表現、厨子の機能と形状との関連等について、多くの作例によって提示し、仏教美術への理解を高める機会とした。			
【担当部課】	調査研究課	【プロジェクト責任者】	清水 健
【主な成果】 従来公開の機会がほとんどなかった館蔵品・寄託品を多数掘り起こし、新規の写真撮影や、採寸などの基礎データの収集・整理等を行い、館内データベースに登録した。また、仏塔と厨子を、「塔の本義」、「多数造塔の功德」、「密教の能作生塔」、「舍利を祀る塔」、「舍利を祀る厨子」、「厨子」の6つテーマに整理し、展示のねらいと解説を付したパネルを展示室に掲出し、併せてリーフレットにまとめ観覧者へ無償配付した。加えて、月例講演会「厨子の世界を開く」(6年2月10日)にて、厨子に関する調査研究の成果を公開するとともに、普及を行った。さらに1089ブログでは、舍利塔の多様な世界を概観し、また多数造塔の事業について諸事例を紹介するなど、この分野に対する理解の促進と普及に努めた。			
			
リーフレット表紙		会場風景 (1089 ブログ「舍利を祀る塔」より)	
【備考】 展覧会会期:6年1月16日～2月25日、会場:本館14室、作品件数24件、A4版2ッ折リーフレットを発行。1089ブログ掲載2回。月例講演会(6年2月10日)。			

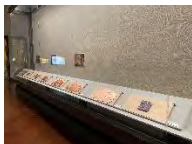
年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	これまで取り上げられる機会がなかった作例を専門的な見地から再評価し、写真やデータの整備、公開を行ったことは、仏教美術研究に新たな素材を提供することとなり、将来的に大きな成果に繋がる可能性を胚胎していると推測される。また、展示を通じて、インド以来の仏教にまつわる造形の変遷や礼拝・供養の作法についての理解を深める役割を果たせたことと思われる。ともに建造物を模した造形を取り上げて特集することで、相互の関連性を示すことができ、仏教美術に対する視座が広がったものと想像される。 とはいえ、今回は日本に関連する作例の紹介に留まり、仏教が広がりを見せた各地域を網羅する汎アジア的な視点を盛り込むまでには至らなかった。今後は東洋担当の研究員などとも連携し、一層大きな視点から研究を行うことが望まれよう。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	館蔵品の掘り起こしと再評価の成果を、展示を通じて公表することができ、一定の目標が達成されたものと思料される。6年度以降も一層館蔵資料の調査・研究を推進し、新たな視点の提供や意味づけを行い、研究の発展に努めたいと思う。加えて、展示や博物館情報のさらなる充実を図り、積極的に発信を行うなどして、広く普及に取り組んでいきたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	1)収蔵品等及び各博物館の特色に応じた歴史・伝統文化に関連する調査研究 カ 特集「親と子のギャラリー 中尊寺のかざり」に関連する調査研究		
【事業概要】 本特集は子どもから大人までを対象に美術作品やつくり方に興味や関心を深めることを目的にして行う教育普及展示である。今回は特別展「中尊寺金色堂」（本館特別第5室、6年1月23日～4月14日）と連携し、「中尊寺のかざり」をテーマにして行う。本特集では中尊寺金色堂で用いられた荘厳具や仏具のかざりを紹介するとともに、漆工(螺鈿)と金工分野を対象にして、そのつくり方に注目して展示する。専門家の制作した模造やつくり方の順序を示す見本を展示し、映像やハンズオンなどを用いることで、幅広い方々に分かりやすく内容を伝えた。			
【担当部課】	学芸企画部博物館教育課教育普及室	【プロジェクト責任者】	学芸企画部博物館教育課教育普及室長 品川 欣也
【主な成果】 (1) 調査の概要 本特集に出品する制作工程模型およびハンズオン、触察ツールを作成するために調査を行った。所蔵品については、重要文化財「獅子螺鈿鞍」(H-3753)や「螺鈿技術記録」(H-4551)など。他館所蔵品では「礼盤(模造)」(文化庁)や「磬架(模造)」、加えて中尊寺金色堂須弥壇格狭間孔雀の調査・撮影・蛍光X線分析を行った。 (2) 調査の成果 調査の成果は制作工程見本「孔雀」として展示活用し、また制作工程を示す手話付き動画「漆の飾り—螺鈿」、触察ツールやハンズオンとして反映させて展示内容の理解を促した。展示解説は日・英を基本としながらも、リーフレットなどは中・韓も用意して多言語化を図り、点字版も準備することで、さまざまな方々が展示を通して調査成果を享受できる環境を整えた。			
 触察ツールの制作風景  展示風景			
【備考】 展覧会会期：6年1月23日～3月3日、会場：本館特別2室、出品作品数：10件 令和5年度日本博2.0を契機とする文化資源コンテンツ創成事業「東京国立博物館特別展による地方の文化財の磨き上げと地方誘客促進事業」にかかる事業			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	本特集の開催にあたって行われた調査で得られた成果を展示（映像・触察ツール・ハンズオン・リーフレット）で紹介した。調査（撮影・蛍光X線分析）によって得られた成果は、一部制作工程見本などに先取りして反映しているが、今後の基礎研究資料として広く活用されることが期待できる。また手話付き動画や触察ツール、そして点字版リーフレットの制作によって得られた教育普及活動にかかるさまざまな知見は今後の同事業の展開に活かすことができる。また展示だけでなく関連するイベントとして障がい者向け特別鑑賞会（1回）やインバウンド関連事業者向け研修（日・英・中・韓の各言語で計4回）、ぬりえシートを用いたワークショップ（3回）を実施し、国内外や世代を問わず多くの方々に向けて中尊寺の魅力を発信し、日本美術への関心を大いに促進したことは特筆すべきで、当初の年度計画を上回る成果といえるためA評価が妥当である。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本特集と特別展「中尊寺金色堂」と連携し相補することで、展示内容の理解をより一層充実させることができた。また、調査成果を踏まえた展示の解説は日・英を基本に多言語化図り、点字版のリーフレットや手話付き動画を用意することで、国内外問わず広く一般の方々に伝えることができた。その結果、中尊寺金色堂やそこで育まれた仏教文化を発信することができ、全国各地に所在する文化財の魅力を伝える一助となった。よって、中期計画を順調に遂行できているといえる。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	1)収蔵品等及び各博物館の特色に応じた歴史・伝統文化に関連する調査研究 カ 特集「おひなさまと日本の人形」に関連する調査研究		
【事業概要】 当館では3月3日の桃の節句にちなみ、恒例で館蔵の雛飾り、江戸時代を中心とした伝統的な日本の人形の特集を行っている。日本の工芸技術を生かした美術的価値の高い人形の数々を調査・研究し、その成果を、かわいらしいものを尊んだ日本の文化における繊細で美しい人形の数々を展覧することで、日本の美意識を改めて紹介する機会とする。			
【担当部課】	調査研究課	【プロジェクト責任者】	調査研究課長 小山 弓弦葉
(主な成果) (1)実施概要 ・開催期間・開催会場：6年2月27日(火)～6年3月31日(日)、本館14室、出品作品数37件 ・担当者：小山弓弦葉(調査研究課長)・沼沢ゆかり(文化財活用センター研究員・工芸室研究員) (2)主な内容 今回の展示では、飾り雛の源流といわれる天児・這子から、立雛や古式次郎左衛門雛、松江藩松平家伝来の雛道具など、雛人形の成立から発展までを見通せる展示を心掛けた。また、京都の老舗人形店が有職装束を精巧に写した有職雛を調査し、初めて展示する機会を得た。また、京都の名産として知られ仏師が内職として始めたといわれる嵯峨人形、宮廷のお土産人形として知られる御所人形などを調査し、嵯峨人形については、展示では見ることでできない動く仕掛けなどを、展示室内のモニターやYouTubeなど動画で紹介し、日本人形の精巧な「からくり」の技術についても紹介した。また、ブログでの同特集展示の周知を行い、広報室のSNSでも積極的に発信した。 近年では、豪華な段飾りなどが一般家庭では実現できない社会情勢を踏まえ、雛壇を飾る様子を動画で撮影し、YouTubeでタイムラプスを紹介するなど、一般のお客様に関心をもってもらえるような工夫も行った。			
 			
YouTubeで公開中のタイムラプス		本館14室「おひなさまと日本の人形」展示風景	
【備考】特になし			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	日本の四季と深く関わる節句の行事に関わる展示は、日本文化を国内外に周知する上で重要である。江戸時代の人形のコレクションをまとめて収蔵する当館において、そのコレクションを有効に活用し、かつ、日本の伝統文化を来館者や海外旅行者に紹介する本事業は必要不可欠であり、毎年継続的に行うべき事業である。 日本の伝統的な工芸技術を生かした人形の調査研究は、数多くの人形をコレクションする当館にとって重要な研究テーマであり、これまでも継続的に展示を行ってきた。その結果、人形コレクションの大規模な寄贈にもつながっている。今後も、本事業を継続する必要がある。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	美術史的価値のみならず、日本の四季に関わる伝統文化としても守り伝えるべき人形に関する調査研究を継続的にを行い、その成果を展覧事業や広報活動などを通して社会一般に発信し、中期計画を遂行できている。6年度以降も所蔵品や新たな寄贈作品の調査研究を継続し、その成果をSNSなども駆使しながら、日本の伝統文化に未知な日本人や海外からの来館者にも親しみをもてるように紹介したい。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	1)収蔵品等及び各博物館の特色に応じた歴史・伝統文化に関連する調査研究 キ 館蔵の埴輪等資料に関する調査研究		
【事業概要】 当館が戦前から所蔵する神奈川県横浜市の瀬戸ヶ谷古墳出土品と記録類を含む関連資料の総合調査である。当該古墳から出土した埴輪群の再検討と再整理を通じて所蔵品を的確に把握し、総合文化展等の展示や他の所蔵品との比較検討等の調査研究に活用する。			
【担当部課】	学芸研究部調査研究課考古室	【プロジェクト責任者】	考古室長 井出浩正
【主な成果】 (1) 調査の概要 瀬戸ヶ谷古墳は神奈川県横浜所に所在する全長約 40 メートルの前方後円墳であり、関東地方南部の 6 世紀後半を代表する古墳である。昭和 18 年及び 25 年に当時の当館職員や地元研究者が中心となって発掘調査を実施したものの、戦前戦後の混乱を受け、当時のまま未登録・未整理となっており、これまで列品となった一部の成果を除きほとんど活用されないままとなっている。そこで、賛助会寄附金「瀬戸ヶ谷古墳出土埴輪の調査研究等」を受け、3 年度より館蔵作品の再検討と再整理を目的とする出土品や記録書類等を含む総合的な調査研究を実施している。 (2) 調査の成果 5 年度は主に、①発掘調査時の記録資料の吟味と既刊の調査概要や当時の日誌等の精査、②発掘調査区ごとの出土埴輪の数量把握と埴輪の分類（円筒埴輪、人物埴輪、器財埴輪等）、③分類した埴輪破片の接合検討等を実施した。 特に、①については神奈川県埋蔵文化財センターにおいて調査関係者の書類や写真等の関連資料が保管されていることが判明したため、所蔵機関と調整の上、資料の実見・調査を実施することができた。			
   書類の実見・調査（神奈川県埋蔵文化財センター） 写真の実見・調査（同） 埴輪の接合検討作業（当館）			
【備考】 当該事業の取り組みを紹介する記事「トーハクの調査研究② 破片一つひとつから古代の謎を解く」が当館広報誌『東京国立博物館ニュース』（第 775 号）に掲載され、調査研究の一部が一般公開された。※11 月 20 日発行			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	5 年度は①発掘調査時の記録資料の吟味や概要報告書や当時の日誌等の精査、②発掘調査区ごとに出土した埴輪の数量の把握と埴輪の分類（円筒埴輪、人物埴輪、器財埴輪等）、③分類した埴輪破片の接合検討を中心に計画を実施した。 ①については、発掘調査当時の状況を知るための調査であり、他機関に資料の実見・調査の協力を得ることができ、当館の取り組みに対する理解と共有を図ることができた。②については、アルバイトの大学院生や学生の協力を得て、前年度から検討している調査区ごとの出土埴輪の数量や埴輪の種類の特定制を継続的に実施した。③については、これまで当館の所蔵作品の中で確認されていない新たな器財埴輪や、展示中である当該古墳出土埴輪の一部の可能性のある破片等の検出等、活用に向けた着実な基礎作業が進捗していると評価できる。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	5 年度は当該事業の 3 か年目に位置づけられる。3 年度の出土埴輪の洗浄とコンテナ箱への簡易的な仕分け作業を受けて、4 年度からの箱ごとに埴輪の分類と、分類を経た埴輪の接合を継続した。作業の効率や必要に応じて、複数の箱単位とした出土埴輪の分類と接合検討作業を実施しており、中期計画に基づき、引き続き適切に進めてゆきたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	1)収蔵品等及び各博物館の特色に応じた歴史・伝統文化に関連する調査研究 ア 近畿地区を中心とする社寺文化財の調査研究 ((4)-①-1))		
【事業概要】 京都国立博物館では、文化財の保存と活用に資すべく、昭和 54 年度より主に近畿地区所在の社寺を対象に伝存文化財の悉皆調査を行っている。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	調査・国際連携室長 降矢哲男
【主な成果】 (1) 2 年度より継続的に実施している大徳寺塔頭・龍光院を対象寺院として、書跡・絵画・工芸を中心に 10 日間 (8 月 28 日～9 月 1 日／2 月 5 日～9 日) の調査を実施した。調査件数は 108 件である。 (2) 調査は完了していたが報告書は未刊行であった建仁寺塔頭(禅居庵・大中院・久昌院)の調査成果の一部を『社寺調査報告』33 (建仁寺塔頭(禅居庵・大中院・久昌院)陶磁編)として刊行した。 (3) 過去に実施した社寺調査の調書・写真を整理するとともに、調書データの電子化を進めた。			
			
		調査風景	
【備考】 (1)龍光院の社寺調査 ・龍光院は大徳寺 156 世の江月宗玩（1574-1643）を実質的な開山とする禅宗寺院。非公開寺院であるが、国宝曜変天目をはじめとする指定文化財を多数有する。 ・新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、龍光院での実地調査はコロナ禍以前の社寺調査よりも参加人数を絞って実施した。 (2)過去の社寺調査におけるデータの整理 ・過去に実施した社寺調査の未刊行分の調書や写真資料等について整理を行い、未刊であった建仁寺塔頭(禅居庵・大中院・久昌院)の調査成果の一部を『社寺調査報告』33 として刊行した。			

調査風景

年度計画に対する総合的評価

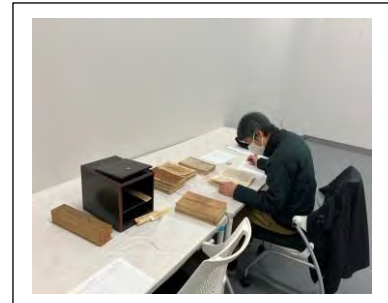
評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	新型コロナウイルス感染症の感染拡大も収まりをみせ、寺院側の全面的協力もあり、4年度の倍にあたる10日間の実地調査（龍光院）を実施することができた。また、報告書刊行に向けて継続的に実施してきた写真整理ならびに調書データの電子化を取りまとめ、『社寺調査報告』として刊行することができた。以上、事業そのものを着実に推し進めることができたため、Bと評価する。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に示した「有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究」事業の一環として、2年度より大徳寺塔頭・龍光院所蔵文化財の悉皆調査を継続しており、5年度は書跡・絵画について全ての撮影・調書の作成を完了し、報告書の刊行に向けての準備を着実に進められた。6年度は工芸を中心に調査を継続する。また、未刊の『社寺調査報告』を刊行し、調査成果を公開することができたため、Bと評価する。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	1)収蔵品等及び各博物館の特色に応じた歴史・伝統文化に関連する調査研究 イ 訓点資料としての典籍に関する調査研究 ((4)-①-1))		
【事業概要】漢文を訓読するために施された、「訓点」と呼ばれる読みを表すための記号は、時代や地域によりかなりの多様性があり、その大半は経典・漢籍・和書などの典籍にみられる。これらに付された訓点により、とくに古代・中世の日本人がどのように本文を読み下していたか、という日本語の有り様が判明する。京都国立博物館では、「守屋コレクション」に代表される、国内外の良質な古典籍を数多く収蔵することから、それらを中心とする調査研究を通して得られた成果を展示や講演、及び刊行など、博物館における関連事業へと還元する。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	美術室研究員 上杉智英
【主な成果】			
(1)訓点の研究には、その特質に応じた専門の学識者が不可欠であるため、調査スタッフに大阪大谷大学教授の宇都宮啓吾氏（日本語学）を客員研究員として迎え、新型コロナウイルス感染症対策を十分に行ったうえで、計4回の調査を実施した。			
(2)調査作品は「大毘盧遮那成仏経疏」や「十二門論」「撰大乘論 卷十五」（以上、館蔵品）など10件に及び、今後の研究にも資するよう撮影を行った。			
(3)本研究と密接にかかわる聖教を特別展、および名品ギャラリーで展示し、記念講演会や図録掲載論文を通して調査成果の公表に努めた。			
【備考】			
・調査回数及び件数4回・10件			
・成果の公開（展示）平成知新館特別展「親鸞聖人生誕 850年特別展 親鸞—生涯と名宝」（3月25日～5月21日）			
・成果の公開（展示）平成知新館特集展示「日中 書の名品」（8月8日～9月18日）			
・成果の公開（展示）平成知新館特別展「東福寺」（10月7日～12月3日）			
・成果の公開（特別展記念講演会）「親鸞 生涯と名宝」（5月6日）			
・成果の公開（講演会）「中国の写経と日本の写経」（9月16日）			
・成果の公開（講演会）宇都宮啓吾「仏書訓点資料入門—文献調査の視点から—」（訓点語学会主催「訓点資料講習会」12月9日）			
・成果の公開（出版物）宇都宮啓吾編『国宝「三十帖冊子」 修理から見えてきたもの』（勉誠社、11月）			



「大毘盧遮那成仏経疏」調査風景

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	プロジェクト責任者が春の特別展の主担当であったため、4年度（調査回数及び件数5回・15件）より調査回数・撮影件数等はわずかに減少したが、一点一点堅実に成果を蓄積している。併せて、調査成果の公開も着実に展示・講演・図録の刊行へと反映できているため、所期の目標は達成していると判断した。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画の3年目である5年度は、これまでの基礎的・探究的な調査及び研究の蓄積を踏まえ、展示・講演会という公衆に対する情報発信にとどまらず、若手の訓点研究者に対する講習会（前掲主な成果(3)）など、多面的な成果発信ができており、着実に中期計画を遂行していると考えため、Bと評価する。6年度以降も引き続き調査・研究を推し進め、文化財の収集・保存修理・展覧等の事業に反映させてゆく所存である。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	1)収蔵品等及び各博物館の特色に応じた歴史・伝統文化に関連する調査研究 ウ 旧家伝来の工芸品に関する調査研究 ((4)-①-1))		
【事業概要】 関西圏を中心に、旧家伝来工芸品の調査を実施することにより、地域の暮らしの在り様を物質的に探る。作品の管理・保存への助言を行うとともに、寄贈・寄託・貸与に結び付け、博物館の収蔵品と展示の充実を図る。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	工芸室長 山川 暁
【主な成果】 ・科学研究費の研究課題として採択された岡山県の野崎家所蔵文化財の悉皆調査を5月、8月、11月、12月、6年1月、3月に実施した。調査は野崎家塩業歴史館と共同で行い、収蔵管理及び展示についての助言も行った。 ・4月に兵庫県高砂市、5月に京都市の旧家の依頼により、人形調査を実施し、5件を受贈した。 ・6月、和歌山市の旧家の整理に当たって調査依頼を受け、染織品の調査を実施した。			
【備考】 野崎家調査 6回 17日間 作品調書 305件、調査画像約 2,300カット 染織調査 1回 2日間 作品調書 20件、調査画像 63カット 人形調査 2回 2日間 作品調書 5件、調査画像 47カット			
			
			漆器調査風景

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	近年の生活様式や社会環境の急激な変化により、地域共同体において中心的な役割を果たしてきた旧家では、邸宅や蔵の建て替え、転居などが進み、収蔵する美術工芸品についての調査が急務となっている。本プロジェクトの目的は、この社会的要請に応え、旧家の暮らしの物質的な基礎データを蓄積し、失われゆく伝統的な生活文化を記録し、今後の研究へつなげることである。本研究では、美術作品の調査とともに、旧家のかつての生業の聞き取り調査等も行い、歴史学・民俗学的な観点からも、美術品をめぐる文化の全体像の把握につとめている。5年度は科研費研究課題である「備前児島の野崎家に伝わる文化財の総合調査：塩田王の美術コレクション」（研究代表者永島明子・基盤研究A）を中心に作品の基礎データ収集を進め、作品調書や画像を蓄積することができた。また、兵庫県高砂市と京都市内の旧家の調査依頼に応え、5件の寄贈に結び付けた。6年度以降も、引き続き基礎データを蓄積するとともに収蔵品の充実に努めたい。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	京都文化を中心とした文化財を収集・展示対象とする当館において、基礎的な研究の一翼を担う事業である。6年度以降も調査を継続し、所蔵者による文化財の収蔵管理への助言を行うとともに、当館への寄託や寄贈へと結びつけ、展示や収蔵品の充実を図る。中期計画の3年目として、順調に課題を遂行できている。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	1)収蔵品等及び各博物館の特色に応じた歴史・伝統文化に関連する調査研究 エ 京都周辺出土の考古遺物に関する調査研究 ((4)-①-1))
【事業概要】 京都国立博物館所蔵の京都周辺出土の考古遺物を中心に基礎的な整理作業や写真撮影をおこない、その研究成果を展示や図録などで一般の方や研究者に向けて広く発信した。また、地方公共団体や大学と連携をとりながら、協力・助言をおこなった。	
【担当部課】	学芸部
【プロジェクト責任者】	考古室長 石田由紀子
【主な成果】 (1) 学芸部考古室の前任者である難波洋三氏を客員研究員に迎え、5年度特集展示「弥生時代青銅の祀り」に関連する当館所蔵の青銅器（銅鐸・銅剣・銅矛・銅戈）を中心に調査・写真撮影をおこなった。また、当館所蔵の弥生青銅器を中心とする展示図録を作成して、広く調査・研究成果の公開に努めた。 (2) 京都周辺出土の考古遺物に関連する調査研究として、舞鶴市由良川床出土縄文土器を取り上げ、出土量の把握、時期等特徴の検討、分類など基礎的な整理を進めた。また、5年度夏の名品ギャラリーにおいて考古展示室のテーマ展示「縄文土器と土偶」にて展示をおこなった。舞鶴市由良川床出土資料に関しては、今後も継続して整理作業を進める。 (3) 京都府相楽郡和束町原山古墳出土の帯金式甲冑および武器武具類に対し、『和束町史』編纂に関する協力・助言をおこなった。	
  (1) 特集展示「弥生時代 青銅の祀り」 (2) 名品ギャラリー：由良川川床出土縄文土器の展示	
【備考】 調査 (1) 弥生時代の青銅器関連の調査 5 回、写真撮影 68 カット (2) 縄文土器 写真撮影 28 カット 成果の公開 (1) ・ 特集展示「弥生時代青銅の祀り」6 年 1 月 2 日～2 月 4 日 ・ 図録『弥生時代 青銅の祀り』34 頁 カラー 6 年 1 月 2 日 ・ 土曜講座 古谷毅「京都と弥生青銅器—研究の歴史と京博コレクションの形成—」6 年 1 月 20 日 ・ 土曜講座 難波洋三「銅鐸の変遷と画期」6 年 1 月 27 日 (2) ・ 名品ギャラリー「縄文土器と土偶」6 月 20 日～9 月 10 日 ・ 土曜講座 石田由紀子「縄目文様から読み解く縄文土器」8 月 19 日	

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	5年度は客員研究員とも連携を図りながら、計画的かつ着実な調査・写真撮影を進めることができた。併せてその成果を、図録や展示、講座等で広く一般の方や研究者に向けて公開することができた。とくに当館所蔵の京都府の縄文時代資料の展示や、特集展示で当館蔵の弥生時代の青銅器を全点一堂に公開することはこれまでになかった試みであり、特集展示の図録を特別に製作したことを鑑み、総合的評価はAと判断した。また、地方自治体の町史編纂に関する協力もおこなっており、今後もこれらの要請に積極的に応えていく。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	資料の整理を計画的に進め、その成果を展示などに活用することは、京都周辺出土の考古資料を多く所蔵する当館の重要な任務である。6年度以降もこれらを計画的に進め、また地方自治体等との連携要請に対しても今後も積極的に応えてゆく。5年度は考古遺物の整理・調査を着実に進め、調査成果を名品ギャラリーや特集展示等に反映させることができた。以上から、中期計画を順調に遂行できていると考える。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	1)所蔵品等及び各博物館の特色に応じた歴史・伝統文化に関連する調査研究 オ 特集展示・特別企画に関する調査研究 ((4)-①-1))		
【事業概要】(1)「特集展示 新収品展」(会期:6月13日～7月17日)・3年から4年に購入や受贈によって館蔵品となった作品を披露(2)「特集展示 茶の湯の道具 茶碗」(会期:6月20日～9月10日)・中国、朝鮮半島、日本とそれぞれの地域で製作された茶碗をその特徴とともに紹介。(3)「特集展示 日中 書の名品」(会期:8月8日～9月18日)・中国と日本の漢字作品の名品を展示。(4)「新春特集展示 辰づくし―干支を愛でる―」(会期:6年1月2日～2月12日)・新春恒例の干支を主題とする展示。(5)「特集展示 弥生時代青銅の祀り」(会期:6年1月2日～2月4日)・当館が収蔵する青銅器の特集展示。(6)「修理完成記念特集展示 泉穴師神社の神像」(会期:6年1月2日～2月25日)重文の神像の修理後の初公開。(7)「特集展示 雛まつりと人形―古今雛の東西―」(会期:6年2月10日～3月24日)・伝統的な年中行事である雛まつりを、人形を通して紹介する恒例の企画展示。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	企画室長 山川暁
【主な成果】 (1)「新収品展」新たに加わった館蔵品を紹介。 (2)「茶の湯の道具 茶碗」関西の茶道具収蔵館9館と連携し、茶の湯における茶碗の位置を確認した。 (3)「日中 書の名品」日中の漢字作品を並べ、両者の共通性や差異を紹介。 (4)「辰づくし―干支を愛でる―」分かりやすい解説文の設置により、身近な干支を通して子どもから大人まで幅広い層が楽しめる入門的な古美術品の展示を目指した。 (5)「弥生時代青銅の祀り」収蔵する青銅器を一堂に展示し、青銅器文化の展開と多様性を確認した。 (6)「泉穴師神社の神像」通常非公開の神像群を展示するとともに、彫刻の修理について紹介。 (7)「雛まつりと人形―古今雛の東西―」江戸製の古今雛を通し、上方の雛人形の変化を考察した。 (2)・(3)・(5)～(7)において関連講座を実施した。			
			
		特集展示 雛まつりと人形― 古今雛の東西― 展示風景	
【備考】 (1)「新収品展」重要美術品2件を含む39件を展示。(2)「茶の湯の道具 茶碗」重要文化財4件、重要美術品2件を含む47件を展示。(3)「日中 書の名品」国宝11件、重要文化財8件を含む27件を展示。(4)「辰づくし―干支を愛でる―」重要文化財6件、重要美術品2件を含む28件を展示。多言語による低年齢層向けワークシートを配付。(5)「弥生時代青銅の祀り」重要文化財3件、重要美術品5件を含む37件を展示。展覧会図録を発刊。(6)「泉穴師神社の神像」重要文化財1件。神像とその修理について紹介したリーフレット作成。(7)「雛まつりと人形―古今雛の東西―」53件。江戸と上方での雛人形の好みの相違について紹介したリーフレット作成。			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	年度計画では5件の特集展示を予定していたが、外部からの打診があり、他館との連携企画である(2)「茶の湯の道具 茶碗」、修理完了を披露する(6)「泉穴師神社の神像」が加わり、7件の特集展示となった。このうち(5)「弥生時代青銅の祀り」は、収蔵する青銅器を網羅し、画像や法量などの基礎データを集積した図録を発刊したことにより、今後の研究上の活用が期待できる。また(7)「雛まつりと人形―古今雛の東西―」は、古今雛と呼ばれる雛人形の分類について再考する内容であり、研究成果が反映されている。例年同様、多分野にわたるバリエーション豊かな展示であり、新型コロナウイルス感染症が収束し、海外からの旅行者も増加したことが影響し、入館者数は4年度を大きく上回った。リーフレットの作成や関連講演会の開催を通し、来館者に文化財に対する理解促進を図ることもできたと考え、Aと評価する。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	日本人が大切にしてきた年中行事を取り上げた恒例の展示、干支をテーマにした「辰づくし」や、桃の節句を祝う「雛まつりと人形」を開催するとともに、名品を集めた「茶の湯の道具 茶碗」「日中書の名品」、修理完成を記念する「泉穴師神社の神像」、研究上の基礎データを提供する「弥生時代青銅の祀り」と、特集展示をバランスよく開催することができた。6年度以降も、計画的に調査・研究を進め、展示を魅力あるものとするよう努力していく。新型コロナウイルス感染症の影響も落ち着き、海外からの来館者も増加する中、多くの人々に日本美術の魅力を伝えることができた。また、リーフレットの作成や関連講演会の開催を通して最新の研究成果を発信することにより、来館者の文化財に対する理解促進を図ることもできたと考え、中期計画策定時に想定していた件数(年間4～5件)を大きく上回る件数の特集展示として成果を結実させていることを踏まえ、Aと評価する。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	1)収蔵品等及び各博物館の特色に応じた歴史・伝統文化に関連する調査研究 カ 日本近代における中国書画の受容に関する調査研究 ((4)-①-1))		
【事業概要】 館蔵の中国書画コレクションは、上野理一や須磨弥吉郎の旧蔵品など、日本近代に活躍した実業家のすぐれた蒐集の成果を継承するものが中核をなしている。明治期に航路が開かれて以降、直接人とモノが往来するようになった時期に行なわれたこれらの中国書画蒐集は、江戸時代以前のものとは性格を異にしており、歴史・文化的な意義を多分に含んでいる。本事業では、館蔵の中国書画コレクションの形成や受容に関連する書簡や記録類など膨大な資料を整理し、目録化や図録の刊行によって基礎データとして活用できるようにすることで、これらの作品群の特色を活かした多角的なアプローチの可能性を拓き、将来の展覧会等での発信につなげていく。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	美術室研究員 森橋なつみ
【主な成果】 ・長尾雨山旧蔵の中国書画関連資料の調査・撮影、目録との突合作業（2 か月に1 回程度、計6 回）			
			
羅君美（羅振玉の長子）から雨山に贈られた墨		白堅から雨山に贈られた拓本と封書	
・図版目録刊行に向けた須磨コレクション作品の目録整理・編集協議			
【備考】 ・調査・撮影、目録整理など客員研究員の呉孟晋氏（京都大学准教授）に全面的な協力をいただいた。			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	長尾雨山旧蔵の中国絵画関連資料については、本年度も継続して状態確認や撮影・調書作成、旧目録との突き合わせなど、4年度よりやや回数を増やして整理・調査を着実に進めた。また、5年度の刊行を計画していた須磨コレクション『図版目録Ⅱ』については、印刷費用の高騰と数年おきの分冊（全5冊を予定）刊行による計画の長期化に対し、より現実的かつ効果的な出版にむけて再協議した結果、全体を1冊に収める方向性が示された。出版計画の大幅な路線変更で、年度内の刊行を見送ることにはなったものの、出版へ向けた準備は着実に進められたといえるため、Bと評価した。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	5年度は調査・撮影の実施回数を増やしたため、4年度より資料整理が捗り、対象資料の全体像をおおよそ把握することができた。出版形態の再検討など一部計画変更もあったが、文化財に関する情報活用のための基礎データは着実に積み上がっているといえ、Bと判定した。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究	
プロジェクト名称	1)収蔵品等及び各博物館の特色に応じた歴史・伝統文化に関連する調査研究 キ 書跡及び絵画の伝来と散逸に関する調査研究 ((4)-①-1))	
【事業概要】 ある作品が生み出されてから、今に到るまでにたどった歴史を考えるにあたり、「伝来」と「散逸」は「だれが所蔵していたのか」「どのように受容されてきたのか」といった、それぞれに固有の情報と繋がるため、重要なキーワードとなる。これらについて、作品及び附属品、あるいは関連資料により得ることのできる知見から、書跡及び絵画のアーカイブ充実を図り、今後の調査研究活動に供する。あわせて、成果を展示、講演や刊行など、博物館における関連事業へと還元する。		
【担当部課】	学芸部美術室	【プロジェクト責任者】 保存修理指導室長兼美術室長 羽田聡
【主な成果】 (1)調査は、新型コロナウイルス感染症の感染対策を講じながら 5 回を実施し、国宝「金剛般若経解題残巻 空海筆」や「阿刀家伝世資料」(以上、館蔵品)、「古文書 附文書袋 3 点」(寄託品)など、書跡の作品を中心に 7 件に及んだ。 (2)調査作品のうち、代々、東寺(教王護国寺)の執行をつとめた阿刀家に伝来した「阿刀家伝世資料」は、1 件で 2,000 点を越す膨大な文書群であるうえ、状態の芳しくないものも存在するため、文化財保護と作業の効率化を図る観点から、調査にあたっては書庫に配架されている紙焼き写真帳 31 冊を積極的に活用した。 (3)「阿刀家伝世資料」には、東寺の絵画及び仏像制作を担った集団、絵所と仏所に関する資料が多く含まれるため、今後、他分野との横断的研究に資するべく東寺絵所・仏所のデータベースを作成した。また、「古文書 附文書袋 3 点」は調査の過程で加賀前田家の伝来品であることが判明し、内容及び形態の面でも重要なため、5 年度に館蔵品として購入した。 (4)知見を公開する手段として展示・発表・刊行を得、5 年度は日本及び中国の「書」の名品に関わる展示を行ったため、両国におけるこれらの受容という観点から、書跡分野で顕著な成果をあげることができた。		
 写真帳による調査  作成した東寺絵所・仏所データベース (部分)		
【備考】 ・調査回数 5 回 7 件 ・成果の公開 (展示) 特集展示「日中 書の名品」(8 月 8 日～9 月 18 日) ・成果の公開 (発表) 羽田聡「中世の高僧伝絵の作画工房について」(公益財団法人仏教美術研究上野記念財団シンポジウム、4 月 23 日) 上杉智英「中国の写経と日本の写経」(土曜講座、9 月 16 日) ・成果の公開 (刊行) 羽田聡「中世の高僧伝絵の作画工房について」(『公益財団法人仏教美術研究上野記念財団研究報告書第 50 冊 浄土真宗を中心とした祖師信仰とその造形』、6 年 1 月)		

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	4年度に比べ、調査件数は減じているが、うち1件は2,000点を越す膨大な数の文書群であり、なおかつ博物館における関連事業への還元については、展示・発表・刊行と同様の成果を得て、初期の目標を達成できていると判断したため。なお、調査対象となった寄託品1件は、伝来のみならず、内容及形態など文化財の有する多面的な重要性を明らかにして、新規の館蔵品購入に繋げた点も、判断の材料としている。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	作品を中心に据えた諸活動を行う博物館にあって、これらに関わる情報を充実させていくことは、最終的に文化財の継承にも繋がるため、根幹に位置する重要な作業であるが、時間を要する。さまざまな業務が錯綜する中で活動を継続し、各種方法により、博物館における関連事業への還元に関して成果をあげている点に鑑み、中期計画3年度として、順調に計画を遂行できていると判断したため。4年度に課題として提示した、書跡と絵画との横断的な成果について、その基礎となる作業を行った点も、判断の材料としている。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	1) 収蔵品等及び各博物館の特色に応じた歴史・伝統文化に関連する調査研究 ア 復元模写制作に伴う仏教絵画の調査研究 ((4)-①-1))		
【事業概要】 仏教絵画の制作当初の姿を復元的に描く模写制作に際し、現状では変色や剥落によって肉眼の観察のみでは判別できなくなっている料絹・料紙や顔料などの素材について、事前に高精細デジタルカメラや蛍光エックス線分析器等を用いた光学的調査を入念に実施し、そこで得られたデータを模写制作に活用・公開する			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	企画室長 谷口耕生
【主な成果】 (1) 広島市立大学が進める当館所蔵辟邪絵（神虫）の模写制作のため、同作品の原本熟覧及び手板色合わせ、蛍光エックス線分析器を用いた顔料調査を実施した。 (2) 東京藝術大学が進める信貴山縁起絵巻模写制作のため、同絵巻（延喜加持巻）の原本熟覧及び手板色合わせ調査を2度実施した。同模写制作にあたっては、東京文化財研究所と当館の共同研究報告書『朝護孫子寺蔵 国宝 信貴山縁起絵巻 調査研究報告書－光学調査編－』『同報告書－研究・資料編－』の成果に基づき使用する顔料の検討を重ねた。 (3) 京都市立芸術大学が進める当館蔵春日宮曼荼羅の模写制作のため、同作品及び関連作品として当館蔵春日名号曼荼羅及び当館蔵春日社寺曼荼羅の原本熟覧及び蛍光X線分析器を用いた顔料調査、デジタルマイクロスコープを用いた顕微鏡写真撮影調査を実施した。 (4) 愛知県立芸術大学が進める当館蔵春日鹿曼荼羅の模写制作のため、同作品の原本熟覧及び手板色合わせ等の調査を実施した。			
【備考】 調査回数：5回（広島市立大学7月10日、東京藝術大学7月13日・9月21日、京都市立芸術大学7月24日、愛知県立芸術大学10月4日、1月30日） 調査作品数：6件（当館蔵辟邪絵1幅、信貴山縁起絵巻（延喜加持巻）1巻、当館蔵春日宮曼荼羅1幅、当館蔵春日名号曼荼羅1幅、当館蔵春日社寺曼荼羅1幅、当館蔵春日鹿曼荼羅1幅）			

東京藝術大学大学院生による信貴山縁起絵巻
復元模写制作（9月21日）



東京藝術大学大学院生による信貴山縁起絵巻
復元模写制作（9月21日）

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	新型コロナウイルス感染症の感染症法上の5類移行に伴い、対面式の文化財調査受け入れの制限が緩和されたことから、マスク着用・手指消毒を徹底しつつ、広島市立大学・東京藝術大学・京都市立芸術大学・愛知県立芸術大学による復元模写制作のため、当館の館蔵・寄託品の熟覧・色合わせ等の作品調査を積極的に受け入れ、当館及び東京文化財研究所の光学機器を用いた顔料・料絹の調査データを提供した。その結果、当館収蔵の仏画作品に関する復元模写制作の精度を飛躍的に向上することが可能となり、模写制作を通じて得られた当該文化財の顔料・基底材等の知見を蓄積することができた。以上の理由により、年度計画を順調に遂行できたと判断し左記の評定とした。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本事業では、中期計画の3年目として、精度の高い光学的調査・熟覧の成果に基づいて彩色・料絹等の復元的考察を加え、芸術系大学が進める復元模写制作に反映するという目標を達成することができた。以上のような成果を蓄積していくことは、絵画作品を中心とする文化財の素材研究にも大きく寄与するものであり、中期計画に沿った事業として順調に推進できたことから、左記の評定とした。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	1) 収蔵品等及び各博物館の特色に応じた歴史・伝統文化に関連する調査研究 イ 古代・中世の写経と聖教に関する基礎的研究 ((4)-①-1))
【事業概要】 我が国には、寺院を中心に古代・中世の写経や聖教が数多く伝来している。それは、人文科学全般にとって重要な研究資料であるが、仏教学以外の分野での利活用は低調である。本研究は、当館の主要な蔵品である古代・中世の写経と聖教を基軸に、文化財学的な立場から資料を調査し、多分野での利用に堪える基本情報の蓄積と提示を目指すものである。	
【担当部課】	学芸部
【プロジェクト責任者】	列品室長 斎木涼子
【主な成果】 (1) 写経等の調査 ・大神神社寄託の典籍について、現在当館文化財修理所において修理中のため、所蔵者や文化庁担当者とともに修理監督を行った。その際、紙質や作成地域の推定など、修理作業中に得られた新知見について共有し、また今後の修理方針について協議した（9月6日）。 ・修理寄託される金峯山寺所蔵の紺紙金字経について、文化庁担当者とともに現状を確認し、修理方針などについて確認した（9月22日）。 (2) 聖教の調査 ・高山寺所蔵の聖教について、外部識者とともに調査を行った（6月13日）。 ・高山寺所蔵の聖教について、外部識者とともに調査を行った（6月21日）。その際に修理が必要なものがあることを改めて認識し、今後検討することとなった。 ・園城寺寄託の智証大師関係文書典籍の保存修理が進んでおり、解体作業の進む典籍等を、智証大師関係文書典籍保存活用専門委員会の委員とともに、修理工房で実見、調査し、紙背の墨書や角筆の有無など、修理過程で得られた新知見を共有した（6月26日）。 ・6年度の特別展「空海」の準備として、教王護国寺（東寺）所蔵の観智院聖教の出陳候補作品の調査を行った（7月10日）。 ・仁和寺聖教調査（文化庁主宰）に、職員1名を派遣した（7月24日）。 ・館蔵品の弘法大師御勘文について、日本古代史の外部学識者とともに調査を行った（6年1月31日）。	
【備考】	

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	館蔵品や寄託品を中心に、古代・中世の写経・聖教の調査を着実に実施することができた。また、外部識者を交えての調査も機会を捉えて実施し、件数としては例年並みであったが、上に記したとおり新たな調査結果や、今後の修理の必要性を検討する機会が得られた。 館外に所在する資料の調査についても、展覧会への出陳などにつながっており、着実に成果を上げることができたため、B評価とした。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	写経や聖教は、そこに文字として書かれている内容は従来から研究対象であるが、現在は、モノの形状や作成経緯、伝来過程、さらには資料群の中での個々の資料の位置づけなど、資料が持っている様々な情報も研究対象となっている。5年度においても、継続して文化財の調査と研究を着実に実施することができた。また、そこで得られた研究成果は、展覧会の会場解説文や図録をはじめとする館の出版物のほか、新聞・雑誌等の外部機関の発行物への寄稿など、様々な形で発信した。このことから、中期計画に言う、調査・研究成果の展覧事業への反映も、順調に実施できたと判断しB評価とした。今後も写経と聖教を数多く所蔵する研究機関として、それらの研究に寄与できる情報を提供し続けるため、地道な調査活動を継続していく。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	1) 収蔵品等及び各博物館の特色に応じた歴史・伝統文化に関連する調査研究 ウ 仏教工芸・上代工芸の総合的調査 ((4)-①-1))		
【事業概要】 仏教工芸及び日本上代工芸の総合的な調査・研究を行い、成果を公表する。対象は館蔵品、寄託品、一時預かり品をはじめ、展覧会等に際して借用した作品、他の機関、社寺等が所蔵する作品にも及ぶ。また、展覧会の出品候補となる作品や、当館のある奈良周辺の文化財など、各所の文化財についても積極的に調査を実施し、基礎情報の蓄積に励む。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	工芸考古室 主任研究員 三本 周作
【主な成果】 (1) 館蔵品の調査 ・4年度に実施した「首懸駄都種子彩絵舍利厨子」(重要文化財)のCT調査の成果を展示パネルにて公表した。 ・「金山寺香炉」2件について、表面に施された象嵌文様や構造を中心に調査し、将来的な購入候補となっている類品の作品評価の参考とした。購入候補作品は、5年度中にCT調査を実施し、より詳細な分析を行った。 ・4年度に引き続き、「伎楽復元衣装」のより有効な活用を図るべく、染織品が専門の東京国立博物館名誉館員・沢田むつ代氏の指導を得て調査し、基礎データの収集・整理を行った。 (2) 寄託品の調査 ・「木造黒漆塗彩絵厨子」(長福寺蔵・奈良県指定文化財)について、当館絵画部門担当者と共同で調査し、厨子の制作時期を中心に検討した。 (3) 展覧会に際して借用した作品の調査 ・「二十五条袈裟」、「七条袈裟」、「仏器」、「六器」(いずれも海住山寺蔵)、「梵鐘」(笠置寺蔵・重要文化財)について調査した。成果は同作品が展示された特別展『聖地 南山城』の図録の作品解説や各論により発信した。 (4) 展覧会の出品候補となる作品の調査 ・「金銅三鈷杵」、「金銅五鈷鈴」(いずれも円満寺蔵・茨城県指定文化財)、「両部大壇」(室生寺蔵・重要文化財)、「金剛界曼荼羅彫像群(ガンジユク出土)」(インドネシア国立中央博物館蔵)について調査した。成果は同作品が展示される特別展『空海 KUKAI』(6年4月13日～6月9日)の図録の作品解説や各論により発信する。 (5) 海外での調査 ・科研基盤研究(C)「在米の仏像と仏具およびアーカイブ調査-寺宝の流出と古美術商、収集家の関係とその実態」(研究代表者：多摩美術大学 木下京子氏)の研究分担者として、Harvard Art Museum, Philadelphia Museum of Artにおいて在米の仏教工芸品の調査を実施した。うち、「金銅三鈷杵」(Harvard Art Museum蔵)については針書銘が見いだされ、奈良の寺院に伝来した品であることが確認された。 (6) その他 ・当館の文化財保存修理所で保存修理を実施している「綾張竹華籠」(藤田美術館蔵・重要文化財)の金属部分について蛍光X線調査を実施し、金属組成を把握できたことで、鍍金・鍍銀を使い分けた当初の色彩表現を明らかにできた。			
【備考】			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	所蔵・寄託品のほか、展覧会に伴う借用作品や館外作品の調査を通じて、広く作品に関する基礎情報の蓄積を図ることができた。さらに科学調査も併せて実施することで上記の新知見が得られ、作品に対する理解・評価に新たな視点を加えるきっかけを得た。調査成果の主なものは研究紀要や展示パネルなどを通じて公表し、社会への発信にも一定の成果を上げることができた。加えて、海外を含む研究者との学術交流も深めることができた。 6年度は、5年度に得た成果を着実に発信すること、また学術交流のさらなる強化を期したい。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画では、収蔵品をはじめとした文化財の基礎的・総合的な調査研究とその発信に重点が据えられている。その3年目である5年度は、所蔵・寄託品のほか、館外作品の調査にも力を入れ、広範な情報の蓄積とともに、研究の進展にもつながり得る新知見にも恵まれた。海外を含む外部機関との交流も一層活発に行い、研究の発展の基礎づくりに一定の成果を上げることができた。以上の点から、中期計画を着実に実行できていると考えB評価とした。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	1) 収蔵品等及び各博物館の特色に応じた歴史・伝統文化に関連する調査研究 エ 寺院出土品の調査研究 ((4)-①-1))		
【事業概要】 寺院出土品の学術調査を通じて展示活用や研究発信に貢献する			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	教育室長 中川あや
【主な成果】			
(1) 館蔵品・寄託品等の調査			
・所蔵品の瓦塔（静岡県浜松市出土）について、奈良文化財研究所、浜松市との連携研究協定に基づき、X線CT調査を実施し、昭和期に実施したとみられる復元箇所について可視化するための基礎情報を得た。また、外観では確認できない内部構造に関する手がかりも得られた。今後、各機関と協議の上、成果を発表していく予定である。			
・寺院の塔跡から出土した遺物の整理や、塔の形を表した遺物について調査を行った。その成果を、4月～6月の名品展の中で「塔の考古学」として特集を組み、公表した。			
・所蔵品のうち、主に寺院跡から出土した瓦の整理・調査を進め、その成果を『奈良国立博物館蔵古瓦名品選』として刊行した。			
・唐招提寺の塔頭の一つである西方院に建つ石造五輪塔の地下から発見された骨蔵器と付属品（石櫃・石臼）について、詳細な構造の調査を行った。調査成果を受けて、当館の寄託品として登録されることとなった。			
(2) 展覧会における借用作品の調査			
・5年度特別展「聖地南山城」で借用した高麗寺跡（京都府木津川市）、山城国分寺跡出土品（同）、神雄寺跡（同）、蟹満寺（同）、観音寺（京都府京田辺市）、井手寺跡（京都府井手町）、笠置寺（京都府笠置町）出土品について調査を行い、展覧会図録において成果を公表した。また、それらのうち金属製品について蛍光X線調査・X線CT調査を実施し、飛鳥～平安時代を通じて都と密接な関係があった、南山城地域の金工品技術を考える上で重要なデータを得ることができた。			
(3) 他機関所蔵作品の調査			
・三村山極楽寺跡（茨城県つくば市）出土の塑像断片について、関連資料の調査を辰馬考古資料館（兵庫県西宮市）、極楽寺（神奈川県鎌倉市）、茨城県立歴史館で実施し、極楽寺に安置されていた塑像の実像に迫った。成果は当館紀要にて発表した。			
			
笠置寺出土経筒・外容器・埋納品			
【備考】			
・中川あや「考古学から眺めた古代の南山城」『聖地南山城-奈良と京都を結ぶ祈りの至宝-』（展覧会図録）			
・吉澤悟「三村山極楽寺跡（茨城県つくば市）出土の塑像断片について」『鹿園雑集』（当館紀要）			
・中川あや編『奈良国立博物館蔵古瓦名品選』奈良国立博物館			



笠置寺出土経筒・外容器・埋納品

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	当館は仏教美術を軸としており、考古部門では多様な寺院出土品に関して調査・研究を進めることができた。当館所蔵品や寄託品にとどまることなく、展覧会における借用作品、他機関所蔵作品についても積極的に、また、出土品の時代も飛鳥時代～鎌倉時代にまで広範囲に調査を行った。成果のまとまったものについては展覧会図録や紀要等で迅速に発表を行うことができたため、左記の評定とした。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に基づき、仏教美術の一角をなす寺院出土品の調査研究を積極的に行った。また、展覧会や紀要等で成果の発信を行うことができ、計画を着実に実行している。以上の理由から、中期計画の3年目として、過年度の積み重ねを活かして十分な成果を上げることができたと判断し、B評価とした。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	1) 収蔵品等及び各博物館の特色に応じた歴史・伝統文化に関連する調査研究 オ 南都の古代・中世の彫刻に関する調査研究 ((4)-①-1))		
【事業概要】展覧会開催に際して借用した作品や館蔵・寄託作品、また館外の寺社等の作品のなかから、南都地域（奈良市及びその周辺地域）伝来もしくは南都と関わりの深い古代・中世の彫刻作品を選び、詳細な調書の作成とデジタル高精細画像の写真撮影やX線CTスキャン調査を通じ、データの収集・蓄積を行う。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	美術室長 岩井 共二
【主な成果】			
(1)館内外において多数の作品の調査・撮影を行った。作品名は下記の通り。 (2)調査を通じて日本古代から中世までの彫刻に関する構造・技法について、X線CTスキャン調査やファイバースコープなど最新光学機器を駆使することによって、像内銘文の発見や表面観察では判定できない構造など、従来知り得なかった学術的知見を得ることができた。 (3)特別展や名品展における図録の解説や題箋の執筆、講座等における報告、また論文等刊行物のかたちで新知見の発表を行った。一部については、5年度及び6年度の刊行物に発表する。			
【作品名】		元興寺十一面観音立像CT調査	
薬師寺（和東町）薬師如来坐像（4月5日）/常念寺菩薩立像（5月15日）/巖松院釈迦如来立像（5月16日）/蟹満寺如来坐像（5月16日）/圓成寺四天王立像（6月5日）/東大寺實英法印坐像（6月13日）/東大寺愛染明王坐像（6月13日）/海住山寺役行者倚像（6月14日）/笠置寺毘沙門天立像（7月10日）/現光寺十一面観音坐像（7月10日）/西念寺薬師如来坐像（7月10日）/浄瑠璃寺薬師如来坐像（7月10日）/朱智神社牛頭天王立像（7月24日）/河合京都仏教美術財団聖観音立像（7月24日）/常念寺釈迦如来坐像及び脇侍像（7月31日）/金蔵院観音菩薩立像（8月7日）/浄瑠璃寺大日如来坐像（8月7日）/河合京都仏教美術財団馬頭観音立像（7月24日）/元興寺十一面観音立像（8月16日）/東大寺釈迦如来坐像（8月21日）/個人蔵婆藪仙人立像（9月14日）/某寺如意輪観音坐像（10月6日）/普門院不動明王坐像（10月10日）/個人蔵菩薩立像（興福寺千体仏）（10月24日）/法住寺不動明王坐像（11月2日）/館蔵薬師如来坐像886（12月8日）/館蔵不動明王立像1071（12月8日）/観心寺観音菩薩立像（12月25日）/福成寺釈迦如来立像（6年2月5日）/東大寺阿弥陀如来立像（6年2月15日）/大泰寺日光・月光菩薩立像（塑像）			
【備考】			
新規撮影された写真やX線CTスキャン画像は、特別展「聖地 南山城—奈良と京都を結ぶ祈りの至宝—」（5年7月8日～9月3日）「生誕1250年記念特別展 空海」（6年4月13日～6月9日）での展示解説やパネル写真をはじめ、今後開催される展覧会や写真の借用依頼への対応や、学術研究の進展に寄与するものである。			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	調査の成果は、5年度及び6年度開催の特別展の展示解説などに反映させるための貴重な資料の集積となった。調査方法は、実測、撮影、3D計測、X線CTスキャンなど多岐にわたる。また、これらの調査には、展覧会輸送の事前点検も含まれ、文化財の安全な活用に資する成果を多分に含んでおり、5年度以降の特別展、特別陳列のみならず、講座等にも反映させることができる。特に、奈良との関連が深い木津川市を中心とした南山城地域の彫刻調査の成果及び撮影写真は、5年度開催の特別展「聖地 南山城—奈良と京都を結ぶ祈りの至宝—」（7月8日～9月3日）の図録や会場パネル等の作品解説で大いに活用出来た。上記展覧会の出陳品である蟹満寺如来坐像は、従来後補と考えられていた頭部が制作当初のものであることが、X線CTスキャン調査により初めて明かになった。この他にも、各像の詳細な調査を蓄積することによって、多大な研究成果が得られた。最終的には所期の目標を大きく上回る成果が得られたと言える。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	5年度は、奈良市域を中核とする南都に伝来ないし南都と関わりの深い古代・中世の彫刻作品について、調書の作成や記録写真の撮影、X線CT等の光学的修法による調査を行い、データの収集・蓄積に十二分の成果をあげることができた。特に、蟹満寺如来坐像頭部の制作時期について明らかにすることができた点は、高く評価できる。このように、中期計画の3年目として、研究成果の展示・公表・蓄積に着実に取り組んだといえる。以上より、所期の目標を大きく上回る成果をあげることができたため、A評価とした。6年度も例年同様のペースで調査・撮影を進めつつ、新たな研究成果を発表できるよう努めていく。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	1) 収蔵品等及び各博物館の特色に応じた歴史・伝統文化に関連する調査研究 ア X線CTスキャナ等による文化財の構造や製作技法に関する調査研究 ((4)-①-1))
【事業概要】 本研究では、X線CTスキャナ及び3Dデジタイザ等を使用した調査によって各種有形文化財の構造及び製作技法を明らかにすること、並びに得られた成果を展覧事業及び教育普及活動に活用することを目的とする。	
【担当部課】	学芸部博物館科学課
【プロジェクト責任者】	課長 木川りか
【主な成果】 (1) 展示関連作品の調査 特別公開に伴い借用した徳川美術館所蔵の国宝「初音の調度」のうち櫛箱、小角赤手箱及び手箱（胡蝶蒔絵）について、所蔵者との共同研究の一環としてX線CTスキャンを実施した。その結果、甲板には二枚接の板が使用されていること、底の構造は平底になっていること等、木地構造や制作技法に関わる知見が得られた。また、同作品群のうち4年度調査分（机、色紙箱、長文箱（胡蝶蒔絵））に関する研究成果を学会にて報告した。 上記のほか、特別展や特集展示に伴い借用した高麗仏像、陶磁器、螺鈿漆器等についても、所蔵者の承諾のもとX線CTによる内部構造調査を行った。また、高麗仏像については、可搬型蛍光X線分析装置による金彩の成分分析も行った結果、金泥と金箔の両方が使用されている可能性が示唆された。	
(2) 展覧事業での活用 当館所蔵の阿弥陀如来坐像の展示の際、過去の調査で得られた同像のCTデータを元に作成した三次元画像及び頭部模型を並べることで、仏像の内部構造を視覚的に把握しやすくした。	
【備考】 ・X線CT調査件数42件、調査回数154回 ・3Dデジタイザ調査件数12件、調査回数63回 <論文・学会発表等> ・渡辺祐基、川畑憲子、板谷寿美、吉川美穂、田中麻美、木川りか「国宝『初音の調度』のうち机、色紙箱、長文箱（胡蝶蒔絵）の木地構造及び制作技法のX線CT調査」『日本文化財科学会第40回記念大会研究発表要旨集』116-117（10月） ・渡辺祐基「九州国立博物館におけるX線CTを用いた木質文化財の調査」『2023年樹木年輪研究会・木質文化財研究会合同例会 講演会・研究発表要旨集』7-8（11月） ・川畑憲子、渡辺祐基、田中麻美「叢梨地牡丹唐草向鶴紋散蒔絵調度の木地構造について（4）化粧道具（鏡台・鏡建・柄鏡箱）」紀要『東風西声』19号138(87)-123(102)（6年3月）	



三次元画像及び模型を活用した展示

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	5年度は54件の文化財等の調査を実施し、保存状態及び製作技法に関する情報を得ることができた。特に特別展及び特集展示に伴い借用した文化財に対して、内部構造を調査する大変貴重な機会となった。さらに、三次元データを保存する大容量ストレージを導入し、効率よくデータ解析が可能な環境整備を行った。以上から年度計画を完遂したと評価し、B評定とした。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画3年目である5年度は、4年度に引き続き各種文化財の構造及び製作技法に関わる調査を推し進めた。また、これまでに得られたデータを学会にて発表したり、展示に活用するなど、成果の普及に努めた。6年度以降も調査を継続するとともに、展示、学会発表、論文、教育普及等で成果を幅広く公表し、中期計画の円滑な推進に努める。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	1) 収蔵品等及び各博物館の特色に応じた歴史・伝統文化に関連する調査研究 特集展示「誕生 250 年記念 秋田蘭画ことはじめ—それは『解体新書』から始まった—」に関する調査研究 ((2)-①-(九州国立博物館))		
【事業概要】 本特集展示では、江戸時代・18 世紀における蘭学の流行をうけて誕生した秋田蘭画及び関連作品を 39 件出陳した（会期：令和 5 年 4 月 29 日～6 月 11 日）。その開催に先立ち、秋田市立千秋美術館の特別協力を得て、共同で同館の所蔵・寄託絵画の悉皆調査を実施し、その研究成果を展示解説リーフレット、講座やミュージアムトーク等で公表した。			
【担当部課】	学芸部文化財課	【プロジェクト責任者】	主任研究員 畑靖紀
【主な成果】 ・本展の開催に先立ち、4 年 7 月 5 日・6 日、10 月 3 日に秋田市立千秋美術館と共同で同館の所蔵・寄託絵画の総合的な調査を実施した。調査には松尾ゆか氏（秋田市立千秋美術館学芸員）と村田梨沙氏（同）、当館研究員が参加した。本調査の結果を踏まえて出陳作品を選定し、同館の所蔵・寄託品 31 件を本展で公開した。 ・秋田市立千秋美術館学芸員と協議のうえ、本展の一層の充実を期して、同館の所蔵・寄託絵画に加え、本展に秋田蘭画と南蘋派の作品を追加し、九博所蔵品 5 件もリストに加えた。さらに秋田県立近代美術館（4 年 7 月 7 日、同 10 月 2 日）、千葉市美術館（同 10 月 4 日）において調査と借用交渉を行い、重要文化財 2 件を含む 3 件を本展で公開した。 ・上記の調査の成果にもとづき、調査で得られた基礎データと所見の一部を、図版とともに展示解説リーフレット（A4 全 8 頁、無償配布）で公表した。執筆は当館研究員が担当し、この分野の第一人者である秋田市立千秋美術館学芸員の協力を得て、最新の研究成果を公表した。 ・関連事業として、展示解説「きゅーはく☆とおき講座」（講師：松尾ゆか氏、4 月 29 日）及びミュージアムトーク（講師：当館研究員、5 月 16 日・30 日）を当館で開催した。このほか旧福岡県公会堂貴賓館（福岡市中央区）の主催で、歴史講座「誕生 250 年記念 秋田蘭画ことはじめ」（講師：当館研究員、5 月 13 日）が開講された。 ・YouTube の kyuhakuchannel において動画「特集展示「秋田蘭画ことはじめ—それは『解体新書』から始まった—」ご紹介！」を公開し、調査研究の成果を活かしながら、秋田蘭画の魅力を広く一般に紹介した。			
【備考】			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	本展では、近年の学界の動向を踏まえて、秋田蘭画を南蘋派絵画との関係から捉える展示内容を立案した。秋田蘭画と南蘋派の絵画を取り上げた本展は、江戸時代に長崎を通じて受容された西洋や中国の文化が、畿内や江戸だけでなく東北にまで波及した歴史を象徴する事例であるため、当時の文化交流の実情を、文化財を通じて具体的に紹介する貴重な機会となった。また本展は、秋田蘭画に関する総合的な展覧会としては、秋田・東京以外で初めて開催された企画となった。以上の成果から、本調査研究は、年度計画を越える成果をあげていると評価し、左記の評定とした。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	本展では、中期計画に依拠しつつ、文化財調査の研究成果を作品展示・リーフレット・講座・動画を通じて公表するという目標を達成することができた。その展示テーマも、日本文化の形成を文化交流の観点から捉える当館のコンセプトによく合致するものとして重要であった。以上の成果は、今後の展示活動、調査研究、収蔵品の収集や活用・公開に大いに有益であった。具体的には、秋田市立千秋美術館と相互に所蔵館の作品の調査研究を行い、その成果をそれぞれの館において展覧という形で公開することができた。以上の成果から中期計画を上回ったと評価し、左記の評定とした。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	1) 収蔵品等及び各博物館の特色に応じた歴史・伝統文化に関連する調査研究 イ 特集展示・特別公開に関する調査研究((4)-①-1)		
【事業概要】 特集展示「日本刀の美ー北崎徹郎の愛刀ー」に関する調査研究			
【担当部課】	学芸部企画課	【プロジェクト責任者】	特別展室主任研究員 望月規史
【主な成果】 4年度に寄贈された計31件の刀剣類について、6年1月30日(火)から4月14日(日)まで当館4階文化交流展示室・関連11室にて特集展示「日本刀の美ー北崎徹郎の愛刀ー」を行った。併せて高精細写真撮影を行うとともに、寄贈後の調査成果を踏まえた図録を作成した。また、6年4月6日(土)には当館ホールにて講座「刀職と語る!北崎徹郎の刀剣コレクション」を行う予定である。			
			
展示室内の様子			
【備考】			

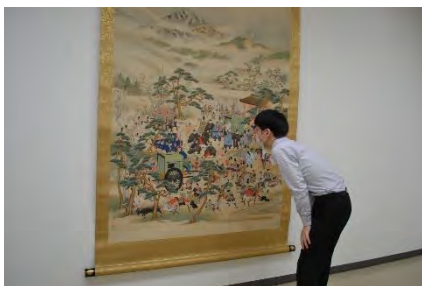
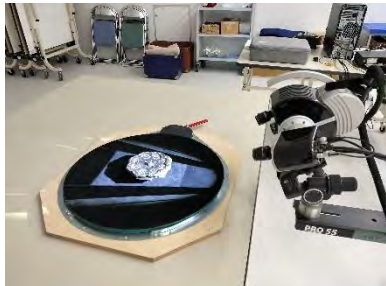
年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	本展では、令和4年度に故北崎徹郎氏より当館へ寄贈された刀剣類31件を、コレクションの形成過程や特徴などを踏まえて、展示を立案した。特に北崎氏が生涯を通じて収集した刀剣が系統だった収集方針に基づくものであったことが分かる構成とし、「五大産地への関心」「備前刀へのこだわり」「九州刀工へのまなざし」の計3章立てとした。各作品には調査成果を踏まえた題箋解説を付した。併せて、会場には刀剣種別や名称などを図化した補助パネルや刀剣の研磨工程見本を設置し、観覧者にとっての理解の一助とした。また、図録では詳細な解説を各作品に付し、それぞれの来歴を明らかにするとともに、調査により出陳作品と新たに関係が判明した歴史資料を図入りで紹介した。本展は、日本刀の歴史的展開を具体的に紹介する貴重な機会となっただけでなく、所蔵品のみで行う日本刀に関する総合的な展覧として当館で初めて開催された企画となった。以上の成果から、本調査研究は、年度計画を越える成果をあげていると評価し、左記の評定とした。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	本展では、中期計画に依拠しつつ、文化財調査の研究成果を作品展示・図録・講座を通じて公表するという目標を十分に達成することができた。その展示テーマも、日本文化の形成を文化交流の観点から捉える当館のコンセプトによく合致するものとして重要であり、刊行した図録も当館で初めての刀剣目録となるなど、寄贈作品に対する調査研究成果の発表となった。これらの成果は、今後の当館における調査研究や展示のみならず収蔵品の収集や活用・公開に大きく貢献した。以上の成果から中期計画を上回ったと評価し、左記の評定とした。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	収蔵品等の有形文化財に関する調査研究		
【事業概要】 当館の収蔵品に関する調査研究を行う。			
【担当部課】	学芸部調査・研究課	【プロジェクト責任者】	調査・保存課長 高梨 真行
【主な成果】 ・開館記念展「皇室のみやびー受け継ぐ美」に関し、展示作品の調査、写真撮影などを行い企画・開催した。 ・文化財活用センターと協力し、国宝「唐獅子図屏風」の高精細複製品の制作にかかる調査・撮影を行った。 ・南蛮文化館、西宮市大谷記念美術館における「万国絵図屏風」ほか館蔵品の関連作品に関する調査を実施した(11月15日,16日)。 ・公益財団法人菊葉文化協会の助成を受け、妙法院門跡、泉涌寺において光格天皇の文化活動に関する調査を実施した(令和5年12月21日・22日) ・令和6年度北海道での地方展開覧会事業に関する調査を実施した(11月30日,12月1日,6年1月17,18日)。 ・考古資料の三次元計測調査を実施した(6年1月16日～19日) ・行橋市増田美術館及び福岡県立美術館における橋本雅邦、川辺御楯作品の調査を実施した(6年1月29日～30日)。 ・収蔵品に関連した三跡の総合的研究に関する研究会を実施した(6年2月1日) ・クリーブランド美術館にて三代清風與平展での収蔵品との比較調査を実施した(6年2月13日～16日) ・長崎県美術館において令和7年度の長崎県での地方展開覧会事業に関する調査を実施した(令和6年3月15日)。 ・新潟県における明治天皇巡幸地の古写真と現在の比較について調査を実施した(6年3月20日～22日)。 ・ホノルル美術館所蔵「弘法大師行状絵詞」およびイオラニ宮殿等における多言語対応調査を実施した(6年3月)。			
  			
クリーブランド美術館での調査 福岡県立美術館での調査 考古資料の三次元計測調査			
【備考】計12件			

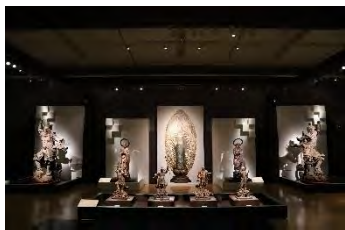
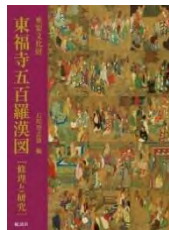
年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	皇室に受け継がれた貴重な収蔵品を調査・研究し、それを開館記念展の展示・出版事業に活かすなど着実に成果をあげた。当館の収蔵品の調査は重要なテーマであり、今後の展示公開のためにも継続的・積極的に調査を進めていく。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	引き続き、収蔵品の調査を行い当館の収蔵品の価値を発信していく必要がある。今後も宮内庁や文化庁と協力し、収蔵品に関する研究の充実を図っていく。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	2)特別展等の開催に伴う調査研究 ア 特別展「東福寺」に関する調査研究		
【事業概要】 特別展「東福寺」は、京都を代表する禅寺の一つである同寺の寺宝をまとめて公開する初の機会となった展覧会である。本展では、草創以来の東福寺の歴史を跡付けるとともに、室町時代に活躍した絵仏師・明兆による「五百羅漢図」をはじめ、大陸との交流を通して花開いた禅宗美術の諸相を幅広く紹介した。本展の開催にあたり、4年度から引き続き絵画・書跡・彫刻の各分野について調査研究を実施した。			
【担当部課】	学芸企画部企画課特別展室	【プロジェクト責任者】	特別展室研究員 高橋真作
【主な成果】 4年度から5年度にかけて開催した本展では、巨大伽藍にふさわしい特大サイズの仏像や書画類をはじめ、全国の禅宗寺院のなかでも屈指の質と量と誇る同寺の文化財を一堂に展覧した。彫刻分野では、3メートルを超える「二天王立像」をはじめとする巨像群の展示を行い、制作年代の見直しや新たな美術史的位置付け、また巨大仏像の輸送方法の策定などを行った。また書跡分野では、南宋時代の高僧・無準師範から東福寺の開山・円爾に贈られた「禅院額字并牌字」を一堂に展覧するとともに、虎関師錬筆「虎 一大字」をはじめとする未紹介の優品を新たに見出すことができた。さらに絵画分野では、14年にわたる修理を経て現存全幅が初公開された明兆筆「五百羅漢図」について詳細な検討を進め、先行研究において作者表記が曖昧であった下絵を明兆筆として断定可能とするとともに、第45号の画中で羅漢供を行っている導師が円爾の姿で描かれていることや、これまで所在不明であった第50号がロシアのエルミタージュ美術館に保管されていることを探り当てるなど、きわめて重要な新知見が得られた。とりわけ第50号の再発見は、新聞紙面の1面で取り上げられるなど、社会的にも意義深い成果といえる。また展覧会場では、4コマ漫画によるキャプションを用いるなど、来館者への分かりやすさを重視した新たな展示手法を開拓した。展覧会終了後には、『東福寺五百羅漢図 修理と研究』（勉誠社）において上記の新知見を報告した。			
 第5章「巨大伽藍と仏教彫刻」 展示風景  虎関師錬筆「虎 一大字」  「五百羅漢図」第50号 エルミタージュ美術館蔵  4コマ漫画キャプション  『東福寺五百羅漢図 修理と研究』			
【備考】 特別展「東福寺」：3月7日～5月7日 総出品数：157件			

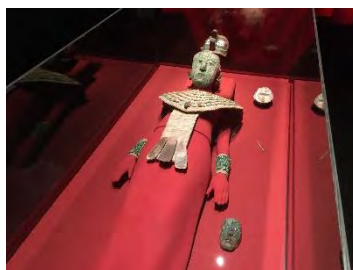
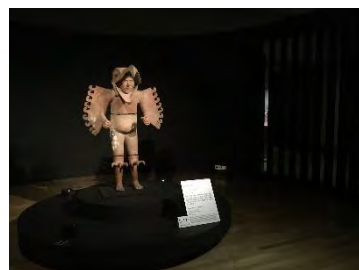
年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	東福寺では長年にわたって文化財の修理事業を継続実施してきたため、それらが一堂に公開される機会がなかった。本展で初めて公開した作品も多く、文化財の学術的な価値と意義を新たに提示し得た場になったといえる。とりわけ明兆筆「五百羅漢図」に関する数々の新知見については、新聞紙面や一般書籍においても広く成果を公表し、社会全体や学会にも大いに貢献した。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画の3年目として、調査により得られた多面的な学術的成果を展示や図録に網羅することにより、今後の規範となる重要な研究基盤を築いたものと評価できる。研究成果を社会一般にも広く還元できたことの意義も大きい。今回得られたさまざまな知見は、館藏品や寄託品などの禅宗美術作品全般を考察するうえでも応用可能であり、今後の新たな研究の進展が期待される。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	2)特別展等の開催に伴う調査研究 ア 特別展「古代メキシコ マヤ、アステカ、テオティワカン」に関する調査研究		
【事業概要】 特別展「古代メキシコ マヤ、アステカ、テオティワカン」は、古代メキシコを代表する、テオティワカン、マヤ、アステカの3つの文明に焦点を当て、古代メキシコ文明の奥深さと魅力に迫るものである。これにあたり、借用作品の状態確認や計測、世界的に高く評価されているメキシコ国内の展示環境等の把握を目的とする現地調査を実施した。			
【担当部課】	学芸研究部調査研究課考古室	【プロジェクト責任者】	考古室長 井出浩正
【主な成果】 本展覧会はメキシコ国内を代表する出土品を紹介する展覧会であり、メキシコ文化省、メキシコ国立人類学研究所をはじめとするメキシコ合衆国の全面的な協力を得て調査を進めることができた。対象作品の中には重量のある石彫や土製品、稀少かつ脆弱な作品が多数含まれた。特に、パレンケ13号神殿出土のレイナ・ロハ（赤の女王）の副葬品は本邦初公開であり、レイナ・ロハが発見された13号神殿の玄室やパレンケ遺跡、そして出土品が実際に展示されている所蔵館の展示空間など、現地調査によって得られた情報は大きい。また、現地で撮影した遺跡や風景等の写真が展示会場や展覧会図録等に活用されており、展示空間や展示方法、演出など、来館者に直感的により理解しやすい展覧会を提供することができたと評価できる。			
 展示風景（第2章：テオティワカン）  レイナ・ロハ（第3章：マヤ）  鷲の戦士像（第4章：アステカ）			
【備考】 特別展「古代メキシコ マヤ、アステカ、テオティワカン」（6月16日～9月3日） 総出品数：141件 レクチャーナイト（7月14日、27日）※古代メキシコの魅力を普及するイベント 古代メキシコ展こどもの日（8月7日）※教育関連イベント			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	現地調査にあたっては、世界的な新型コロナウイルス感染症拡大のため、滞在期間や訪問地に制限がある中での実施となったものの、メキシコ文化省、メキシコ国立人類学研究所の協力を得て概ね予定通り調査を実施することができた。特に、展覧会構成の3つの柱であるテオティワカン、マヤ、アステカの各文明を代表する遺跡などの踏査をすることができ、古代メキシコの諸文明に通底する普遍的な神と自然への祈り、多様な環境から生み出された独自の世界観と造形美への理解と見識を広めることができた。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本展覧会の開催に伴う調査研究により、海外展に先立つ事前調査の重要性が極めて大きいことが再確認された。特に当館に所蔵されていない作品で構成される国や文明、時代を対象とする場合は、事前に丁寧な基礎調査が必要であると考えられる。国内のみならず海外の来館者が多く観覧する当館の国際的な役割として、中期計画に基づき、世界史的な立ち位置から所蔵作品を俯瞰する作品調査を継続的に進めてゆきたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	2)特別展等の開催に伴う調査研究 ア 浄瑠璃寺九体阿弥陀修理完成記念 特別展「京都・南山城の仏像」に関する調査研究		
【事業概要】 浄瑠璃寺九体阿弥陀修理完成記念特別展「京都・南山城の仏像」にかかわる調査研究。本展は京都の南山城地域に所在する寺院の仏像等の展示を行うものである。本プロジェクトでは主に出品作品の調査研究を実施した。			
【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	絵画・彫刻室研究員 丸山士郎
【主な成果】 (1) 実施概要 ・調査（6月1日、6月2日、6月26日、10月16日）、写真撮影（10月10日）、X線CT撮影（6月6日、7月25日、9月13日、11月13日、11月14日） ・開催期間および開催場所：9月16日～11月12日 本館特別5室 ・担当者：丸山士郎（同上）、増田政史（絵画・彫刻室研究員）、児島大輔（東洋室主任研究員） (2) 主な内容 ・出品作品の調査、写真撮影、X線CT撮影を実施し、作品の基本情報および画像データ、CTデータを収集した。 ・本展の出品作品のうち、当館寄託品については会期前にX線CT撮影を実施した。また本展に先立って開催された奈良国立博物館の特別展「聖地 南山城―奈良と京都を結ぶ祈りの至宝―」（会期：7月8日～9月3日）の出品作品のうち、本展にも出品される共通作品の集荷に際して事前調査を実施した。これらによって得られた知見や撮影写真を図録に反映することができた。			
			
6月6日の調査（X線CT撮影）		展示会場風景（本館特別5室）	
【備考】 浄瑠璃寺九体阿弥陀修理完成記念特別展「京都・南山城の仏像」図録（総論1本：増田政史、各論2本：増田政史、児島大輔、作品解説18件：丸山士郎、増田政史、西木政統、児島大輔）			

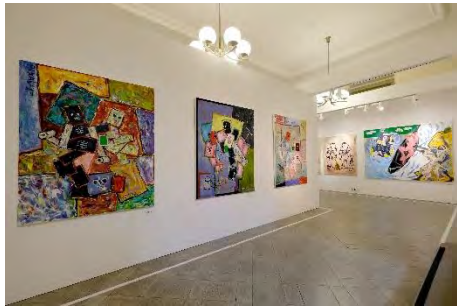
年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	京都府の最南部に位置する南山城地域に伝わる仏像等18件を借用し、調査研究を実施した。当該地域は、行政区分は京都でありながらも、文化圏としては古代より奈良の影響を強く受けてきた地域である。また日本彫刻史の上でもっとも活発に仏像制作が行われた平安時代のうち、前期・中期・後期を代表する仏像および鎌倉時代の仏像を調査したことで、当該地域の重要性を浮き彫りにし、主に平安時代彫刻史研究の発展に有益な作品情報を得ることができた。今後、さらに研究を進め、逐次刊行物等によって紹介したい。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	寄託および借用した文化財を対象に写真撮影やX線CT撮影を実施し、学術的・芸術的な価値の究明とコンディションの分析等を行い、中期計画3年目として適切な保管・展示の環境維持や修理等の処置に資するという中期計画に沿った調査研究をすることができた。また、開催に先立って実施した事前調査によって得られた知見や撮影写真を図録に反映し、有形文化財に関する調査研究の成果等の発信を行うという中期計画を順調に遂行できているといえる。このほか、会期中や会期後の調査研究で収集した作品情報および画像データを用いて、逐次、定期刊行物などで報告していく。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	2)特別展等の開催に伴う調査研究 ア 「横尾忠則 寒山百得」に関する調査研究		
【事業概要】 本展は、現代美術家・横尾忠則が、東洋の伝統的画題である「寒山拾得」を独自の解釈で再構築した完全新作 102 点を一挙初公開したものである。寒山と拾得は中国・唐時代に生きた風狂な師僧であり、東アジア全域で盛んに絵画化された。本展に出陳された作品はいずれも、寒山拾得が到達した脱俗の境地をなぞるように、画家自身があらゆる時空を超越しながら縦横無尽に描き出したものといえる。なお、本展の連携企画として、本館特別 1 室にて特集「東京国立博物館の寒山拾得図―伝説の風狂僧への憧れ」(9 月 12 日～11 月 5 日)を実施した。			
【担当部課】	学芸企画部企画課特別展室	【プロジェクト責任者】	学芸企画部長 松嶋雅人
【主な成果】 (1) 調査の概要 寒山と拾得は古代中国における伝説上の詩僧であり、何ものにも捉われない風狂の境地が禅林で尊ばれ、彼らを源泉とした多くの造形作品が生み出されてきた。横尾忠則の寒山拾得シリーズは、こうした古典的名画に取材しつつも、そこに独自の解釈を施し、自由自在で融通無碍な作品世界を作り上げているといえる。本展の開催にあたっては、横尾が参照したと思われるイメージソースを探るとともに、「朦朧体」とも称される絵筆のスタイルにも注目しながら検討を進めた。また、展示空間の縮小模型を作成するなど、展示デザインについても綿密な検証を行った。 (2) 調査の成果 本展で展示した全 102 点はいずれも日付順に展示を行ったが、それらを通覧すると、「掃除機とトイレトペーパー」、「マラソン」、「混然一体」、「赤絨毯」といった、いくつかの共通するフェーズに分類できることが判明した。展示会場においてもその成果を反映するとともに、表慶館 1 階は白壁、2 階は黒壁、最終作品となるNo.102《2023-06-27》のみは赤壁とするなど、会場内のコントラストについても工夫を凝らした。またカラー図版を収載した図録を頒布し、横尾作品に関する新知見を盛り込んだ総説を付すことにより、来館者への鑑賞の補助とした。			
			
告知ポスター		展示風景	
		展示風景	
【備考】 「横尾忠則 寒山百得」展 会期：9 月 12 日(火)～12 月 3 日(日) 会場：表慶館 総出品数：102 点 主催：東京国立博物館、読売新聞社、文化庁 協賛：紡ぐプロジェクト協賛企業			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	古美術の主要テーマとして知られる「寒山拾得」について、横尾忠則作品を通して来館者の理解を深めることができた意義は大きい。当館で初めて現代美術家を取り上げた展覧会でもあり、新たな来館者層を開拓した点も特筆される。特集「東京国立博物館の寒山拾得図―伝説の風狂僧への憧れ」との連携においても、本館総合文化展への誘致につながるなど、今後の事業モデルを構築できた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	調査研究により得られた多面的な学術的成果を展示や図録に反映し、順調に中期計画を遂行できている。当館で初めて現代美術家を取り上げるなど、新たなスキームを開拓した点も高く評価される。本展で得られた成果は、収蔵品の研究や新規事業の企画運営にも大きく寄与するものであり、今後の展開が期待される。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	2) 特別展等の開催に伴う調査研究 ア 特別展「やまと絵―受け継がれる王朝の美―」に関する調査研究		
【事業概要】 5 年秋実施の特別展「やまと絵―受け継がれる王朝の美―」にかかわる調査研究。本展は前近代の日本絵画において主要な主題であったやまと絵について、平安から室町時代までの優品によって紹介するものである。本プロジェクトでは展覧会に出品される古代・中世やまと絵の調査研究を実施した。			
【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	絵画・彫刻室長 土屋貴裕
【主な成果】 (1) 調査の概要 本展出品予定の作品のうち、所蔵品、寄託品とともに、個人所蔵の作品の調査を実施した。所蔵品、寄託品については、前年度に引き続き、重要文化財「浜松図屏風」(A-11533)、重要文化財「浜松図屏風」(A-12476)、重要文化財「日月山水図屏風」(A-1065)を取り上げるとともに、寄託品の国宝「山水屏風」(神護寺蔵)、「源氏物語図扇面貼交屏風」(浄土寺蔵)の調査を実施した。個人所蔵の作品については、「平治物語絵巻断簡」「駿牛図断簡」「本阿弥切」「石山切」「年中行事絵巻(住吉本)」の調査・撮影を行なった。 (2) 調査の成果 調査の成果は展覧会図録の解説に反映するとともに、記念講演会でその成果の一部を発表した。とりわけ個人所蔵の作品は、これまで展覧会等に出品されたことのない、もしくは半世紀ぶりの出品という作品で、基礎データを整えるとともに、今後の研究に役立てられるような環境づくりに努めた。			
			
調査を行なった屏風作品の展示風景		展覧会図録	
【備考】 展覧会会期：10 月 11 日～12 月 3 日、会場：平成館特別展示室、出品作品：245 件(展示替有)			

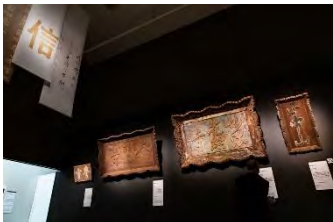
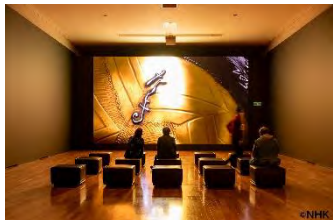
年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、外部での作品の調査等を実施することは断念したが、館蔵の作品を詳細に調査しえたことは大きな成果である。とりわけ調査対象とした個人所蔵の作品はなかなか調査の機会に恵まれることはなく、本研究成果は今後の作品研究の基礎となることが期待される。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に基づき、作品調査の実施、調査研究を進めることができた。これらの成果を踏まえ、館蔵品以外のやまと絵作品の調査研究については、6年度以降、さらに進めていきたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	2)特別展等の開催に伴う調査研究 ア 特別展「本阿弥光悦の大宇宙」に関する調査研究		
【事業概要】 江戸時代初期に活躍した芸術家、本阿弥光悦をテーマとするもので、様々な分野における文化芸術活動に関わって光悦が生み出した優品の数々を総合的に紹介した。			
【担当部課】	学芸企画部企画課	【プロジェクト責任者】	学芸企画部長 松嶋雅人
【主な成果】 (1)実施概要 ・開催期間及び開催場所：6年1月16日～3月10日 平成館特別展展示室 ・担当者：松嶋雅人（同上）、三笠景子（学芸企画部企画課出版企画室主任研究員）、佐藤寛介（学芸企画部企画課特別展室長）、福島修（学芸企画部企画課特別展室）、樋笠逸人（奈良国立博物館学芸部美術室） (2)主な内容 本展によって、本阿弥一族の家職と信仰形態に着目した資料等を紹介して、光悦の芸術活動の大元となる思想的、社会的成果を明らかにした。さらにいわゆる「光悦蒔絵」と、能書光悦の書における作品とともに、光悦茶碗といった各分野における研究の最新の成果を踏まえた展示構成と作品により、本阿弥光悦研究の到達点と今後の展望を示すことができた。 さらにNHKと協働した8K文化財プロジェクトによる8K映像「本阿弥光悦の大宇宙」を制作して会場内で上映し、リアルとバーチャルが融合した新たな展示手法を開拓した。			
			
光悦の信仰に関わる展示		8K映像「本阿弥光悦の大宇宙」	
【備考】			

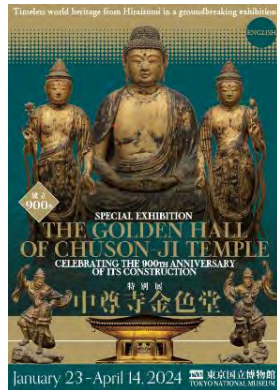
年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	本阿弥光悦の研究に関しては、近年、現在にまで伝わる多種多様な「光悦作品」といわれるものに、光悦がどのように関わっていたのかという問いが、大きなテーマとなっており、現時点では、従前の研究の再検討とともに、その方法論的考究がさまざまなかたちで行われている。 本展では、これまでほとんど取り上げられてこなかった光悦と本阿弥一族をとりまく「法華信仰」という信仰形態と当時の社会状況を光悦研究の深淵に置くことを提言することで、大きな方法論的な投げかけとなり、光悦研究者からの反響が大きく、光悦研究に拍車をかける契機とすることができた。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	日本の近世における造形史のなかで大きな存在である本阿弥光悦を通して、これまでの研究成果の基礎的な情報収集を行い、さらに種々の作品調査を重ねることにより、最新成果を踏まえた展覧事業、教育普及活動を行うことができた。また展示においては、その調査研究の成果を活かし8K映像のポテンシャルを最大限引き出すためのカット割りを研究しコンテンツを制作するなど、より一層、文化財に親しみやすい事業の試みを行うことで、社会一般に発信することができた。 さらに6年度以降も特別展等の事業を通して、調査研究を継続し、その成果を発信していきたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	2)特別展等の開催に伴う調査研究 ア 創建 900 年特別展「中尊寺金色堂」に関する調査研究		
【事業概要】 建立 900 年 特別展「中尊寺金色堂」は、6 年が藤原清衡によって上棟されてから 900 年にあたることを記念して開催するもので、金色堂内に設けられた三基の須弥壇のうち最も重要な中央壇上の国宝仏像 11 軀のすべてを公開した。また、かつて金色堂を荘厳した金工品や堂内具等の工芸品をはじめ、金銀字一切経や金字宝塔曼荼羅など他に例を見ない貴重な書画もあわせて紹介するほか、8KCG によって会場内のモニターに金色堂を原寸大で再現することを試みる、これまでにない規模の金色堂をテーマとした展覧会である。本展の開催にあたり、絵画・書跡・彫刻・工芸・考古の各分野の作品調査および撮影を中尊寺金色堂、讃衡蔵において行ったほか、国宝仏像 11 軀等については当館において CT 撮影を行った。			
【担当部課】	学研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	東洋室主任研究員 児島大輔
【主な成果】 (1) 調査概要 ・場所：中尊寺金色堂・讃衡蔵（岩手県西磐井郡平泉町平泉字衣閑 202）、東京国立博物館 ・期間：金色堂彫刻作品調査・撮影：6 月 13 日～16 日、讃衡蔵書画・工芸作品等調査・撮影：7 月 10 日～14 日、CT 撮影：6 年 1 月 15 日～17 日 ・担当者：児島大輔（同上）、猪熊兼樹（学芸研究部保存修復室長） (2) 主な内容 4 年度に実施した予備調査および 3D 撮影の成果を踏まえて展覧会出品作品の候補作品を選定し、工芸担当の清水健（学芸研究部調査研究課工芸室主任研究員）・撮影者の藤瀬雄輔（学芸研究部列品管理課登録室専門職員）とともに対象作品の調査・撮影を行った。中尊寺金色堂は拝観休止日がないため、金色堂彫刻作品の撮影は夜間に行った。撮影画像は各種広報宣材や図録等に活用したほか、展覧会会場においても活用した。また、宮田将寛（学芸研究部保存修復課調査分析室研究員）の協力を得て当館において彫刻作品等の CT 撮影を行った。			
  			
中尊寺での調査・撮影 インバウンド向け英語版チラシ 会場風景			
【備考】 建立 900 年 特別展「中尊寺金色堂」：6 年 1 月 23 日～4 月 14 日 於本館特別 5 室 出品数 50 件			

年度計画に対する総合的評価

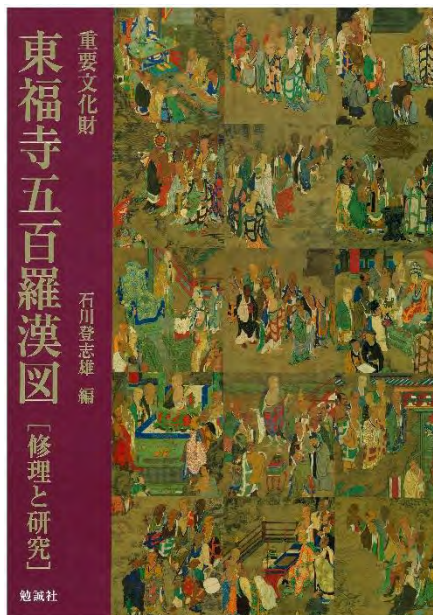
評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本展の開催にあたって調査で得られた成果を図録総論・各論・コラムや作品解説等で紹介した。また、デジタル撮影による最新の作品画像と彫刻作品等を初めて CT 撮影した成果は、基礎的な研究資料として長く活用されることが期待されるもので、多数の図版を掲載する展覧会図録等で公開することにより今後の新たな研究基盤を築くことができた点は評価される。

中期計画の実施状況の確認

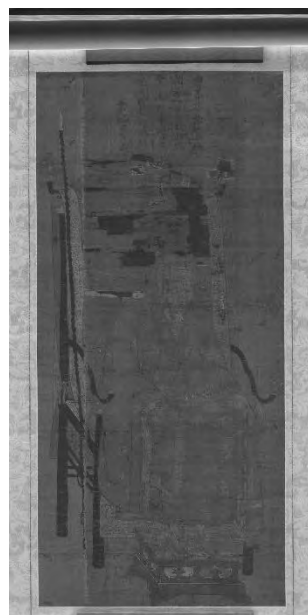
評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画 3 年目として、基礎的かつ網羅的に作品調査・撮影の成果を展覧会に還元することができた。また、図録等によって研究成果を広く一般に発信することができたほか、英語版チラシの作成や日・英・中・韓 4 か国語によるインバウンド事業者対象研修の実施等のインバウンド対策を積極的に行うことで、この成果は国内のみならず海外からの来館者にも発信できたことは評価される。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	2)特別展等の開催に伴う調査研究 ア 特別展「東福寺」に関する調査研究 ((4)-①-2))		
【事業概要】 特別展「東福寺」の実施に向けて文化財調査・研究を行い、その成果を展示・図録・会期中の講座などを通して、広く一般に公開する。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	列品管理室研究員 森道彦
【主な成果】 4年度末に東京国立博物館(3月7日～5月7日)でスタートした展示の内容や図録情報等を下敷きに、科学研究費等を活用しつつ本年度も引き続き調査を行い、さらなる研究の蓄積と、秋の当館での展覧における成果の普及公開に努めた。既刊図録は中世日本の対外交流において重大な位置を占めた東福寺の総合的な寺史を紹介した上、重要な未紹介作品を大量に収録し、今後の禅宗史や禅宗美術研究において必須の文献たり得るものに仕上がっていたが、さらに東福寺資料研究所の石川登志雄氏を通じ、京都会場の開会日に合わせて『重要文化財 東福寺五百羅漢図〔修理と研究〕』(勉誠社、10月)を発刊した。これは特に本展覧会において中心的な位置を占める日本中世のきわめて重要な水墨画家、吉山明兆の代表作である五百羅漢図に関する最新の知見や学術論文を集成した豪華本で、五百羅漢図に留まらず現状の明兆研究の到達点といえる重厚な内容である。また京都会場の会期中、日本史・書跡・絵画・彫刻など各分野の第一人者による計7回の連続講演会を開催し、東福寺に関する最新の学術研究の紹介に努めた。その他、外部依頼による講座や関係者講座を複数回実施した。 また京博会期に前後して、東福寺本山のご理解を得て館内機材等を用い、いくつかの出陳作品の科学調査(燻染いちじるしい書画の赤外線撮影、明兆筆五百羅漢図の顔料分析、金工品の組成分析など)を実施した。これらは今後の研究報告等に生かされる予定である。			
【備考】			



『重要文化財 東福寺五百羅漢図〔修理と研究〕』



円爾像(東福寺蔵・新出)のIR撮影

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	4年度に引き続き、東福寺および明兆に関する調査研究を継続的に実施し、図書の公刊や講座等を通じてその最新の成果を広く公開することが出来た。特に明兆作品については科学調査を含む複数回の様々な角度からの検討を通じて、図録が完成し展覧が始まった4年度末に比べても研究が大いに進展し、その知見は6年度春に当館で予定されている、同様に重要な中世水墨画家である雪舟を取り扱う特別展「雪舟伝説」においても生かし得るものを大いに含んでいる。得られた諸情報にはいまだ成果物としてまとまっていない新知見も多くあり、6年度以降に機を改めて、論文や報告書等による成果公開やテーマの普及啓発に一層努めていきたい。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	4年度に引き続いて非常に新知見が多く、書籍の発刊や講演等を通じて成果の普及や社会啓発も比較的順調に進んだと思われる。ただし紹介しきれていない優品や、重要だがいまだ検討を要する作例が多く残っており、今後、新たな科学研究費などを獲得して当該テーマの研究の深化に努め、今後の特別展等において生かしていきたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	2)特別展等の開催に伴う調査研究 イ 特別展「雪舟伝説—『画聖』の誕生—」に関する調査研究 ((4)-①-2))		
【事業概要】 特別展「雪舟伝説—『画聖』の誕生—」の実施に向けて文化財調査・研究を行い、その成果を展示・図録・会期中の講座などを通して、広く一般に公開する。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	保存修理指導室主任研究員 福士雄也
【主な成果】 日本美術史上もっとも重要な画家の一人とされる雪舟は、6 件もの作品が国宝に指定されていることが象徴的に示しているように、現在突出して高い評価を受ける存在である。しかし、それは単純に作品が優れているという理由だけによるのではなく、雪舟とその作品に対し、歴史的に積み重ねられてきた評価を土台としている。本展では、主に近世における雪舟受容の様相を辿ることで、「画聖」と仰がれる雪舟への評価がいかにして形成されてきたのかを検証する。桃山時代に雪舟の後継者を自称した雲谷派と長谷川派、雪舟画風を流派様式の礎とした江戸時代の狩野派はもとより、これら漢画系の画家とは異なる実にさまざまな画家たちが雪舟を慕い、その作品に学びながら、新しい絵画世界を切り開いていった。一口に雪舟受容といってもそれ自体複雑な性質を孕み、多角的に把握すべきものである。その多様な雪舟受容を通して、「画聖」雪舟誕生の過程を明らかにすることを目指す。 如上の目的を達成するため調査研究を進め、5 年度は以下のような成果を得た。 (1) 関連作品のリストアップ、図面への落とし込みを早期に進めたことで、構成上のバランスに留意した調査の遂行、さらにその調査を踏まえた構成の練り直しを行うことができ、展覧会の趣旨がより明確化した。 (2) 広く情報を収集することで、展覧会の構成上重要であり、かつ初公開となる作品・資料も見出すことができた。 (3) 作品情報・研究情報の蓄積を進めることで、従来は主として漢画系の画家を対象に考察されてきた雪舟受容について、江戸時代中期以降のいわゆる唐画画家も含む広範かつ多様な様相を把握することができた。 (4) 新規撮影が必要な作品については、可能な限り先行集荷の上、館内で撮影を行い、経費の節減とともに質の高い画像を確保することができた。			
			
		先行集荷作品の撮影の様子	
【備考】			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	当館では、平成14年に大規模な雪舟の回顧展を行っている。また、ここ数年雪舟ゆかりの各地域等においても雪舟の画業を紹介する展覧会が行われ、雪舟作品そのものへの理解は深まってきている。その一方で、近年では雪舟研究においても対象が拡大しつつあり、受容史への言及が盛んとなってきた。こうした状況を踏まえると、雪舟受容そのものをテーマとした展覧会の開催は、研究上も時宜に適ったものと言える。また、従来十分に検討されてきたとは言いがたい、いわゆる唐画の画家たちを含む多様な人々による受容をも俎上に載せようとする点で、独創性に富む有意義な企画となっている。近世絵画のみならず、中世絵画研究の発展にも資することが見込まれ、十分な成果を上げていると言える。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究として、京都文化を中心とした文化財の収集・調査研究・展示・教育普及を実施することが中期計画目標として定められている。この点で、雪舟という京都ゆかりの画家の、近世を中心とした受容の様相について充実した調査研究を進めることができたことは、当館における今後の中近世絵画研究に大きく寄与するものであり、十分な成果を達成できたと言える。また、本展では画像資料について大英博物館からの協力を得ており、国内外の博物館との連携という点においても中期計画目標に沿った事業の実施を遂行できていると言える。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	2)特別展等の開催に伴う調査研究 ウ 特別展「法然と極楽浄土」に関する調査研究 ((4)-①-2))		
【事業概要】 特別展「法然と極楽浄土」の実施に向けて文化財調査・研究を行い、その成果を展示・図録・会期中の講座などを通して、広く一般に公開する。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	企画室主任研究員 井並林太郎
【主な成果】 浄土宗の祖・法然（法然房源空、1133～1212）は、平安時代末～鎌倉時代初めの混迷期、「南無阿弥陀仏」の名号を称えることによって誰もが等しく阿弥陀仏に救われ、極楽浄土に往生できるという思想を説いた。それは日本仏教史上画期的なことであり、法然によって形成された教団が阿弥陀如来像や来迎図、祖師絵伝など美術史上重要な文化財を数多く生む母体として成長したこともきわめて大きな意義を有するといえる。本展は、6年に浄土宗開宗 850 年を迎えることを機に、法然による開宗から、弟子たちによる諸流派の創設と教義の確立、徳川将軍家の帰依によって大きく発展を遂げるまでの歴史を、国宝、重要文化財を含む貴重な文化財によってたどるものである。 当館で平成 23 年に開催した特別展覧会「法然 生涯と美術」は、法然の活躍した中世前期を中心とした内容であったのに対し、本展はその後の室町時代・江戸時代における浄土宗の歩みにも焦点を当てることで、弟子たちの活躍や施政者との関わり、それらを物語るあまり紹介される機会のない文化財を広く視野に収めることを目指す。 5 年度は、6 年度開催の特別展に向けて、巡回する東京国立博物館・九州国立博物館と密に連携しながら、出品予定作品を中心とする関連文化財の調査や撮影を進めた。当館は、地理的に近い関西や愛知県の浄土宗寺院を中心としつつ、東京・増上寺や茨城・法性寺の文化財調査にも出向き、展覧会で発信すべき学術的な新知見の蓄積に努めた。特に、総本山知恩院の経蔵に安置された彫像や書画、百萬遍知恩寺の法然上人坐像（新出）などについては先行集荷を行い、詳細な撮影や科学調査を実施したことで学術的な成果を多く得ることができた。			
 先行集荷作品の撮影			
【備考】			



先行集荷作品の撮影

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	新たな研究情報や画像の蓄積が進み、展覧会開催に向け順調に推移している。名品や新出作を含む作品群によって、法然の思想的意義や、浄土宗の歴史及び文化的意義を網羅的にとらえる展示計画になったと思われることからB評価としたい。展覧会が開催される6年度は、展示・図録・講座などにおいてそれらを発信していくにあたり、わかりやすさや訴求性の向上に努めたい。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	出品予定作品には当館の寄託品も多く含まれており、それらは継続的に調査研究がなされているが、本展の準備を契機に各分野において進展がみられた。特筆されるのは国宝「阿弥陀聖衆来迎図（早来迎）」（知恩院蔵）の修理が完了し、多くの知見が得られたことである（本展が修理後初展示）。こうした知見は本展における発信で完結するものではなく、その後の研究や展示にも活かされるものである。同様に新規に高い精度で撮影した画像も、アーカイブとして継続的に活用されることが見込まれる。展覧会の充実はもとより、継続的な博物館の使命達成にも資する成果を提供し得たことから、B評価とする。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	2) 特別展等の開催に伴う調査研究 ア 浄瑠璃寺九体阿弥陀修理完成記念 特別展「聖地 南山城―奈良と京都を結ぶ祈りの至宝―」に関する調査研究 ((4)-①-2))		
【事業概要】 浄瑠璃寺九体阿弥陀修理完成記念 特別展「聖地 南山城―奈良と京都を結ぶ祈りの至宝―」(会期: 7月8日～9月3日)に出品予定の文化財、および未出品の重要作品について基礎的な調査をおこなうとともに高精細カラー写真および近赤外線写真の撮影を実施し、その成果を展示および展覧会図録に反映すべく準備を進める。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	主任研究員 山口隆介
【主な成果】 南山城地域の歴史に詳しい協力者の先導のもと、未調査の寺院をひとつひとつ訪ねて文化財の所在確認と調査・撮影を精力的に実施し、作品の調書作成と高精細デジタルカメラを用いた写真撮影をおこなった。また、X線CTスキャン装置や蛍光X線分析装置、ファイバースコープなど最新鋭の機器を用いた調査を実施し、仏像の構造や像内の納入品および墨書、金銅仏の金属組成などに関する新たな知見が数多く得られた。さらに小型作品の撮影に必要な俯瞰台など、従来やや不足していた機材を整えることにより、より質の高い写真の撮影が叶った。 以上の成果をもとに、特別展「聖地 南山城―奈良と京都を結ぶ祈りの至宝―」を企画立案し、実施した。本プロジェクトにかかる調査で見出された作品を初公開することで展示の充実を図るとともに、撮影した高精細写真を展覧会図録に盛り込み、会場パネルとしても掲示することで、最新の成果を広く内外に発信した。			
			
		撮影風景	
【備考】 (1)実施した調査の回数: 33回 (2)論文等: 山口隆介「聖地 南山城をめぐる」(特別展図録『聖地 南山城―奈良と京都を結ぶ祈りの至宝―』巻頭論文 7月8日) (3)その他調査・研究の実績等: 公開講座「聖地 南山城の神と仏」(於: 奈良国立博物館講堂、8月26日)			



撮影風景

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	仏教美術を中心とした文化財の展示を活動の中核に据えている当館にとって、これに関連する多彩かつ魅力的な展示の企画立案および実施は、社会的な要請がもっとも多い業務である。こうした認識のもと、歴史的に奈良との関わりが深い南山城地域の文化財について美術史学的及び自然科学的調査を網羅的に実施し、その成果を展覧会に結びつけた本プロジェクトは博物館における調査研究とその成果の公表の理想的な形といえる。文化財指定を受けている著名な作品のみならず、これまで寺外での公開がほとんどなかった作品の基礎的な情報を高精細写真とともにいち早く公表し、さらにX線CTスキャン調査で得られた彫刻作品の構造や保存状態に関する情報を展覧会図録に豊富に盛り込むことで、最新の成果を広く内外に発信することができた。以上の理由から、所期の目標を大きく上回ることができたと考えA評価と判断した。なお、展覧会を契機として寄託を受けることになった作品が複数あるが、なかには保存状態が良好でないものも含まれる。6年度以降、本プロジェクトで得られた研究成果を活用しながら、計画的に保存修理を実施してゆく予定である。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	特別展「聖地 南山城―奈良と京都を結ぶ祈りの至宝―」の企画立案から実施に至る過程における調査研究は、「有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究」という中期計画に沿うものであり、その点において着実に実績を積み重ねることができた。地道な調査研究により数多くの新知見が得られ、その成果を速やかに広く発信することができたことからA評価とした。6年度以降も将来の企画展示の充実を図るべく、他機関とも積極的に連携しながら調査研究を継続し、着実な成果を挙げてゆきたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	2) 特別展等の開催に伴う調査研究 イ 第75回正倉院展に関する調査研究 ((4)-①-2))		
【事業概要】特別展「第75回正倉院展」の開催に当たり、円滑かつ安全に展覧会を遂行し、最新の成果を広く国民に周知するため、当該年度に出陳される宝物を含む宝物全般についての調査・研究をはじめ、展示環境、観覧環境、宝物の梱包・輸送方法など、多角的な観点からの調査・研究を実施する。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	工芸考古室 主任研究員 三本 周作
【主な成果】			
(1) 正倉院宝物についての調査研究			
・ 宮内庁正倉院事務所の協力を得て宝物調書を閲覧し、知見を解説パネル、図録、講座などを通じて発信した。			
・ 題箋や音声ガイドには英語版も制作し、外国人来館者への発信にも一定の成果を上げることができた。			
・ 特に5年度においては、正倉院展会期中に正倉院学術シンポジウムを開催し、国内外の研究者を交えた研究発表と議論を通じて宝物に関する知見を深めることができた。			
(2) 展示環境			
・ 学芸部の保存環境担当者を中心として、展示会場の過去の温湿度環境を精査し、会期中に安全な保存環境を実現するための調整作業を行った。			
・ 会期中、展示室や展示ケースの温湿度を常時監視し、必要に応じて展示ケース内蔵の調湿機器の設定変更、調湿剤の追加を行うなど対処し、適切な保存環境の維持に努めた。			
・ 上記については宮内庁正倉院事務所との事前協議や逐次の情報共有を行った。			
・ 会期終了後には塵埃の検査を実施した。			
(3) 観覧環境			
・ 展示台の高さを低くするなど、バリアフリーを意識した展示を心掛けた。また、個々の宝物の注目ポイントをわかりやすく伝えるため補足解説のパネルを随所に設置し、当該箇所が観やすい照明についても検討した。			
(4) 宝物の梱包・輸送			
・ 宝物の安全な梱包・輸送のため、当館学芸部研究員による内部検討会、及び宮内庁正倉院事務所との共同検討会を実施し、適切な梱包仕様をまとめることができた。			
【備考】			
・ 宝物に関する内部検討会を2回実施した。			
・ 新たに執筆された解説文について、学芸部職員全員で検討する機会を設けた。			
・ 公開講座 3回			
三田 覚之（当館学芸部工芸考古室主任研究員）「宝物に込められた祈り―転輪聖王としての聖武天皇―」			
三野 拓也 氏（宮内庁正倉院事務所保存課調査室員）「正倉院文書の復原―いわゆる「常陸国戸籍」について―」			
伊藤 旭人（当館学芸部工芸考古室研究員）「正倉院の箱を観る」			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	事前に実施した調書閲覧等の調査を通じ、宝物に関する様々な知見を得ることができ、またその成果を展示及び図録という形で広く発信し、「国民の宝」としての正倉院宝物の意義・魅力を伝えることができた。正倉院学術シンポジウムでの研究発表や議論を経て得られた知見は、6年度以降の正倉院展はもちろん、当館の今後の活動にも大きく貢献するものであるため、広く活用していく。また、正倉院展の開催の大前提である宝物の安全確保について、館内設備の入念な点検と、正倉院事務所との密な情報共有・連絡調整により、着実に実行することができた。さらに展示については、展示台の高さ、展示具の工夫、照明の調整等によって、宝物の魅力を存分に感じていただけるような展示が実現できたと考える。以上の理由から、所期の目標を達成できたと考えB評価とした。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画においては宝物に関する調査研究とその成果の発信が重点項目となっている。中期計画の3年目となる5年度は、4年度に引き続き、宝物についての最新の情報の収集に努め、さまざまなツールで広く成果を発信することができた。特に増加傾向にある外国人観光客を重視した取り組みも実施し、6年度以降の対応を検討する上で有用な知見を得ることができた。以上の理由から、B評価とした。 6年度以降も国内のみならず、外国人も視野に入れた広報や普及に一層力を注いで取り組む。また、宝物の安全な梱包・輸送・展示、快適な観覧環境の提供についても、5年度に得た知見を踏まえ、今後のさらなる改善につなげていく。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	1)収蔵品等及び各博物館の特色に応じた歴史・伝統文化に関連する調査研究 ア 特別展「憧れの東洋陶磁—大阪市立東洋陶磁美術館の至宝—」に関連する調査研究 (4)①-2)
【事業概要】 大阪市立東洋陶磁美術館所蔵の中国陶磁および韓国陶磁を核とし、日本文化に影響を与え、育んだ東洋陶磁、日本陶磁に影響を与えた東洋陶磁、および国内伝世または出土した類品の研究。	
【担当部課】	学芸部企画課
【プロジェクト責任者】	主任研究員 酒井田千明
【主な成果】 4年度：・日本文化に影響を与えた東洋陶磁の研究として、日本に喫茶の習慣をもたらした禅宗寺院の清規を描いた羅漢図の調査研究、足利将軍家の座敷飾りを構成した絵画の一つである秋景冬景山水図（国宝、伝徽宗筆、金地院蔵）、青磁千鳥香炉（東京国立博物館蔵）の調査研究を行った。 ・北部九州における東洋陶磁の流通状況の調査研究として、博多遺跡群・箱崎遺跡、大宰府観世音寺、首羅山遺跡に伝世または出土した中国陶磁・韓国陶磁の調査を行った。 ・中国陶磁の影響を受けて誕生した日本陶磁の調査を、当館所蔵品を中心に行った。 5年度：・上記の調査成果から、特別展「憧れの東洋陶磁」において「九州から出土した東洋陶磁」、「禅宗寺院の喫茶と茶器」、「足利将軍家と唐物」、「近世日本の食の器—中国陶磁の影響」のコーナーに出陳する絵画、東洋陶磁の伝世品及び出土遺物を厳選し、それらと関連する大阪市立東洋陶磁美術館の所蔵品と一緒に公開した。この展示により、日本文化に多大なる影響を与えた東洋陶磁を広く知っていただく機会となった。 ・重要文化財 油滴天目（当館蔵）の覆輪の非破壊の蛍光X線分析を行い、材質が純金であることと、修理の経緯が確認され、展示会場内でパネル掲示した。 また、人形製品の内部構造の調査として、高麗青磁の青磁彫刻童女形水滴・青磁彫刻童子形水滴、伊万里焼の色絵相撲人形（いずれも大阪市立東洋陶磁美術館蔵）のX線CTスキャンによる科学分析調査を実施した。高麗青磁の水滴については、これまで詳らかでなかった内部構造が明らかになり、二つの水滴の構造が異なることが分かった。また内壁の薄い箇所が見つかり、作品の扱いに今後留意が必要であることが分かった。相撲人形は、従来の研究者による予想を反して、複雑な構造をしていることが分かり、その成形方法の解明は今後の課題となった。	
【備考】 ・調査回数3回、調査点数4件 ・酒井田千明 「憧れの東洋陶磁—日本文化となった中国・韓国のやきもの」 『憧れの東洋陶磁—大阪市立東洋陶磁美術館の至宝』 東京美術 7月 ・展示会場内パネル「油滴天目と覆輪」	

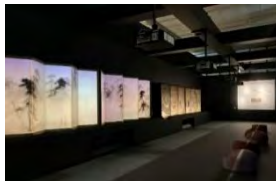
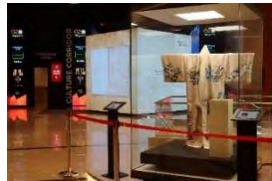
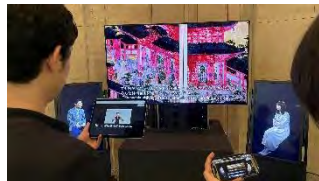
年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	古来唐物として渡来し、日本人の憧れとなり、日本文化の形成に多大なる影響を与えた東洋陶磁の名品を紹介し、来場者が東洋陶磁を身近に感じ、理解を育む機会となることを目指した。北部九州に伝世・出土した東洋陶磁や、室町時代の御殿の座敷飾りを再現といった日本文化を示す展示コーナーは、来場者の満足度も高かった。 新規の研究として、油滴天目の覆輪の調査、高麗青磁の水滴及び伊万里焼の人形のX線CT調査を実施した。特にX線CT調査のうち、高麗青磁については、造形技法が明らかになった。相撲人形については、その造形の複雑性が明らかになり、造形技法を検討するきっかけとなった。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	世界有数の東洋陶磁器のコレクションを擁する大阪市立東洋陶磁美術館は、東アジアにおける文化交流史の展示や研究を主要な活動テーマとする当館の活動方針と方向性を一にしておき、平成17年の当館開館以来、展示や研究において密接な関係性を構築してきた。本展はその一つの到達点とも位置付けられるものであり、よってA評価とした。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	3)文化財を活用した効果的な展示や、教育活動等に関する調査研究 ア レプリカやVR等先端技術を使った、文化財の活用についての調査・研究((4)-①-3))		
【事業概要】多くのの人に文化財に親しむ機会を提供することを目的として、先端技術による文化財のレプリカやデジタルコンテンツの開発に係る調査研究、文化財の活用事例についての調査・研究を行った。それらの知見をもとにコンテンツの開発と体験型展示等を実施し、それらの実施事業を通して、効果の測定並びに人々のニーズの調査を行った。			
【担当部課】	本部文化財活用センター	【プロジェクト責任者】	副センター長 丸山士郎
【主な成果】			
(1)キャノン株式会社、シャープ株式会社、NHK、TOPPAN 株式会社との連携による共同研究プロジェクトを継続して実施し、コンテンツの新規開発・改良を行った。また、科学系博物館イノベーションセンターとの連携による共同研究プロジェクトを新たに締結し、文化財複製を活用した巡回展示コンテンツの新規開発を行った。 2年度よりNHKと東京国立博物館が3年間共同研究として取り組んできた「8K文化財プロジェクト」では、5年度は文化財活用センターもプロジェクトに加わり活用・展開を担当し、8K技術を用いた文化財の鑑賞方法を開発する調査・研究の一環で「舟橋蒔絵硯箱」「埴輪 挂甲の武人」「中尊寺金色堂」の8K文化財を制作した。また、4年に制作し公開した「洛中洛外図屏風（舟木本）」コンテンツに多言語・手話CGサービスを加えるなど改修を行い、東京国立博物館で実証実験を行った。キャノン株式会社との共同プロジェクトにより新たに皇居三の丸尚蔵館と共同で「唐獅子図屏風」「動植綵絵」などの高精細複製品を製作したほか、高精細複製屏風にプロジェクションマッピングを施した体験型展示をG7広島サミットで展開し、G20ニューデリーサミットでは着物の複製などを展示した。シャープ株式会社と共同し、江戸時代の小袖に着目したデジタルコンテンツの新規開発に着手した。			
			
G7 広島国際メディアセンターでの展示、およびアフターサミットでの公開		G20 ニューデリーサミットでの「小袖白綾地秋草模様 尾形光琳筆」の復元模造の展示	
			
多言語・手話CGサービスを加えて公開した「8Kで楽しむ国宝屏風「洛中洛外 京めぐり」			
(2) レプリカ製作やデジタルコンテンツ制作に関して優れた技術を持つ企業・機関等や、それらを使ったコンテンツの公開、活用を行っている施設の視察・インタビューを行った。			
(3)機構内各施設や地域のミュージアムと連携し、レプリカやデジタル技術を活用したコンテンツ開発と体験型展示、教育プログラム、コンテンツ体験者へのアンケート調査を実施した。			
(4)「2022年度ぶんかつアウトリーチプログラム報告書」を刊行した。			
(5) 英国および米国の博物館におけるデジタルコンテンツの活用事例の調査・聞き取りを行った。			
(6)調査・研究の成果について、講演会等での発表を行った。			
【備考】			
(2) 主な調査先／NHK Tech であそぼ展、NHK 技研公開、ソニー内見会、キャノンギャラリー、Sharp Tech-Day			
(3) アンケート調査実施事業／デジタル法隆寺宝物館（東京国立博物館、①8Kで文化財 国宝 聖徳太子絵伝）5月16日～7月30日、②「法隆寺金堂壁画 写真ガラス原板デジタルビューア」8月1日～11月30日、8Kで文化財「ふれる・まわせる名茶碗」（九州国立博物館、7月11日～9月3日）、「洛中洛外めぐり 400年前の京都へ」（東京国立博物館、3月19日～4月7日）、ぶんかつアウトリーチプログラム（5年度全28回実施）			
(5) 主な調査先／Cooper Hewitt (Smithsonian Design Museum,) Metropolitan Museum of Art, New York Hall of Science, American Museum of Natural History ほか			
(6) 主な発表等／「デジタル法隆寺宝物館」への招待 藤田千織、西木政統（6月17日東京国立博物館月例講演会）			

年度計画に対する総合的評価

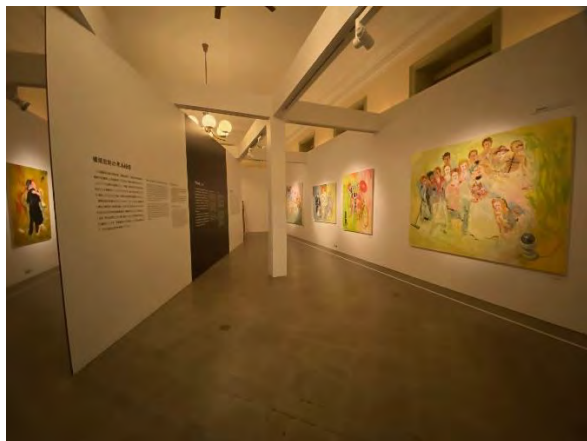
評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	- 企業等との共同研究プロジェクトの成果物を貸し出し、アウトリーチ、他館における公開などを通して広く活用し高い評価を得た。 - 文化財に親しむ手法の拡大を目指して、企業等の先進事例の調査・研究を行った。そこで得た知見をもとに、新たな文化財体験につながる新コンテンツの開発を開始し、地域の活性化の核となる文化財体験を開発・提供することによって、研究成果を広く国内外にも発信することができた。 - 地域の博物館や教育機関との連携を深め、先進事例の調査、コンテンツ開発、一般への公開・検証を合わせて行うことで、文化財活用の新たな道を拓く有意義な実施手法を構築する。また、より

	広い範囲の地域・会場で簡便に活用してもらうために、社会包摂的なサービスを加え、より普及性の高い仕様にコンテンツの一部の改修などを行い、公開した。
--	---

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画の3年目として、文化財の理解促進に資する展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究等の成果を新たな事業に反映させ、一般にも発信することができた点において、中期計画を順調に遂行できている。既存コンテンツを、より社会包摂的かつ広く利用が可能なコンテンツに改良し、公開することができた。また、より広い範囲の博物館・教育機関をはじめとする組織との連携を深めて、既存コンテンツ等を各地域において公開・活用できるよう、更に調査・研究を深めることが課題となる。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	3)文化財を活用した効果的な展示や、教育活動等に関する調査研究 ア 博物館環境デザインに関する調査研究		
【事業概要】 当館における文化財の展示／観覧環境のデザインについて調査・研究し、今後の展示／観覧環境のデザイン向上を目的として実施する。			
【担当部課】	学芸企画部企画課デザイン室	【プロジェクト責任者】	学芸企画部企画課デザイン室長 矢野賀一
【主な成果】 (1)「本館4室展示室改修」「ふれる・まわせる名茶碗（本館T3室）」「ふれる・まわせる名茶碗（九博）」「本館2階5室6室展示ケース製作設置」「博物館でアジアの旅」「本館2階4室展示ケース製作設置」「親と子のギャラリー『尾・しっぽ』」「親と子のギャラリー『中尊寺のかざり』」「博物館で初もうで」「内藤礼展」「新収品展」「寒山百得展（表慶館）」の展示デザインを行った。 (2)「お正月・お花見のポスター」、「屋外案内サイン」「屋外解説のパネル」「入館チケット」「寒山百得展のグラフィック」「正門プラザのサイン」「本館屋外バナー」のデザインを行った。 (3)本館4室解説、特別1室の解説パネルのサイネージ化を行った。			
			
本館2階4室展示室改修		「横尾忠則 寒山百得」展	
【備考】 他館のデザイン調査：国内の博物館・美術館でのデザインを調査し、特に5年度においては総合文化展の展示デザインのための参考とした。 調査先：北斎館、下瀬美術館、皇居三の丸尚蔵館、BNFRichelieu Site美術館、パリ装飾美術館、パリ日本文化会館、メキシコ国立人類学博物館、新アクロポリス美術館、アテネ国立考古学博物館、イラクリオン古代博物館			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	年度当初の目標を達成している。国内外の美術博物館デザインの最新事例を調査した成果を、総合文化展示及び特別展へ展開することが達成できている。6年度は引き続き国内外の美術博物館デザインの調査を行う。また最新の情報技術など、本館の総合文化展示や展示室のスマート化などへ展開できるよう調査研究を進める。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画の3年目として、本館4室で茶の湯の美術作品を展示するため、高演色LED照明器具を用いた展示照明及び展示ケースをデザインし、観覧環境の向上につながる改修を行った。 6年度以降は引き続き展示照明のLED化、3Dプリンターを使った支具の製作などの調査研究及び本館展示改修のデザインを進める予定である。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	3)文化財を活用した効果的な展示や、教育活動等に関する調査研究 イ 博物館教育に関する調査研究		
【事業概要】さまざまな来館者に向けて、博物館に親しみをもち、鑑賞体験を豊かにすることを目的とした、博物館教育の理論を基盤とした調査研究と実践を行った。			
【担当部課】	学芸企画部博物館教育課	【プロジェクト責任者】	学芸企画部博物館教育課長 鈴木みどり
【主な成果】			
(1) オンラインプログラムの開発と運営に関する研究と実践を行い、スクールプログラムの一部の配信と、オンラインギャラリートークの撮影・動画配信を実践した。さらに、海外からの来館者に向けて、英語による博物館の概要説明の動画を新たに撮影・配信した。			
(2) トーハク新時代プランに基づいた「日本文化のひろば」を引き続き実施する中で、急増した外国人来館者を主な対象として、日本文化に親しみを持てるアプローチを検討、研究し実践した。			
(3) 障がい者に向けたプログラムの開発・調査研究を継続して行った。博物館教育課内の研究会「みんなの博物館」プロジェクトを継続し、事例研究や発表を通して、共通意識を持って実践に繋げた。また、ボランティアバリアフリー班の研修を行った。視覚障がい者に対しては、盲学校のためのスクールプログラムを児童生徒やPTA、成人グループに実践した。また、親と子のギャラリーでは新たに触察ツール、点字版パンフレット、手話入り解説動画を制作した。聴覚障がい者へのUD トーク（音声認識アプリ）やヒアリンググループを引き続き使用し、誰でもがわかりやすい言葉を意識してコンテンツを作成した。また、感覚過敏の来館者のための「センサリーマップ」を元に、感覚過敏について理解を深めるワークショップを複数回実施した。それら障がい者のための取り組みについて、他館への助言を複数回行った。さらに、特別展および親と子のギャラリーに合わせて、「障がいのある方のための特別鑑賞会」を設け、それぞれの障がい者に配慮した準備や鑑賞時間を設け、感覚過敏の来館者のためにクワイエットアワーやカムダウンスペースを設置した。実施は職員とともに、事前研修を受けた当館ボランティアが行ったことで、ボランティアにもさらに障がい者対応への意識が高まった。			
(4) 低年齢層を含むファミリーグループへのプログラム開発と運営、調査を「トーハクキッズデー」および「トーハクプチ・キッズデー」において合計 3 回行った。初めて参加する子どものための親しみやすい作品解説や、ギャラリートークデビューカードの制作など、新たなコンテンツ開発を行った。			
(5) ボランティア組織のマネジメント及びボランティアの事業について、活動の方向性や内容に関する調査・研究を行った。また、他館への助言を行った。			
(6) 学会等で博物館教育に関する発表やギャラリートークを複数回行い、執筆をした。			
【備考】			
・ワークショップ、スクールプログラム、講演会、トーハクキッズデーおよびプチ・キッズデー、障がいのある方のための特別鑑賞会で、終了後にアンケートを実施。 ・東京国立博物館 150 年史の執筆、センサリーマップについて学会発表・オンラインギャラリートーク・ワークショップの実施、博物館ニュース執筆、調査協力、多文化共生について学会発表。			



障がいのある方のための特別鑑賞会の様子



トーハクキッズデーの様子



障がいのある方のための特別鑑賞会の様子



トーハクキッズデーの様子

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	博物館教育課内の「みんなの博物館」プロジェクトの研究会継続により、障がい者への対応に共通意識を持ち、各事業で一層配慮を持ったうえで実践することができた。障がい者への配慮に関しては社会的ニーズの高まりもあり、国立施設として「障がいのある方のための特別鑑賞会」を設けて当館が主体となって開催し、それぞれの障がい特性にあわせた配慮ができたことや、当館ボランティアにも障がい者対応への意識を高め、共同で実施することができたのは、他館への影響力ともなる大きな成果といえる。さらに、そのような成果をもとに、他館への助言や学会発表を複数行った。また、4年度のキッ

	ズデーの経験を活かし、より親子に親しみのあるプログラム開発や運営を行うことができ、リピーターも増え、子育て世代に対して来館しやすい場所として成果を上げた。また、今年度特に来館者の増えた外国人に対応するため、そのニーズを研究し、鑑賞体験を深めるために動画制作などを行った。 以上の実績により、年度計画以上の成果を上げたと評価した。
--	---

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画の3年目として、今までの経験や研究をもとに、障がい者、低年齢層を含むグループ、外国人に対して、より積極的な鑑賞支援プログラムを実践し、他館への助言や学会等での発信に努めた。今後の博物館教育研究の継続と実践の中で、さらに生かされるように努めたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	3) 文化財を活用した効果的な展示や、教育活動等に関する調査研究 ウ 凸版印刷及び文化財活用センターと共同で実施するミュージアムシアターにおけるコンテンツの開発に関する調査研究		
【事業概要】 文化財のデジタルアーカイブを活用した、文化財の新たな公開・鑑賞手法を凸版印刷株式会社と共同で研究する。			
【担当部課】	学芸企画部博物館情報課	【プロジェクト責任者】	学芸企画部博物館情報課長 村田良二
【主な成果】 ・「雪舟 一山水画を巡る」を3月8日～6月11日に公開した。 ・「DOGU 美のはじまり」を6月14日～10月1日に公開した。 ・調査研究課長・小山弓弦葉が監修した新作コンテンツ「冬木小袖 光琳が描いたきもの」を、修理が完了した重要文化財「小袖 白綾地秋草模様」(冬木小袖)の展示期間を含む10月4日～12月25日に公開した。 ・「江戸城の天守」を6年1月2日より公開した。			
【備考】  「冬木小袖 光琳が描いたきもの」告知画像			

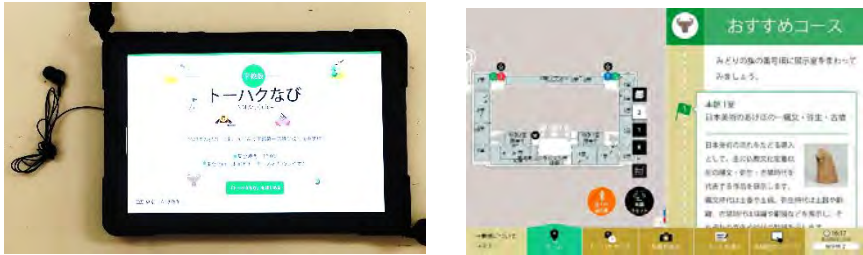
年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	既存のコンテンツの再演とともに、修理後初公開となる重要文化財「小袖 白綾地秋草模様」の展示と連動した新作コンテンツ公開することができ、文化財のデジタルアーカイブ蓄積の有用性を再確認できた。 また、「雪舟 一山水画を巡る」は5,751人(定員充足率16.3%)、「DOGU 美のはじまり」は8,497人(定員充足率21.2%)、「小袖 白綾地秋草模様」は5,421人(定員充足率18.1%)の来場者があり、デジタルデータを活用した新たな鑑賞手法の有用性が立証された。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画の3年目として、新たなデータ取得手法の確立を含め、デジタルアーカイブのデータ取得に関する調査研究を行い、新規データの取得による新作コンテンツを開発し、集客力のあるコンテンツの継続的な公開を行い、中期計画を遂行できている。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	3)文化財を活用した効果的な展示や、教育活動等に関する調査研究 エ ICTを利用した博物館見学ガイドの開発に関する調査研究
【事業概要】 来館者の鑑賞体験を深めることを目的とした日英中韓4言語による鑑賞支援アプリ「トーハクナビ」および児童生徒のための鑑賞ガイドアプリ「学校版 トーハクナビ」を運用するとともに、「トーハクナビ」のユーザー動向解析によりより豊かな鑑賞体験の創造に関する調査研究を行った。 あわせて、オンラインで提供する「おうちでギャラリートーク」を低年齢層に気軽にアクセスできるように、キッズデーなどでQRコードを用いて紹介し、利便性を上げた。	
【担当部課】	学芸企画部博物館教育課
【プロジェクト責任者】	博物館教育課長 鈴木みどり
【主な成果】 (1) 鑑賞ガイドアプリ「トーハクナビ」(日英中韓4言語対応)を継続し運用した。特に外国人来館者の増加により、わかりやすい案内表示を制作するなどの運用を行った。 (2) 学校団体で来館する児童・生徒を対象としたスクールプログラムの一環として開発したタブレット端末によるアプリ「学校版トーハクナビ」の端末貸出しと運用を行った。 (3) 当館公式ウェブサイト、国立博物館所蔵品統合検索システムColBase、ProtoDBと連携し、最新の展示情報や作品解説が常に更新される仕組みについて、引き続きシステムや表現など細部の調整を行った。 (4) 「トーハクナビ」のユーザーログを集積し、総合文化展における観覧者動向を分析した。 (5) 「トーハクナビ」以降の新しい形の鑑賞ガイドを視野に入れ、調査研究を行い、館内関係者や制作会社、他館での運用者との意見交換を行った。 (6) ICTを利用した博物館ガイドについて、他館への助言や口頭発表を行った。	
 学校版トーハクナビ	
【備考】 (5) 学術交流事業による韓国の博物館での鑑賞ガイドアプリの調査、丸紅ギャラリーでの導入調査の実施。	

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	4年度に比べて来館者が大幅に増加したこと、から、「トーハクナビ」アプリと「学校版 トーハクナビ」のより安定した利用が行えるように運用した。 また、館内検索システムやウェブサイトなどとの細部の調整を重ねて、正確なデータが集約できるように運用した。 更に、「トーハクナビ」ユーザーの動向についてのデータを集積し、分析することができ、「トーハクナビ」以外のオンラインを利用した動画の周知も行った。 そして「トーハクナビ」以降の新たな鑑賞ガイドについて検討、調査研究を行った。 以上の実績により、年度計画を達成できたと評価する。今後は、さらに利用者のニーズや利便性を高めたICTを見据え、調査研究を継続する。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画の3年目として、現在のアプリの継続的な運用を行うとともに、それ以降の鑑賞ガイドを見据え、より来館者のニーズに合い、利便性の高い形を追究した。博物館教育の各種鑑賞支援とあわせて、ICTを利用した博物館の鑑賞ガイドを追究し、さまざまな対象に対して、快適な観覧機会の提供に資するよう努めたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	3)文化財を活用した効果的な展示や、教育活動等に関する調査研究 オ 博物館広報・国際交流活動に関する調査研究		
【事業概要】当館の広報活動の充実と効果的な実施及び国際交流活動を推進するため、博物館における広報及び国際交流活動について調査・研究する。 5年度は国際交流活動については、ミュージアム日本美術専門家交流・連携事業を実施する。また、外国人来館者向けの多言語化対応の改善・強化に継続的に努める。			
【担当部課】	学芸研究部企画課国際交流室	【プロジェクト責任者】	国際交流室長 楊鋭
【主な成果】 (1) 主な内容 -国際交流：ミュージアム日本美術専門家交流・連携事業（6年1月29日～2月2日）、多言語化対応事業 (2) 内容の詳細 ・海外23館から25名の日本美術担当者を招へい、ミュージアム日本美術専門家交流・連携事業を実施し、ネットワークの構築と人的交流を深めた。 ・作品解説を翻訳時に、外国人来館者のニーズに応じて背景や専門用語など、補足的な説明を付け加えることを工夫した。 ・指定文化財ならびに日本美術・歴史をより正確に伝えるため、e 国宝に掲載している作品情報・解説文の多言語更新を継続して行った。			
			
ミュージアム日本美術専門家交流・連携事業 会議とエクスカージョンの様子			
【備考】			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	国際交流については、3年ぶりに対面式によるミュージアム日本美術専門家交流・連携事業を実施し、海外ミュージアムに所属する日本美術担当者との交流を進めた。ワークショップやエクスカージョンを再開させ、博物館スタッフ同士のネットワークを強める機会を改めて持つことができた。 また、博物館における多言語対応の改善・強化のため、言語表記や解説内容などを見直すことで、より質の高い多言語化ができるように努めた。さらに、外国人来館者との交流の機会を設け、博物館留学生の日（10月7日）に外国人留学生向けに英語・韓国語によるギャラリートークを実施した。 新型コロナウイルス感染症の流行下では中々できなかった対面での交流を、今後も深めていくための契機を持つことができ、6年度以降の活動に向け弾みをつけることができたと考え。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	5年度は海外ミュージアムとの交流・連携を高めるべく、中期計画にのっとり国際交流の具体的施策展開に向けて準備を整えることができた。国際交流活動ならびに外国人来館者への施策を積極的かつ効果的に実施するよう中期計画を今後も推進する。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	3)文化財を活用した効果的な展示や、教育活動等に関連する調査研究 ア 博物館教育及びボランティアに関する調査研究 ((4)-①-3))		
【事業概要】 文化財を活用した効果的な展示や、博物館における教育活動の充実を目指して、5年度は「ボランティア活動の充実」、「初学者に向けた情報発信」の2つをテーマに調査・研究を進めるとともに、これまでの調査・研究成果を展示やボランティア運営に反映させた。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	教育室主任研究員 水谷亜希
【主な成果】 1) 「ボランティア活動の充実」に関する調査・研究 ・文化財ソムリエ 20 人の育成にかかるスクーリング (20 回)、「文化財に親しむ授業」(7 回・542 人)に際して、参加者のアンケート調査を行い、今後の博物館教育の在り方について考えるべく、その分析を行った。 ・京博ナビゲーターの活動再開に向けて行った基礎講座にて、今後の活動の参考とするため、ナビゲーターに対して任意のアンケート調査を行い、その分析を行った。 2) 「初学者に向けた情報発信」に関する調査・研究 ・職場体験の受け入れ (1 回・2 人)に際して、参加者のアンケート調査を行い、今後の博物館教育の在り方について考えるべく、その分析を行った。 ・教員による複製を活用した授業 (3 校・生徒 123 人)の支援、「社会科教員のための向上講座」(1 回・77 人)の実施に際して、今後の事業の在り方について考えるべく、教員からの聞き取り調査と意見交換を行った。 ・これまでの調査・研究成果を踏まえて、入門的な特集展示「新春特集展示 辰づくしー干支を愛でるー」(6 年 1 月 2 日～2 月 12 日)を企画し、展示に関連するワークシート「さがしてみよう！こんなにゅう」(日英 11,000 部・中韓 3,000 部)を発行した。 ・当館の教育普及史のうち特に講座に焦点を当て、その成果を館主催の土曜講座にて「京都国立博物館の講座 100 年を振り返るー大正 13 年から令和 5 年までー」と題して講演した。 ・初学者への情報提供の方法を、プロジェクトのメンバーと共有するための方法について考察を行い、その成果を「美術による学び研究会メールマガジン」(第 498 号)にて「子どもに分かりやすく伝える方法」を共有する」と題して報告した。			
【備考】 ・本研究を踏まえた事業の実績については、処理番号 1311B、1312B も参照。			
		 さがしてみよう！ こんなにゅう (日英版)	

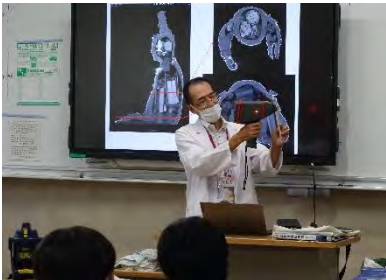
年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	「ボランティア活動の充実」に関して、5年度は、新型コロナウイルスの影響で中止していた京博ナビゲーター（ボランティア）の活動を再開したため、これまでの経験を踏まえて運営面での改善を行いつつ、基礎講座の参加者にもアンケート調査を行った。文化財ソムリエの活動についても、4年度のアンケート結果を反映しつつ、6年度の活動に向けて分析を行うことができた。「初学者に向けた情報発信」に関しては、実践に関連して調査・分析を行うとともに、館の教育普及史をまとめる第一歩として、講座の歴史を調査し、その成果を公表することができた。また「子どもに分かりやすく伝える方法」について考察した結果を公表するなど、成果を社会に還元することができたためB評価とする。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	休止していたボランティア活動（京博ナビゲーター）を再開し、従前行ってきた各種の教育普及活動を継続して実施するとともに、これまでの調査・研究の成果を公表することができたため、B評価とする。

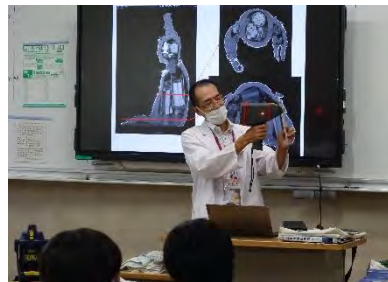
中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究		
プロジェクト名称	3)文化財を活用した効果的な展示や、教育活動等に関する調査研究 ア 歴史、伝統文化の教育普及に資するための調査研究 ((4)-①-3))		
【事業概要】奈良を中心とした寺社の歴史や伝統文化に関連する教育普及プログラムを実施し、学習の機会を提供するとともに、対面型・オンライン型いずれの教育活動も展開し、多様な形で地域学習の拡充を図る。			
【担当部課】	学芸部教育室	【プロジェクト責任者】	教育室長 中川あや
【主な成果】			
1) 学校教育との連携に関する調査研究			
・木津川市立教育委員会と連携し、木津川市立加茂小学校にて、木津川市立加茂小学校・南加茂小学校・恭仁小学校の3校88人を対象に、特別展「聖地 南山城」に関連した事前学習の出張授業を1回実施し(南加茂小学校のみオンラインで参加)、特別展の内容や木津川市の文化財について解説した。後日、上記3校が来館し、特別展を鑑賞した後に、各学校の教員に児童の鑑賞や学習の様子を確認し、事前学習の意義と課題を検証した(7月11日)。			
・奈良市立小中学校の教職員と木津川市立小中学校の教職員を対象とした研修を各1回実施し、教職員に対して奈良や奈良に隣接する南山城地域の文化財について解説するほか、参加した教職員達と、児童・生徒の主体的な学びを促す方法や学習効果を向上させるための方法について意見交換及び検討を行った。			
・奈良教育大学附属中学校1・2年生のフィールドワーク授業「奈良めぐり」の事前学習として学校に当館研究員が学校に出張し、1〜2年生40人を対象に、主に文化財の保存について解説した。フィールドワークの実施後、担当教職員にヒアリングし、生徒の学習内容について事前学習がどのような効果を与えたのかを調査した(9月21日)。			
2) 若年層来館者を対象とした展示内容に関する調査研究			
・奈良教育大学附属中学校の美術部1〜3年生10人や、職場体験に参加した奈良県内の中学校2校の2年生11人に協力依頼し、当館の展示を来館者の目線で鑑賞してもらうほか、ボランティアと共同でワークショップの実施を担当してもらう等して、教育普及担当の研究員と共に、当館の展示方法や教育普及事業についての課題の調査及び解決策を考案した(8月18日、11月16日・17日、12月6日・7日・8日)。			
3) 展覧会の鑑賞ツールに関する調査研究			
・特別展「聖地 南山城」の会期中、展示内容や、会場内で配布したワークシート、会場内に設置した子ども向け作品解説等に関するアンケート調査を、会期中の計7日にわたり実施した。アンケート用紙は日本語・英語・中国語・韓国語の4言語で作成し、配布・回収を行い、各コンテンツの教育的効果及び課題について検証した。			
【備考】1) 奈良市立小中学校教職員研修(8月8日):参加者20人、木津川市立小中学校教職員研修(8月17日):参加者60人。3) アンケート回収枚数:日本語版948枚、英語版161枚、中国語版240枚、韓国語版19枚。			



奈良教育大学附属中学校の授業「奈良めぐり」に関連した出張授業の様子



奈良県立若草中学校の生徒による職場体験でワークショップを実施



奈良教育大学附属中学校の授業「奈良めぐり」に関連した出張授業の様子



奈良県立若草中学校の生徒による職場体験でワークショップを実施

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	5年度は、学校教育、若年層来館者、展覧会の鑑賞ツールという観点から、様々な調査研究を実施することができた。特に、今後重要となる学校教育との連携について、当館の近隣の教職員と直接意見交換でき、学校プログラム等における事前学習や現地学習の課題を見つけることができたのは大きな成果であった。また、近隣の学校に通学する若年層来館者に対し、常設展と特別展を観覧した上で課題を抽出してもらう調査は初の試みで、次世代の来館を促す博物館展示を考える上で有意義な成果を得ることができた。さらに、特別展の鑑賞ツールについて、鑑賞後の利用者に詳細なアンケートを実施し、ツールのもたらした効果について検証するための多くのデータを集めることができたのも大きな成果である。以上の理由から、B評価とする。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	奈良を中心とした寺社の歴史の教育普及に資するため、多様な調査研究を実施することができた。学校への訪問講義や博物館での受け入れなど双方向の学習機会を提供し、また、対面、書面などバラエティーに富む方法で調査を行うことで、地域学習の拡充に資するデータを得ることができた。したがって、中期計画に沿った事業を順調におこなうことができたため、Bと評価する。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	3) 文化財を活用した効果的な展示や、教育活動に関する調査研究 ア 展示のテーマに則した解説パネル・冊子・ワークショップ等、観覧者の理解促進のための教育普及プログラムに関する調査研究((4)-①-3))		
【事業概要】 展示理解促進のため、教育普及事業を実施している。5 年度は弥生時代の棺である甕棺のレプリカを活用したワークショップ及び様々な時代の衣装を着る体験を行った。			
【担当部課】	学芸部企画課	【プロジェクト責任者】	主任研究員 西島亜木子
【主な成果】 ・4 年度に開催し、好評を得ていた甕棺墓埋葬体験ワークショップ「伊都国王のお葬式」を、5 年度は小学生や高齢者などにもわかりやすいよう改め、タイトルも「やさしい日本語 de きゅーはく 2023 王さまが死んだ！甕棺に入れよう」と開催した。 弥生時代、北部九州で使われた成人用甕棺の実物大レプリカを使い、王が亡くなって甕棺に埋葬するまでの一連の流れを、劇に参加しながら体験するもの。また、劇の終了後は参加者自らが甕棺に入る体験を行い、写真撮影をするなどして楽しんだ。4 年度も同内容のワークショップを実施したが、5 年度は特にやさしい日本語にすること、またすべて劇の中で解説したことにより参加した子どもから大人まですべての人が「甕棺についてよくわかった」とアンケートで回答し、好評を得た。 ・衣装体験イベント「古代人に 変身！」を開催した。 アンケートやヒアリングで「衣装を着たい」との要望を受け、実施した。過去にも実施し人気のプログラムであった本プログラムは、新型コロナウイルスの影響で中止していたが、5 類移行後、初の実施であった。弥生時代から着用された貫頭衣、古墳時代の埴輪をモデルに作成した男女の衣装、平安時代初期の文官、女官の衣装を準備した。老若男女、国籍問わず多くの方が体験し、写真撮影などをして楽しんでいただいた。 ・上記甕棺ワークショップを実施するにあたり、子ども用の王の衣装を製作した。 ・衣装体験では、平安時代初期の衣装を着た際の背景パネルに当館所蔵の大宰府政庁南門模型の画像を用いた。			
【備考】 ・「やさしい日本語 de きゅーはく 2023 王さまが死んだ！甕棺に入れよう」(2 回、参加者：各回 10 人、計 20 人) ・「古代人に 変身！」(参加者：約 70 人)			



甕棺墓埋葬体験ワークショップの様子



古墳時代の衣装を着て写真撮影する参加者
背景は大宰府政庁の南門



甕棺墓埋葬体験ワークショップの様子

古墳時代の衣装を着て写真撮影する参加者
背景は大宰府政庁の南門

年度計画に対する総合的評価

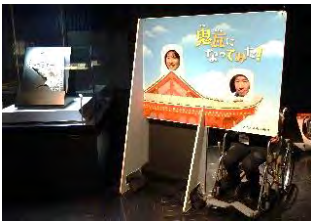
評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	甕棺墓埋葬体験ワークショップは、文化交流展示室にある甕棺模型の理解促進のために実施し、見るだけでは理解しづらい甕棺の埋葬方法を伝えることができた。アンケートでは100%が「たのしかった」、94%が甕棺について「わかった」と回答した。多くの参加者が展示室の甕棺レプリカを見に行ったり、甕棺が出土した遺跡に行ったりするなど、発展性もある。参加者が劇に参加する点は独創性がある。やさしい日本語は子どもから大人まで、外国人にもわかりやすく、より多くの参加者が見込める。今後障がい者や高齢者も対象に実施できる点で、応用性もある。 衣装体験は、来館者からの要望に応じて実施した。貫頭衣や古墳時代の衣装、平安時代初期の女官の衣装は当館が監修した独自のものである。言葉による説明がなくても実施可能であるため、国籍を問わず体験でき、継続して実施が可能である。今後、他の時代の衣装制作をするなど発展の可能性も見込める。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	来館者の展示理解促進のためのプログラムの実施は、来館者の要望を受け、プログラムの実施や内容の改善を行い、参加者から高い評価を得た。参加者の属性も子どもから大人まで幅広く、多様な来館者層に向けた活動を行うことができた。以上のことから、中期計画の展示に関する教育普及について、順調に遂行したと評価し、左記の評価とした。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	3)文化財を活用した効果的な展示や、教育活動に関する調査研究 イ文化交流展示室における障がい者向け展示解説プログラムに関する調査研究((4)-①-3))		
【事業概要】 当館では多様な方に博物館の楽しさを伝えるために、様々な取り組みを行っている。5年度は、視覚・聴覚に障がいがある方向けの展示やワークショップに加えて、発達障がい者や感覚過敏の方向けに明るさや音の情報を記載したセンサーマップの製作を行い、より包括的な施設としての博物館を目指す。			
【担当部課】	展示課 学芸部企画課 交流課	【プロジェクト責任者】	課長 齋部麻矢 主任研究員 加藤小夜子 主任研究員 西島亜木子 主任研究員 今井涼子
【主な成果】 (1)「さわって体験 本物のひみつ」 ・本展示は案内チラシを福岡県内すべての特別支援学校・小学校、福祉団体等へ毎年送付しており、展示期間に合わせて視覚障がい者団体が来館するなど、夏休みの定番の企画としての認知度も上がっている。 ・鬼瓦展示の体験コーナーとして、鬼瓦が設置された場所を伝えるために顔ハメパネルを製作した。パネルの下に空間を作り、車椅子の方も利用できるよう工夫した。また本物の古代鏡を触ってもらうなど誰もが楽しめる展示づくりに努めた。 ・解説の点訳、音声案内、手話動画、ナビレンスの活用等の多様な情報伝達方法を導入した。 (2)「みんな de きゅーはくを楽しもう!!模型 de 博物館たんけん隊」 ・当館の建築模型を使い、文化財を守るための建物の工夫を紹介した。ボランティアの協力を得て手話通訳と要約字幕を付けた。参加者は建築模型に触れることで、博物館への興味関心と文化財保護への理解を深めた。 (3)「みんな de きゅーはくを楽しもう!!」視覚障がい者向けガムランワークショップ 5年度で2回目となる。4年度は楽器の解説を聞きながらの触察までの実施にとどまっていたが、5年度は演奏体験を加えた。外部指導者と綿密に打ち合わせやリハーサルを行い、内容の検討を重ねた。終了後のアンケートでは参加者全員が「よい体験だった」、10人中8人が「演奏ができてよかった」と回答。「どのような時にどのような曲が演奏されたのか、詳しく知りたい」などの要望もあった。 (4)4年度に引き続き、視覚障がい者が晴眼者と博物館を楽しむ取り組みとして、展示作品について対話で鑑賞する会を2回実施した。視覚障がい者・晴眼者が混在する4～6人のグループで展示について作品の形態や印象などを語り合いながら鑑賞し、その後に研修室で各自の感想をシェアした。全参加者が「満足」と回答し、視覚障がい者からは「いきなり説明を聞くより印象を聞く方が心に残りやすい」「複数の方の感性で楽しめる」、晴眼者からは「個人の鑑賞よりも作品を観察し理解も深まる」「博物館へのハードルが下がった」などの感想があった。また「話しながら見ることがスタンダードになっていくことが理想」と今後の継続への希望もあり、視覚障がい者、晴眼者共に博物館観覧の楽しさや作品への興味を深めた。 (5)手話通訳付きバックヤードツアー ・手話通訳を付けたバックヤードツアーを6年3月2日に実施し、参加者からは高い満足度を得た。(参加者：31人) (6)発達障がい者や感覚過敏の方向けに、「あんしんマップ」(センサーマップ)を製作した。マップには①混雑する場所、②明るい場所・暗い場所、③音が出る場所、④においがする場所を記載し、避けるべき場所が来館前に分かるようにした。①～④それぞれと、①～④すべてが掲載されているもの5種類を準備し、特別支援学校等に配布したほか、館内でも配布した。また当館ウェブサイトでも閲覧、ダウンロードできるようにした。 (7)手話通訳・要約筆記付き講座・ミュージアムトーク 聴覚障がい者への情報保障として、講座やミュージアムトークに手話通訳・要約字幕を導入した。「手話がわかって楽しい」「要約筆記は分かりやすく良い」、「この取り組みが今後も続くと良い」など多くの感想があり、障がいの有無に関わらずこの取り組みに対する良い評価を得た。			
【備考】 ・「さわって体験 本物のひみつ」(8月8日～10月1日) ・「みんな de きゅーはくを楽しもう!!模型 de 博物館たんけん隊」(11月19日 参加者：午前7人、午後15人) ・「みんな de きゅーはくを楽しもう!!」視覚障がい者向けガムランワークショップ(11月23日、参加者10人) ・視覚障がい者とともに楽しむ対話型鑑賞会「見えると見えない～対話で楽しむ博物館～」(9月2日、参加者：15人)			



車椅子での体験がしやすい
鬼瓦の顔ハメパネル



対話型鑑賞会の様子



車椅子での体験がしやすい
鬼瓦の顔ハメパネル



対話型鑑賞会の様子

人 12月23日、参加者13人)
 ・手話通訳付きバックヤードツアー (6年3月2日、参加者:31人)
 ・手話通訳・要約筆記付き講座・ミュージアムトーク (8月26日、参加者:59人 10月28日、参加者146人 1月8日、参加者70人)

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	障がい者を対象とした展示やイベントを、当事者や参加者の意見を取り入れて、より充実した内容で継続的に実施した。認知度と評価が向上し、参加者が増加した。特に「あんしんマップ」(センサリーマップ)の作製・配布や手話通訳・要約筆記付きの講座等の新たな試みは、障がい者から高評価を得るとともに、健常者にも好評を得た。年度計画の達成及び新たな取り組みの実施とそれに対する高評価から、A評価とする。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	これまでの蓄積や新たな試みによる検証を活かし、5年度は4年度以上に充実した内容で実施することができた。新たに講座への手話通訳と要約筆記の導入を通して、情報伝達の幅を広げるとともに、発達障がい者や感覚過敏の方向けのセンサリーマップを作成する等、これまで課題としていた視覚、聴覚障がい以外の障がい者への対応に向けた第一歩を踏み出したことは大きな成果である。以上のことから、今後中期計画を上回る成果が見込まれると判断しA評価とした。引き続き視覚、聴覚以外の障がい者にも対象を広げるとともに、当事者の意見に耳を傾け、誰にとっても利便性が高く楽しい博物館になるよう取り組みを進めたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ②その他有形文化財に関連する調査研究
プロジェクト名称	1)有形文化財の保存環境・保存修復並びに科学技術を活用した分析等に関する調査研究 ア 博物館の環境保存に関する調査研究
【事業概要】当館による文化財の活用に伴い保全の必要性が生じる、収蔵環境、展示環境、輸送環境について調査研究し、今後の環境の向上を目的として実施する事業。	
【担当部課】	学芸研究部保存修復課
【プロジェクト責任者】	課長 和田浩
【主な成果】 1) 輸送環境に関する調査研究成果 これまでの研究成果が評価を受け、日本包装学会より学会賞を授与された。電池を用いずに非接触で電気供給できる無線センサを輸送包装試験に応用し、その有効性を実証することに成功した。文化財梱包に用いる綿の落下衝撃特性に関して、実験を実施し、新たな知見を得た。 2) 収蔵環境に関する調査研究成果 空気質特性を考慮した資料保管用中性紙箱の適切な使用方法に関する検証を行い、従来から用いられていた中性紙製保存箱内に滞留する汚染ガス成分の濃度変化に関して新たな知見を得た。 3) 展示環境に関する調査研究成果 展示室内滞留者データの可視化に関する研究を実施し、特別展覧会開催時の各時間帯における室内滞留者の増減傾向について新たな知見を得た。 4) その他の調査研究成果 AR 技術を用いた文化財の履歴情報の利活用に関する基礎的研究を実施し、文化財自体を AR マーカーとして利用した上で、サイバー空間上に修理履歴を表示するアプリケーションのプロトタイプを開発した。 国立民族学博物館のシンポジウムで研究成果の発表を行った。 ベルリン国立博物館（ドイツ）主催の講演会で「Visualization of airflow and humidity transfer occurring within a display case」と題した研究成果の発表を行った。	
【備考】 1) 輸送環境に関する調査研究成果 ・日本包装学会「学会賞」受賞 ・電池なし無線センサを用いた輸送包装試験（日本包装学会誌 32(3)） ・文化財保護のための安全輸送・梱包設計に関する研究（日本包装学会第 32 回年次大会） ・国内長距離輸送における振動の連続計測と解析（日本包装学会第 32 回年次大会） ・落下衝撃試験による綿の衝撃吸収特性の検証（日本機械学会 2023 年度年次大会） 2) 収蔵環境に関する調査研究成果 ・空気質特性を考慮した資料保管用中性紙箱の適切な使用方法に関する検証（文化財保存修復学会第 45 回大会） 3) 展示環境に関する調査研究成果 ・展示室内滞留者データの可視化に関する研究（展示学 66） 4) その他の調査研究成果 ・AR 技術を用いた文化財の履歴情報の利活用に関する基礎的研究（文化財保存修復学会第 45 回大会） ・データサイエンスとミュージアム（教職課程センター紀要 8） ・東京国立博物館における文化財の保存（みんぱく創設 50 周年記念国際シンポジウム 博物館における資料保存の過去、現在、そして未来） ・Visualization of airflow and humidity transfer occurring within a display case (https://www.smb.museum/en/events/detail/visualization-of-airflow-and-humidity-transfer-occurring-within-a-display-case-2024-02-27-183000-142252/)	



研究成果に関する講演（ベルリン）

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	論文発表、学会発表を行い、成果を社会へ公表するとともに、既存課題の解決につながる技術を開発した。特に、文化財輸送時に生じる振動を計測するに際して、ボトルネックになっていた加速度センサの超小型化と電源供給の両立という課題が従来から存在していたところ、電池を用いずに非接触で電気供給できる無線センサの応用によってそれを解決できる糸口を見出した点は高く評価される。事業の中で

	も研究成果を国際的に発信できた点は特筆すべき点である。以上から当初の年度計画を大きく上回る成果を達成することができたと言え、A評価が妥当であると考えられる。
--	--

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画の3年目として、文化財の保存・活用に関連する収蔵環境、展示環境、輸送環境の各分野において重要な進展を遂げた。特に、輸送環境の調査研究においては、革新的な非接触電気供給システムの応用と文化財梱包材の衝撃特性に関する新しい知見を獲得し、文化財の安全な輸送方法に大きく貢献した。また、収蔵環境においては、中性紙箱内の汚染ガス濃度変化に関する新たな知見を得ることに成功し、資料保管方法の改善につながる成果を上げた。展示環境に関しては、展示室内の滞留者データの可視化による分析を行い、特別展覧会時の人流の動向に関する貴重なデータを収集した。さらに、AR技術を活用した文化財情報の提示方法に関する基礎研究を進め、文化財のデジタル化とその活用における新たな地平を開いた。これらの成果は、中期計画の基本方針に沿ったものであり、次世代の博物館運営や文化財保全において、重要な役割を果たすものと期待される。引き続き、多方面にわたる研究活動を通じて、実践的な成果とともに学術的な成果も上げることができたことは、中期計画の進捗状況を評価する上で非常に肯定的な要素である。今後もこの進捗状況を踏まえ、残りの中期計画期間における研究の方向性や目標の再評価を行い、更なる成果を目指す。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ②その他有形文化財に関連する調査研究		
プロジェクト名称	1)有形文化財の保存環境・保存修復並びに科学技術を活用した分析等に関する調査研究 ア 修復文化財に関する資料収集及び調査研究 ((4)-②-1))		
【事業概要】 文化財保存修理所で実施されている修復・模写文化財の資料収集及び調査研究を行う。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	学芸部保存修理指導室長 羽田聡
【主な成果】 (1)修復文化財情報の収集と調査 ・5年度、文化財保存修理所の工房に搬入した新規の修復文化財に関して、修理工房より提出された「修理計画書」に基づき、100件のデータを収集し、「修復文化財データベース」に登録した。 ・当館研究員により7回行った修理工房の巡回のほか、修理技術者とともに実施した科学調査を含む調査を適宜実施し、文化財の構造や使用材料、内部納入品・銘文調査など、修理中にのみ得られる情報を収集、分析した。 (2)修復文化財情報の整理 ・4年度に修理が完了し、搬出を終えた修復文化財に関して、修理工房より提出された「修理解説書（報告書）」に基づき、511件のデータを「修復文化財データベース」上で更新し、整理作業を行った。 ・修理工房より提出をうけた「修理計画書」や「修理解説書（報告書）」など、修復文化財情報の保管は、紙ベースで行うとともに、将来的な利活用を視野に入れ、過去の情報から順次デジタル化を進め、平成3年度から5年度にかけての分165件を実施した。 (3)模写作成のための文化財の調査 ・模写修理事業者（六法美術）による宮内庁京都事務所蔵「京都御所清涼殿障壁画」の4か年目の復元模写（6か年計画）を行った。模写する文化財は搬入せず、原寸大写真及び資料をもとに復元を行っている。 (4)情報の公開と共有 ・2年度に修理が完成した文化財139件に関する報告を『京都国立博物館文化財保存修理所修理報告書』第21号（6年3月31日発行）として発行し、あわせてPDF化した。 ・修理時の調査により発見された銘文14件を「銘文集成」として同書に収録した。			
【備考】 (1)データ収集件数 109件、巡回回数 7回 (2)データベースの追加更新件数 511件、修復文化財情報のデジタル化 165件 (4)報告書 1冊（修理報告139件、銘文報告14件を含む）  『京都国立博物館文化財 保存修理所修理報告書』 第21号			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	近年は1件で数千点という大量文書群の修理や、完了までに複数年を要する修理が増加し、文化財保存修理所に搬入される修復文化財の件数は、年度ごとに必ずしも一定せず、したがってデータの収集件数や更新件数には増減が生じる。この点を考慮し、上述の主な成果を通覧すると、修復文化財に関する調査研究、情報の収集と蓄積、発信による公開が4年度と同様、バランス良く行われており、初期の目標を達成できていると判断したため。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	文化財の修理及び模写にさいして行われる調査研究は、作業に着手している期間のみ実施が可能で、材質や製作技法の解明と密接に関係しており、得られた情報を収集・蓄積及び公開していくことは次世代の安全な修理、究極的には文化財の継承に繋がる。こうした非常に重要な事業を継続的に実施していることに、社会のニーズに対応しうる、将来的な利活用を視野に入れた情報のデジタル化を進めている点を加味し、中期計画3年度として、順調に計画を遂行できていると判断したため。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ②その他有形文化財に関連する調査研究		
プロジェクト名称	1)有形文化財の保存環境・保存修復並びに科学技術を活用した分析等に関する調査研究 イ 文化財の製作技法・材料等に関わる調査・研究 ((4)-②-1))		
【事業概要】 博物館の展示・教育普及活動に関連する調査研究として、有形文化財の製作技術に関わる調査や、使用材料等に関する調査を実施し、データの蓄積を図る。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	保存科学室長 降幡順子
【主な成果】 (1)作品の調査研究 5年度の構造調査としては、X線CT撮像7件(9点)、SfMによる3次元形状調査1件(1点)、透過X線撮影による内部構造調査3件(30点)を実施した。作品の材質調査としては、蛍光X線分析調査22件(426点)、X線回折調査3件(12点)、分光分析調査2件(2点)、オルソ撮影3件(3点)を実施した。 (2)展示に関連する調査研究の一例 展示のために借用した文化財資料に対して、蛍光X線分析およびX線回折分析調査による材質調査、赤外線撮影による画像調査を実施し、製作・技法等を確認した。特別展「東福寺」では「円爾像(東福寺蔵)」の全画面についてオルソスキャナを用いて赤外線画像の取得し、墨書の自賛や描線などについて明らかにした。特集展示「泉穴師神社の神像」では蛍光X線分析・X線回折分析を実施し、顔料の同定を行った。一部の神像彩色に、鎌倉時代では稀である緑土が用いられていることを明らかにした。 (3)館蔵品等を対象にした調査では、「御室窯出土陶片資料」の胎土の蛍光X線分析を実施し、文献資料と併せて胎土の化学組成と器種について有用なデータを得た。「薄に雲取花菱繡箔裂」等の銀箔の調査では、銀箔に含まれる銅の成分について江戸時代の染織品について事例調査を行った。これらの調査により文化庁の復元事業にも有用なデータを得ることができ、復元材料の製作に役立てることができた。 (4)地方公共団体や美術館からの依頼を受入れた展示・修理事業に関わる調査を実施し、使用材料や復元材料に関するデータ提供を行った(京都府、京都市、名古屋市、四万十市、犬山市、飛騨市、四天王寺宝物館、刈谷市歴史博物館、平等院ミュージアム鳳翔館、同志社大学歴史資料館)。			
【備考】 (1)学会発表等 ・降幡順子・降矢哲夫・尾野善裕「御室仁清窯出土陶片の胎土に関する調査」『日本文化財科学会第40回大会』10月 ・降幡順子・末兼俊彦・南谷恵敏「博物館とX線CT調査―作品修理、時々新発見―」日本非破壊検査協会放射線部門講演会、9月 (2)論文等 ・久保智康・降幡順子・治村嘉史『鉄地鍍金』技法の検証実験について』『鳳凰学叢』第19号、平等院、5月 ・降幡順子「新創館(旧育真館)地点出土埴塼資料の科学的調査」『上京遺跡・新町校地遺跡発掘調査報告書―同志社大学新創館(旧育真館)建替え工事に伴う発掘調査-』同志社大学歴史資料館、2024年2月			



泉穴師神社の神像の調査風景



泉穴師神社の神像の調査風景

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	5年度は、41件(483点)の有形文化財について分析調査を実施し、製作・技法等に関わる情報を得ることができた。外部組織からの調査依頼も、積極的に受け入れ、調査成果の活用、社会への貢献に努めた。分析事例の集積とともに、得られた調査成果の一部は学会で発表するなど情報発信を行った。6年度以降も継続して実施する予定の調査については、データの蓄積を図り、成果を図録、学会発表等で情報公開する予定である。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	5年度は、収蔵品の調査のみでなく、復元事業に係る調査点数が増加し、復元に用いる材料調査への情報提供が多かった。6年度も有形文化財を対象に、使用材料の傾向や特徴を明らかにするなど、中期計画期間を通して幅広い活用を目指したい。博物館の展示・教育普及活動、さらに復元修理や文化財指定に関わる調査などに関連する科学調査を行い、データ蓄積を図るとともに、研究成果は随時、図録や学会等を通じて公開していく予定である。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ②その他有形文化財に関連する調査研究		
プロジェクト名称	1) 有形文化財の保存環境・保存修復並びに科学技術を活用した分析等に関する調査研究 ウ 社寺等における保存環境に関する調査研究 ((4)-②-1))		
【事業概要】 文化財を有する社寺には、必ずしも文化財収蔵のための専用施設が整備されておらず、建造物内に常設されている有形文化財に対して、温度・湿度、照度等を博物館環境と同等に整えることは難しい。また、収蔵建物自体が有形文化財であることも珍しくなく、収蔵環境を整備するために大がかりな改修工事を行うことも困難な場合が多い。本調査研究では、文化財の劣化に大きく影響する温湿度の変動や、照度・紫外線の強度、空気質について、まずは現状の環境調査を実施し、その結果を踏まえて簡便な手法で保管環境の改善に関する助言・協力をを行い、文化財のより適切な保管環境を目指す。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	保存科学室長 降幡順子
【主な成果】 社寺等を対象とする文化財の保管環境に関して基礎データの収集に努め、改善に関する協力を行った。 (1) 知恩院との月次報告 12 回実施、知恩院境内の 4 箇所での温湿度モニタリングの実施 (2) 清水寺と新たに連携連休協定を結び、法蔵殿・新倉内の 4 箇所での温湿度モニタリングを実施、空気室調査（アンモニア、有機酸類、ホルムアルデヒド類）を 1 回実施（春季）。清水寺との月次報告を 12 回実施。 (3) 社寺調査の一環として、龍光院収蔵庫内 2 箇所での温湿度モニタリングを開始。龍光院との月次報告を 6 回実施。 (4) 鳥取県・三仏寺収蔵庫内外 2 箇所での温湿度モニタリングを継続実施 (5) 文化財資料の適切な保管環境に関する検討			
【備考】 ・「浄土宗総本山知恩院境内施設の保管環境に関する調査」降幡順子、井並林太郎、中屋菜緒、近藤無滴、前田昌信、関良法、三枝樹典子、北村まどか 『文化財保存修復学会第 45 回大会』研究発表。			
			
清水寺法蔵庫内の設置状況		龍光院収蔵庫内の設置状況	

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	5年度の社寺等における保存環境に関する調査研究は、新しく清水寺収蔵庫4箇所、龍光院収蔵庫4箇所の計測を開始し、4年度からの継続として、知恩院境内4箇所、三仏寺収蔵庫2箇所にて実施した。知恩院境内の環境調査については、1年間継続することとなり、前年度までの2年間データの蓄積から、学会発表を行い、広く情報公開に努めた。1か年事業として開始した清水寺では、異なる空調設備を備える各収蔵庫の環境測定を行い、24時間空調であっても、夏冬における日変動の差が大きいことを明らかにすることができた。これは今後の24時間空調設備の運用方法と対策を考える上で重要なデータである。また社寺調査と併せて収蔵庫環境調査を実施できる点は、保管環境も整えることが可能となるなど、社寺等の保管環境の改善につなげることが期待できる。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画期間内に、環境調査を実施する社寺を順次変更しながら、広く公開・保管環境と改善に関する取り組みを実施することとしている。6年度では、龍光院・三仏寺等の収蔵庫環境の測定を重点的に行っていく予定である。日常行われている法会や参拝者へも配慮をした効果的な改善策については、社寺の協力が必須であるため、今後も社寺との連携を十分に取りつつ、継続してモニタリングを実施していく予定である。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ②その他有形文化財に関連する調査研究		
プロジェクト名称	1)有形文化財の保存環境・保存修復並びに科学技術を活用した分析等に関する調査研究 ア 収蔵庫・展示室・ケース内部等における環境が文化財に与える影響などに関する調査研究 ((4)-②-1))		
【事業概要】 館内施設や設備（展示室・展示ケース・収蔵庫等）の環境が文化財に与える影響の調査・分析を目的としている。次の3点の調査を継続的に実施し、得たデータの分析と情報共有を行うことで保存環境の向上を図る。 (1)温湿度センサーを用いた館内施設の温湿度調査 (2)展示ケース内に浮遊する塵埃調査（電子顕微鏡を用いた塵埃の観察） (3)文化財害虫トラップの設置及び回収と解析			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	保存修理指導室長 鳥越俊行
【主な成果】 (1)4年度に引き続き、展示室や展示ケースに設置した無線式温湿度センサーで24時間リアルタイムモニタリングを実施した。蓄積した温湿度データから、展覧会ごとに情報を整理し展示ケースの気密性向上に役立てた。収蔵庫についても4年同様、温湿度データロガーとデジタル温湿度計を用いた定期的なモニタリングと温湿度データの回収を行い、空調の調整に役立てた。 (2)正倉院展終了後に、展示ケース内のアクリル製治具などから塵埃を採取・電子顕微鏡にて観察し、塵埃の状況からケースの気密性に対する評価を行った。調査結果を踏まえ、気密性向上のための修理や部材交換などのメンテナンスを実施した。 (3)4年度に引き続き、文化財害虫の生息状況を把握するため、文化財の保管及び展示に関わる箇所を中心に昆虫調査用トラップを設置し、2か月に1回交換を行った。調査結果を蓄積し分析することでIPM(総合的有害生物管理)を推進し、文化財害虫の生息が確認された箇所を重点的に清掃し被害の低減に努めた。また、清掃と防塵マット交換を定期的に実施し、展示室・収蔵庫の周辺の衛生環境保持に努めた。			
【備考】 ・学芸部保存修理指導室員並びに総務課環境整備係員等により構成される、「奈良国立博物館環境整備委員会保存環境に関するワーキンググループ」を実施した。月に1回程度開催し、保存環境に関する問題点や改善案について協議を重ねた。 (1)展示室内温湿度調査：66か所 (2)展示ケース内ほか粉塵調査：25か所 (3)文化財虫害生息状況調査：100か所 ・「奈良国立博物館環境整備委員会保存環境に関するワーキンググループ」：11回開催			



館内環境に関する協議



館内環境に関する協議

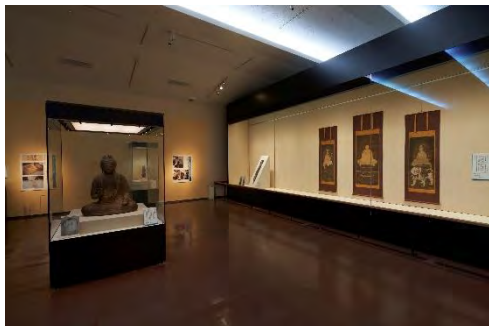
年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	継続した調査の実施やデータの蓄積を着実に行った。また調査で得られた結果を踏まえ、ワーキンググループでの情報共有や議論を行い、保存環境の保持と改善を図り、年度計画を着実に実行することができた。以上の理由から、Bと評価した。 6年度もデータの共有化を進め、保存環境の維持や向上を進めると共に円滑な監視体制を整えけるとともに、なら仏像館についても同様に館内環境維持のため継続して調査を進めデータの蓄積を図りたい。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	展示室や収蔵庫では、温湿度並びに文化財害虫に関する継続したモニタリングや調査を、年間を通じて行うことができた。また、なら仏像館も同様にデータの蓄積を着実に継続して実施することができ、5年度も中期計画を着実に遂行できた。以上の理由からBと評価した。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ②その他有形文化財に関連する調査研究		
プロジェクト名称	1) 有形文化財の保存環境・保存修復並びに科学技術を活用した分析等に関する調査研究 イ 文化財修理の観点からの収蔵品・寄託品等の調査研究 ((4)-②-1))		
【事業概要】 (1) 所蔵品や寄託品の修理前調査及び光学調査を実施し、作品の基礎データを蓄積する。 (2) 修理中の文化財について光学調査を実施し、修理へ反映させる。 (3) 調査研究の成果を公表する。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	保存修理指導室長 鳥越俊行
【主な成果】 (1) 所蔵品や寄託品の保存状態を詳細に観察するとともに、得られた情報をふまえて保存カルテを作成している。必要に応じて光学調査も併せて実施し、作品の基礎データを蓄積した。 (2) 所蔵品や寄託品の修理に伴い、詳細な観察や光学調査を実施した。保存カルテと調査結果をふまえて修理調書を作成し、館内鑑査や修理方針の策定に役立てた。 (3) 修理中に発見された銘文について、当館研究員が翻刻を行い情報化と整理を実施した。これらの成果は「奈良国立博物館 文化財保存修理所 修理報告書」第6号として2月に刊行した。			
【備考】 ・4年度に保存カルテや修理調書を基に修理された文化財について、5年度冬に開催した特集展示「新たに修理された文化財」にて公表を行った。 (1) 保存カルテ作成件数：総計 184 件 (内訳 絵画：66 件、書跡：31 件、彫刻：23 件、 工芸：38 件、考古：20 件、写真資料：6 件) (2) 修理調書作成件数：総計 1 件 (内訳 絵画：1 件)			
			
「新たに修理された文化財」展		修理された重文の金銅宝塔形経筒	

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	X線CT、X線透過撮影や顔料調査などの科学的調査を行い、彫刻作品の構造や劣化状況、絵画作品の顔料の推定など修理に有用な成果が得られた。また、保存カルテについても整備を進め修理方針の検討に役立てるとともに、材質調査や銘文調査も引き続き実施してデータの蓄積を図った。以上の理由からBと評価した。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本事業は、修理に関する基礎情報を収集し、その成果を「新たに修理された文化財」展や修理報告書として公開するものである。保存カルテ作成件数や修理調書作成件数は年度により増減があるが、修理展や修理報告書は計画通り実施できたことからBと評価した。6年度以降についても引き続き調査を行い、情報の蓄積を図ることで、中期計画の達成を目指す。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ②その他有形文化財に関連する調査研究		
プロジェクト名称	1) 有形文化財の保存環境・保存修復並びに科学技術を活用した分析等に関する調査研究 ウ 保存科学の観点からの収蔵品等の調査研究 ((4)-②-1))		
【事業概要】 文化財修理に伴う保存科学の観点からの収蔵品等の調査研究			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	保存修理指導室長 鳥越俊行
【主な成果】 (1) 所蔵品・寄託品の文化財（彫刻や漆工品など）の修理等に併せ、X線CTスキャナやX線透過撮影を実施し内部構造や納入品の把握を行った。これらの光学調査は修理に活用すると共に、データの蓄積も進めた。 (2) 当館研究員と工房の技術者が共同でX線CTスキャナ、X線透過撮影や蛍光X線分析などの光学調査を行った。所蔵品や寄託品の修理前や修理中にこれらの調査を実施することで、修理へ成果を随時反映させることが可能となり、彫刻作品・漆工作品や絵画作品のより安全な修理に役立てることができた。			
			
青銅像のCT調査		裏打紙に対する蛍光X線分析調査	
【備考】 ・調査件数 X線CTスキャナ調査・蛍光X線分析調査回数：5件			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	4年度に引き続き、修理等の際に内部構造や保存状態・材質情報に関する情報を得るため光学調査を実施した。X線CTスキャナやX線透過撮影は安全な修理に欠かすことのできないものとなっており、また蛍光X線分析は彩色材料の同定に重要な役割を果たしている。光学調査の結果は、修理調書に反映させるとともに修理方針の策定にも役立てることができた。以上の理由から、評価をBとした。6年度についても継続した調査並びにデータの蓄積を図る。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	X線CTスキャナを順調に稼働させて、彫刻や漆工品などの修理に活用することができた。また、文化財保存修理所での修理内容をふまえ、X線透過撮影や蛍光X線分析などの調査を行うことで、修理方針の策定等に伴う調査を随時実施できた。以上の理由から、中期計画を順調に遂行することができたと判断し、Bと評価した。6年度も調査を継続し、データの蓄積を図ることで中期計画の達成を目指す。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ②その他有形文化財に関連する調査研究
プロジェクト名称	1)有形文化財の保存環境・保存修復並びに科学技術を活用した分析等に関する調査研究 ア 文化財の材質・構造等に関する共同研究 ((4)-② -1))
【事業概要】 本研究では、X線CTスキャナ及び3Dデジタイザ等の非破壊的な調査手法を使用し、館内及び外部の多様な専門分野の研究者との学際的連携を通じて、各種文化財の材質・構造等に関する知見を得ることを目的とする。	
【担当部課】	学芸部博物館科学課
【プロジェクト責任者】	研究員 渡辺祐基
【主な成果】 ・ 箏の構造調査 邦楽器製作技術保存会、東京文化財研究所無形文化遺産部との連携により、江戸時代後期から大正期にかけて製作されたと考えられる箏（個人所蔵）のX線CTスキャンを実施し、内部構造を可視化した。今後、得られたCTデータを、楽器学や音楽史研究などの様々な観点から詳細に検討することで、箏の製作技術や意図について理解を深めていく予定である。 ・ 婚礼調度の木地構造調査 文化庁所有の「叢梨地牡丹唐草向鶴紋散蒔絵調度」のうち、化粧道具（鏡台・鏡建・柄鏡箱）をX線CTによって調査した。鏡台については、鏡を掛ける受座は支柱に二方胴付平柄継という方法で接合され、接合部に接着剤様のものが充填されていることが確認できた。また柄鏡箱3合については、形状は類似するものの甲板、底板、側板の構造や接合方法に大きな違いがあることが明らかになった。 ・ 掛軸モデルの形状変化計測（予備実験） 掛軸が展示中にどのように変形するかについて調査するために、掛軸モデルを壁際に吊った状態で、一定期間ごとに3Dデジタイザで計測する予備実験を行なった。	
【備考】 ・ X線CT調査件数42件、調査回数154回 ・ 3Dデジタイザ調査件数12件、調査回数63回 ＜論文・学会発表等＞ ・ 渡辺祐基、川畑憲子、板谷寿美、吉川美穂、田中麻美、木川りか「国宝『初音の調度』のうち机、色紙箱、長文箱（胡蝶蒔絵）の木地構造及び制作技法のX線CT調査」『日本文化財科学会第40回記念大会研究発表要旨集』116-117（10月） ・ 渡辺祐基「九州国立博物館におけるX線CTを用いた木質文化財の調査」『2023年樹木年輪研究会・木質文化財研究会合同例会 講演会・研究発表要旨集』7-8（11月） ・ 川畑憲子、渡辺祐基、田中麻美「叢梨地牡丹唐草向鶴紋散蒔絵調度の木地構造について（4）化粧道具（鏡台・鏡建・柄鏡箱）」紀要『東風西声』19号138(87)-123(102)（6年3月）	



鏡建のX線CT調査風景

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	5年度は54件の文化財等の調査し、高精細な三次元データを収集できた。得られたデータについて、所蔵者、館内外の各分野担当者等とともに解析及び協議を行い、内部構造や製作技法に関する知見を得ることができた。これらの成果は、研究会、学会発表及び論文を通じて公開した。以上から、所期の目的を遂行し、年度計画を達成したと評価してB評定とした。

中期計画の実施状況の確認

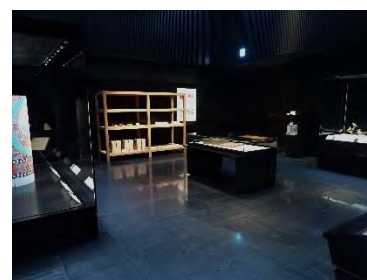
評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に基づき、外部研究者とも協力し、各種文化財の材質・構造等に関する調査に取り組んだ。5年度は、箏や婚礼調度等の木工・漆工品を中心に調査し、検討会や研究会によって内部構造や製作技法に関する理解を深めた。5年度以降も調査を継続するとともに、学会発表及び論文等によって成果を幅広く公表する計画である。以上の成果から、中期計画を円滑に遂行したと評価した。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ②その他有形文化財に関連する調査研究		
プロジェクト名称	1)有形文化財の保存環境・保存修復並びに科学技術を活用した分析等に関する調査研究 イ 博物館における国内・アジア地域の文化財保存修復に関する研究 ((4)-②-1))		
【事業概要】 国内・アジアの国々で製作され、伝世してきた文化財について、人文・自然科学的手法を用い、素材、製作技法、修理技法、保管環境などの調査を行い、文化財の保存修復について検討を加える。			
【担当部課】	学芸部博物館科学課	【プロジェクト責任者】	保存修復室長 志賀智史
【主な成果】 ・ベトナム国立歴史博物館において紙製文化財の修理を行い、ベトナムの伝統的な紙原料の調査、修理理念・技法の調査を行った。 ・文化交流展（平常展）において文化財を守り伝える博物館の役割について「修理」「模写・模造」「環境」「保管」のテーマで展示を行った。			
【備考】 ・ベトナムにおける紙製文化財の調査研究 実施日：5年10月16日～27日 実施場所：ベトナム国立歴史博物館 協力：修理工房宰匠（株） 内容：ベトナム国立歴史博物館が所蔵する紙文化財である「神勅」を対象に、現在の日本の修理理念と技術により本格修理を行った。修理前に、素材となった紙の原材料や製作技法の調査を行った。また、過去に行われた旧修理の問題点を指摘し、現在の日本で行われている修理と比較検討した。修理事業自体は平成25年度から継続しており、現地調査は新型コロナウイルスの蔓延のため中断していたが、4年ぶりに再開した。 ・文化交流展示「文化財を守り伝える博物館」 実施日：6年3月5日～5月6日 展示場所：文化交流展室 第7室 内容：平成17年度から継続的に修理を実施している重要文化財「対馬 宗家関係資料」の修理前及び修理後（2年度修理完了分）の作品の比較展示を行い、併せて同資料を伝えてきた木箱、平安時代の寺院壁画の模写作品、当館の収蔵棚や虫害対策用の粘着トラップ等の展示や、パネルによる修理工程の紹介を通じて、博物館の担う文化財の修理や継承という役割について周知する機会とした。平成28年度から毎年実施している。			



「文化財を守り伝える博物館」
展示風景

「文化財を守り伝える博物館」
展示風景

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	急速な経済発展により伝統文化が失われつつあるアジアの国々において、伝統的な保存修復技術や材料を研究することは、伝世する文化財を適切に保存修復する上で大変重要である。また、日本国内においても文化財を伝えて行くために保存修復が不可欠であることを継続的に周知できたため、B判定とした。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	ベトナムでの保存修復事業は平成25年度から続いており、新型コロナウイルスにより2～4年度の現地調査は中断せざるを得なかったが、これまでの良好な関係によりスムーズに事業を再開することができた。本中期計画中は、引き続きベトナムの紙文化財を対象に修理と調査研究を行う予定である。新型コロナウイルスによる事業中断はあったものの、中期計画に沿って計画的に事業を行っており、B判定とした。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ②その他有形文化財に関連する調査研究		
プロジェクト名称	1)有形文化財の保存環境・保存修復並びに科学技術を活用した分析等に関する調査研究 ウ 博物館危機管理としての持続的 IPM システムの研究 ((4)-②-1))		
【事業概要】 本研究の目的は、我が国の博物館における IPM（総合的有害生物管理）普及のための持続的なシステムづくりである。館内のさまざまな部署との連携はもちろんのこと、地元 NPO 法人やボランティア等とも協力し、持続的に IPM を実践するためのシステムづくりを行う。また、研修会の開催等を通じて IPM の社会的理解度を深めつつ、博物館等における IPM を軸にした地域共働システムづくりを目指すものである。			
【担当部課】	学芸部博物館科学課	【プロジェクト責任者】	課長兼環境保全室長 木川りか
【主な成果】 (1) IPM 研修の開催 博物館・美術館・資料館等の学芸及び事務・施設担当職員を対象に、IPM 研修を実施した（10 月 19 日～20 日）。全国 82 施設 152 人の応募の中から、18 施設 32 人が参加した。受講後のアンケートでは、84%の受講者から 5 段階評価のうち、「5：とても良かった」と評価を得、「4：良かった」の 13%と合わせると、97%が「4：良かった」以上の評価であった。実習と座学を組み合わせた研修のため、満足度が高いものと推測される。新型コロナウイルスの影響により 4 年ぶりの開催となったが、IPM 活動の普及を図るため今後も継続して開催していきたい。 (2) 館内向け IPM 研修・館内環境ワーキング会議の開催 5 年度も主に新任職員や館内業務を請け負う事業者などの 21 人を対象に、IPM 研修を実施した（4 月 25 日）。館内の各部署の関係者と館の IPM ポリシーを共有、IPM 活動に対する理解を深める点で重要な役割を果たしている。また、月 1 回環境ワーキング会議を開催し、館内各部署と館内環境に関わる情報共有・協議を行った。 (3) 環境調査報告会の開催 館内関係者及び IPM 業務委託業者間において、IPM や空気汚染対策など保存環境に関する近年の動向について報告会を実施し、情報交換を行った（7 月 25 日）。 (4) 環境ボランティア活動の一環として、粘着トラップの作成及び設置、修理工房宰匠の協力のもと修理用仮貼り剥がし、当館文化財課協力のもと文化財梱包用綿布団の作成、当館交流課協力のもと屋外研修（昆虫・植生観察会）、博物館科学課の研究員・アソシエイトフェローによる小話会などの活動を実施した。			
 IPM 研修（殺虫法選択の実習）  館内環境ワーキング会議  環境ボランティア屋外研修			
【備考】 ・ IPM 研修（2 日間）1 回 参加人数：18 施設 32 人 ・ 館内職員向け IPM 研修（1 日間）1 回 参加人数：21 人 ・ 環境調査報告会（1 日間）1 回 参加人数：19 人			

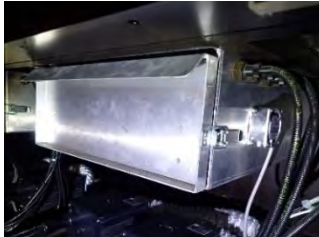
年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	博物館の危機管理として館内の IPM 活動を進めるとともに、館内 IPM 研修や環境ワーキング会議、環境調査報告会等の開催など、館内各部署との情報共有を密に行い、より充実した IPM 体制を構築した。また、新型コロナウイルスの影響により中止していた IPM 研修を 4 年ぶりに開催し、全国各地の文化財関連施設への、IPM による有害生物管理への普及を図り、アンケート結果からも高い評価を得た。本研修は毎年人気が高いが、特に 5 年度は、約 5 倍の倍率となったため、東京文化財研究所担当部署と相談のうえ、カビの被害に特化した相談や研修については、東京文化財研究所で対応する方向性を共有し、機構全体として全国の博物館等施設へ貢献する体制を構築した。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	5年度も、地元NPO法人や環境ボランティア、館内関係部署の協力のもと、持続的なIPMシステムづくりを推進することができた。博物館等の学芸及び事務・施設職員に対する対面でのIPM研修を再開し、各施設から学芸員と管理者が原則として2人1組で参加してもらう形式や、座学と実習を綿密に組み合わせたプログラムなど、研修としてのひとつのひな型を作ることができた。また、全国各地へのIPM活動の普及に資するうえで優れた成果を得る等、中期計画を予定以上に遂行できていると判断したため、A評定とした。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ②その他有形文化財に関連する調査研究		
プロジェクト名称	1)有形文化財の保存環境・保存修復並びに科学技術を活用した分析等に関する調査研究 エ 展示収蔵環境の空気質に関する調査研究 ((4)-②-1))		
【事業概要】 展示収蔵環境における空気質を調査し、揮発性有機化合物濃度を低減させる実用的な対策の確立に向けた調査研究を行う。			
【担当部課】	学芸部博物館科学課	【プロジェクト責任者】	課長 木川りか
【主な成果】 (1)展示空間の揮発性化学物質（VOC）の継続的調査 展示ケース内における有機酸やアルデヒド等汚染物質の濃度を継続的に調査し、空気質の把握及び必要に応じて改善を図った。 (2)独立展示ケースへの換気システムの導入 文化財保存活用基金により、独立展示ケース7台に換気ファンを取り付ける改修工事を実施した。タイマーにより日中の所定時間のみファンを稼働し、フィルターを通して空気を取り入れるシステムを導入したことにより、安全な方法でより適切な空気環境を維持することができるようになった。 (3)特別展示室展示ケース改修に伴う空気環境改善策の検討 特別展示室展示ケースの空気環境改善のため、空気汚染物質の放散が少ない材料や製作方法、換気システムの導入等について館内関係者で協議した。また、今後展示ケースに使用する可能性のある材料については、放散される汚染物質の調査を行った。 (4)文化財から放出される汚染物質の特定と対応 海揚がり考古遺物など、文化財そのものから放散される硫黄化合物が周辺の金属製品に錆を生じさせる可能性のある場合について、放散される汚染物質の継続的な調査及び対応を検討した。			
			
展示ケース内の空気質調査		独立展示ケースの調湿ボックスに タイマー付き換気ファンを設置	
		材料から放散される 空気汚染物質の調査	
【備考】 ・学会発表：和泉田絢子、渡辺祐基、桑原有寿子、松尾実香、山本花乃、木川りか「空気汚染物質の放散が少ない材料を用いた展示台の試作と検証」文化財保存修復学会第45回大会（6月25日） ・学会発表：柳田明進、脇谷草一郎、木川りか、佐藤嘉則、志賀智史、小泉恵英、内野義、安木由美、高妻洋成「"Black spots"による青銅製遺物の劣化およびその再処理法の検討」2023 東アジア文化遺産保存国際シンポジウム、（8月11～12日） ・研究紀要：和泉田絢子、渡辺祐基、木川りか「博物館の展示空間における空気環境の管理：展示ケースの換気システム導入および空気汚染物質の放散が少ない展示材料の検証」『東風西声』第19号			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	展示収蔵環境における空気質について詳細な調査を行い、蓄積したデータを関係者と共有して、空気環境の改善策を講じた。これまでの調査で得られた知見や研究成を基に、館内の独立展示ケース7台を対象に順に換気ファンを設置するなど、実践的な対策につなげた。また関係者と緊密な協力のうへ、全体の展示スケジュールに影響を及ぼさずに、計画的に実現可能な対策の導入を進めることができた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	中期計画に基づき、展示収蔵空間の空気質に関する継続的に調査を行い、空気環境改善に向けた方策の検討を進めることができた。5年度は独立展示ケースの換気システムを導入するなど、蓄積されたデータを現場で活かした対策を実行することができ、卓越した成果を得ることができた。以上のことから、中期計画を予定以上に遂行できていると判断し、A評定とした。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ②その他有形文化財に関連する調査研究		
プロジェクト名称	文化財の修理・保存に関する調査研究		
【事業概要】 収蔵品に対しての負担を軽減するため、館内（展示室・展示ケース・収蔵庫等）の環境整備を目的として、センサーやデータロガー、毛髪計を用いた館内施設の温湿度測定、生物トラップの設置及び付着菌調査、ガス検知管を用いた空気環境調査を実施する。そして、これらの分析結果を基に問題点を見つけ、早期の対応を行ない、保存環境の向上を図っている。			
【担当部課】	調査・保存課	【プロジェクト責任者】	調査・保存課長 高梨 真行
【主な成果】 ・館内に設置したセンサーやデータロガー、毛髪計により温湿度測定を実施し、データを蓄積している。これらのデータを用いて館内の温湿度環境の特徴を見出し、空調機運転方法の変更や空調機不具合への対処を行ない、安定した温湿度環境を維持した。また、開館後は入館者数の変化に対応し、換気量や温湿度設定を変更し、鑑賞しやすい空気環境を維持した。 ・生物生息調査や付着菌調査の結果や皇居内にある当館の立地条件を踏まえ、ゾーニングの方法や清掃箇所を検討し、実行した。具体的には、調査結果から、週1回の研究員による清掃活動や、IPM(総合的有害生物管理)の計画・実施、その効果を調査によって検証し、保存環境の維持をした。 ・月1回の空気環境調査の結果で、測定値の上昇が確認された場合は、早急に換気作業を行ない、開館時までに東文研が定める展示室・収蔵庫内の有機酸、アルデヒド類の濃度基準を満たすことができた。			
【備考】 ・温湿度測定箇所(センサー、データロガー、毛髪計) 計121箇所 ・生物生息調査(年4回) 計101箇所 ・付着菌調査(年2回) 計27箇所 ・パッシブインジケータによる酸・アルカリ測定(年2回) 計14箇所 ・検知管による空気環境測定(月1回) 計19箇所 ・その他、課内会議で情報共有を行ない、館内の保存環境の向上を図っている。			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	8年度の全面開館に向けた工事が実施されている不安定な環境かつ、当館の宮内庁から機構への移管は、移管から開館まで約1ヶ月という困難な状況の中で、着実に調査・研究を行い、適切な温湿度環境の構築やIPM計画の立案・実行などの成果をあげ、引き続き着実に監視しつつ調査を続ける必要があるものの、安全な保存環境を整備できた。保存環境調査は、正確を期す必要があると同時に収蔵品に影響を与えないよう行うことが重要なテーマであり、来館者数の設定などにも応用・活用した。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	現在、適切にモニタリング、調査を実施している。 8年度の全面開館に向けて、引き続きデータを蓄積し、適切な対応を図る必要がある。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ②その他有形文化財に関連する調査研究
プロジェクト名称	2)博物館情報、文化財情報に関する調査研究 ア 博物館資料・業務の情報処理に関する調査研究
【事業概要】 当館における収蔵品管理システムの調査研究を通じて、資料情報と学芸業務の有機的な関連について調査研究を行い、博物館における効果的・効率的な情報の管理及び蓄積、活用のための環境構築に資することを目的とする。	
【担当部課】	学芸企画部博物館情報課
【プロジェクト責任者】	博物館情報課長 村田良二
【主な成果】	
1) 収蔵品管理システムについて、作品検索、総合文化展管理、鑑査会議管理、作品管理、修理予定・履歴管理、文献情報管理の各機能を継続的に運用し、随時改善を重ねて機能を向上させた。 2) 開発言語、ミドルウェア、アプリケーションフレームワークのいずれも旧式化しつつあったため、それぞれ最新のものに置き換える作業を行った。プログラムコード全体を見直し、新しいフレームワーク等に適合するよう改修を行った。 3) 「博物館ニュース」等の広報媒体に掲載中の作品についてシステム上で確認できるようにするとともに、掲載等の履歴を蓄積できるよう、広報媒体掲載情報の管理機能を追加することについて検討し、実装に着手した。 4) 保存カルテ等の保存修復関連情報を管理する機能の実装にむけた検討を行った。	
【備考】 収集データ件数 247,376 件 (内訳) 作品データ件数 232,376 件 平常展データ件数 6,934 件 鑑査会議データ件数 114 件 貸与データ件数 2,489 件 修理データ件数 2,807 件 文献データ件数 3,000 件	

The screenshot shows the 'protoDB' web application. It has a navigation bar with links like '作品', '人・団体', '地名', 'リスト', '平常展', '鑑査会議', '申込', '貸与', '文庫', and '広報媒体'. Below the navigation bar, there's a search area with '検索' and 'タイトル' fields. A table is displayed with the following data:

種別	タイトル	開始	終了
メールマガジン	2024/1/15 発行のメールマガジン	2024/01/15	2024/03/15
ニュース	新しいニュース	2024/01/01	2024/05/31
プレスリリース	特別展のプレスリリース	2024/01/01	2024/02/01
特別展	特別展の広報	2023/11/10	2024/01/15

開発中の広報媒体管理機能画面

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	収蔵品の効果的・効率的な管理のためのシステムを継続的に開発し、館内からの要望に応えながら着実に発展させることができた。アプリケーションが最新の環境で動作しつづけることができるよう、言語、ミドルウェア、アプリケーションフレームワークの更新を行うことができ、将来の着実な継続的開発を可能にした。また、広報媒体掲載情報の管理機能および保存カルテ等管理機能について検討を行い、より包括的なシステムに向けた進展があった。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画期間では、より業務の実態に即した継続的な改善と、収蔵品に関する様々なデータ資源を集約的に扱える統合環境の構築を目指す。3年目となる5年度は、ミドルウェア等を最新のものに更新して開発の基盤を整えることができた。6年度以降は、5年度に検討した広報媒体・保存カルテ等に係る機能の実装を進める。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ②その他有形文化財に関連する調査研究		
プロジェクト名称	2)博物館情報、文化財情報に関する調査研究 イ 創立150年へ向けた館史編纂のための基礎的な資料整理と調査研究		
【事業概要】 本事業は、当館創立150年にともない『東京国立博物館150年史』を編纂するため、業務文書や刊行物等を収集、整理し、今後の編纂事業の基礎資料を作成するものである。5年度は『東京国立博物館150年史』のために寄稿された原稿の整理、入稿、校正と、資料編用のデータ整理、入稿、校正を推進し、発行にいたった。また、継続作業として館史関係文書類の整理とデータ化、保存措置を行った。			
【担当部課】	学芸企画部企画課	【プロジェクト責任者】	東京国立博物館百五十年史編纂室長・恵美千鶴子、原田あゆみ
【主な成果】 (1)収集した文書類の整理・目録化・保存措置（4月1日～：月に2日程度） 館内より新たに収集した館史関係資料について目録を作り、活用できるように整理をした。以上の作業は、室長が進めた。 (2)『150年史』の原稿についての整理と入稿、校了作業（適宜） 『150年史』本編の原稿について、執筆者校正の後、編纂室にて全文通しての確認作業を進め校了した。資料編については、原稿データを作成し、入稿、校正作業を進め、校了した。さらに、発行に向けてISBN番号を取得し、販売用の準備を進めた。以上の作業は、室長とアソシエイトフェロー1名が進めた。 (3)『150年史』の発送業務（適宜） 9月30日に『150年史』発行。執筆者・編纂業務協力者、館内の希望者へ見本誌の発送・配布業務を行った。さらに、毎年行われている交換図書の発送リストをベースに寄贈誌を発送するリストを作成し、年度内に発送を完了した。以上の作業は、室長とアソシエイトフェロー1名が進めた。 (4)館史の内容に即した文書類の整理・デジタル化と館内事業への資料提供 a)『100年史』資料のデジタル化（4月1日～：週に1日） 『150年史』編纂のために、『100年史』編纂時の資料のデジタル化を行った。有期雇用職員1名がこれを進めた。 b)『150年史』資料編のための年表作成（適宜） 「出版物年表」「教育普及年表」など、150年史資料の中から関係するデータを抜き出して年表を作成した。 (5)問い合わせへの対応と関係資料の提供 『150年史』執筆者からの問い合わせ（10月16日ほか）、館内・館外からの館史に関する問い合わせに対応した。 (6)『150年史』のパブリシティについて 中央公論事業出版を通じて『150年史』についての取材を受けた（12月15日 浅見副館長、田良島特任研究員、編纂室）。取材内容は、読売新聞社の文化面（6年1月18日（木）朝刊）に掲載された。			
			
『東京国立博物館150年史』本文編・資料編			
【備考】 (4) a) 『100年史』資料のデジタル化：37日間実施（2552点） (5) 資料提供・問い合わせ対応：5件			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	27年度より継続的に行ってきた書類の整理・保存措置について5年度も進めた。また収集・整理した書類のデータを活用し、『150年史』執筆者や問い合わせに対して資料提供を行うことができた。『150年史』刊行は、当初予定の完成時期から遅れることになったが、5年度の進行は、寄稿された原稿と資料編用データを整理・入稿し、校正作業に徹したため、おおむね順調であった。

中期計画の実施状況の確認

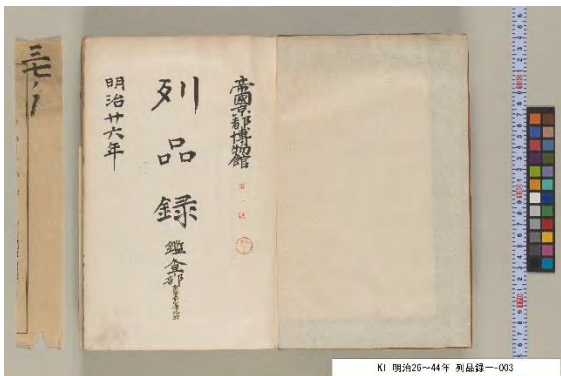
評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	『150年史』執筆者への資料提供や館史に関わる問い合わせ、調査研究などの要望に4年度に引き続き迅速に対応できた。また、原稿の整理や入稿、校正を順調に進めることはできたため、『150年史』完成時期を遅らせることとなったものの、中期計画に対する進捗状況は順調であるといえる。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ②その他有形文化財に関連する調査研究		
プロジェクト名称	ア データベースやアーカイブズ等、収蔵品等情報の整理・活用に関する調査研究 (4)-②-2))		
【事業概要】 当館で運用している収蔵品管理システムや図書管理システムなどの業務用システムをはじめ、公式ウェブサイトや館蔵品データベースなどの外部公開システムなど、各種システム運用上の課題を整理するとともに、博物館情報に関する調査研究を進める。			
【担当部課】	総務課 学芸部	【プロジェクト責任者】	課長 森考平 列品管理室長 永島明子
【主な成果】 (1)「情報システム検討委員会」を開催し、当館が持つ情報を蓄積、管理するための収蔵品管理システムや蔵書管理システム、情報を発信するための公式ウェブサイト、館蔵品データベース、これらを蓄積、保管するための情報機器などの運用、改善について検討するとともに、博物館情報に関する研究を進めた。 (2)4年度にリニューアルした収蔵品管理システムと公式ウェブサイトについて、運用を行う中で課題や改善点をまとめ、委託先と打ち合わせを行い、それぞれ改修を行った。 (3)作品の修復記録を蓄積しているデータベース（修復文化財データベース）のリニューアルを行い、利便性の向上に努めた。 (4)システムや機器の耐用年数、経費などをまとめた資産目録に従い、サーバ2基を更新した。 (5)『列品録』をはじめとする館史資料17冊を画像データ化した。 (6)重要文化財に指定されている明治古都館について、今後の活用を検討するため、三次元計測を行った。			
【備考】			



明治古都館の撮影、測量



画像データ化した館史資料

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	5年度は、稼働開始から10年以上経過していた「修復文化財データベース」のリニューアルを行った。保守にかかる費用や、サーバのメンテナンスにかかる労力、情報セキュリティの観点など旧データベースが抱える課題をリニューアルによって解消することができた。さらに、データベースの利便性を向上させるとともに、館の経費削減を行うことができた。また、機器の保守を延長することで有事に備えていたサーバ2基のリプレースを行うことができた。以上の成果からB評価とした。

中期計画の実施状況の確認

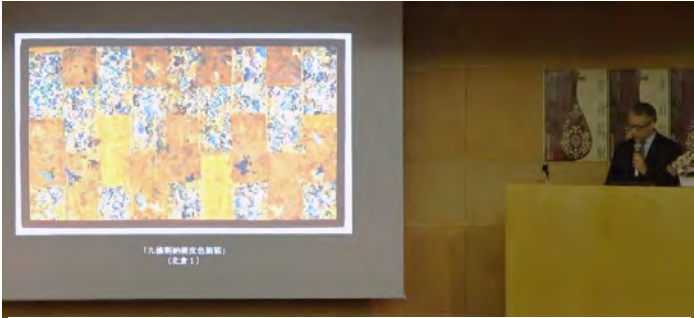
評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画の3年目として、4年度にリニューアルした各システムの運用を通じて改善点をまとめ、課題管理表を整理するとともに、小規模なシステム改修を行いつつ、機能改善を図った。6年度以降も、課題管理表を整理し、次期リニューアルにも備える。

中項目	1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信		
事業名	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ③国内外の博物館等との学術交流等		
【年度計画】			
・ I-1-(4)-③ (4館共通) 1)、2)、3)、4)			
・ I-1-(4)-③ (東京国立博物館) 1)、2)			
担当部課	学芸企画部企画課国際交流室	事業責任者	室長 楊鋭
【実績・成果】			
(4館共通)			
・ 韓国国立中央博物館との人的・学術交流協定に基づき、3年ぶりにお互いに職員2名を派遣し、研究交流を進めた。また、相互の派遣職員による学術発表会や帰国後報告会の開催し、研究情報や得られた経験などを共有した。			
・ 中国国家博物館、韓国国立中央博物館と協力して、日中韓の展覧会に関するセミナーはオンラインにて開催した (5年8月17日)。			
・ イギリス、オランダなど15か国と地域の博物館、美術館などへ、延べ67人派遣し、各自の研究テーマにかかわる研究調査と研究交流を行った。			
・ 英語、中国語、韓国語による SNS (X (旧 Twitter)、Instagram、Facebook) 投稿を継続し、館蔵品の紹介を中心に博物館情報を広く発信した。			
(東京国立博物館)			
・ 正しい作品情報を海外に伝えるため、「e 国宝」の当館収蔵品の作品解説情報を英語・中国語・韓国語でリライトしている。			
・ 外国人来館者向けの「日本美術体験」コーナーの教育活動に関わり、また、「留学生の日」に、来館した留学生に多言語のよる日本美術を楽しむためのギャラリートークを行った (10月7日)。			
・ マレーシア・イスラム美術館との文化交流に関する MOU を締結した (12月14日)。			
・ 第10回ミュージアム日本美術専門家交流・連携事業は対面方式で開催し、北米・欧州を中心とした海外の23のミュージアムから25名の日本美術に関わるスタッフが参加した (6年1月30日～2月2日)。			
【補足事項】			
			
			
			
韓国国立中央博物館との学術交流 留学生の日 英語によるギャラリートーク ミュージアム日本美術専門家交流・連携事業			
【年度計画に対する総合評価】		【判定根拠、課題と対応】	
評価：A		新型コロナウイルス感染症の感染症法上の5類移行に伴い、国境を越えての研究員の招へい・派遣は再開し、従来通りの人的・学術交流ができた。韓国国立中央博物館と、お互い2名の研究員を相互派遣し、学術研究交流を進めた。ミュージアム日本美術専門家交流・連携事業では海外から多くの方を迎え、3年ぶりに対面式によるワークショップ、専門家会議、エクスカージョンなどの交流を行い、博物館スタッフ同士のネットワーク強化と情報交換ができた。また、6年度以降の交流方針を決めた。海外博物館・美術館との交流・協力を進め、展覧会開催をきっかけにマレーシア・イスラム美術館との文化交流に関する MOU を締結した。	
		以上の実績より、年度計画を超える成果があったと判断し、A評価とした。	
【中期計画記載事項】			
2019年 ICOM 京都大会の成果も踏まえつつ、我が国における博物館活動の先導的役割を果たすとともに、文化財とその活用等に関する博物館活動について、先進的かつ有用な情報を集積するため、海外の優れた研究者を招へいし、国際シンポジウムや研究会・共同調査等を実施する。また職員を海外の博物館・文化財研究所等の研究機関及び国際会議等に派遣し、積極的に研究発表を行う。			
【中期計画に対する評価】		【判定根拠、課題と対応】	
評価：B		約3年間途絶えていた対面式での海外の研究者との交流が再開し、活発に行った。また、戦略的に海外の博物館・美術館との連携・協力を進めている。インターネットによる多言語情報発信とともに、博物館内の多言語化対応の一環として、外国人来館者向けのギャラリートークを行い、積極的にコミュニケーションを図った。これらの交流事業の実施により、中期計画は順調に遂行できているため、Bと評価する。	

中項目	1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信		
事業名	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ③国内外の博物館等との学術交流等		
【年度計画】・I-1-(4)-③(4館共通)1)2)3)4)			
担当部課	学芸部	事業責任者	調査・国際連携室長 降矢哲男
【実績・成果】			
【実績・成果】			
5月に新型コロナウイルス感染症の5類移行に伴い制限が解除され、国際的な人の往来が徐々に再開されたことで、かねて計画されていたが先送りになっていた展示会等の対面活動を実施することができた。同時に、オンラインミーティングや他のデジタル手段を活用し、積極的に国際コミュニケーションの促進を図り、以下の成果を上げることができた。 1) 2) 3) 京都の禅宗寺院から寄託中の中国絵画(重要文化財)を紹介する『禅の心』展(会期11月17日～12月31日)のサンフランシスコ・アジア美術館での開催にあたり、学術交流基本協定に基づき、作品輸送随伴、通関手続き手配、作品解説文の提供などの形で特別協力した。展覧会の開会式には、当館職員3名が参加し、挨拶するとともに、研究員1名が記念講演を行った。 1) 2) 3) 学術交流基本協定締結(2年度)を記念して京都国立博物館所蔵品による共催展『茶道具などにみる日本人の中国趣味』をサンフランシスコ・アジア美術館タテウチ企画展示室にて開催中(6年5月6日までの予定)。3年9月に開催予定であったが、コロナ禍や会場整備の都合で、12月21日の開幕となった。			
			
サンフランシスコ・アジア美術館長、京都国立博物館副館長及び両館の関係者が『禅の心』展の開幕にて(11月17日 サンフランシスコ・アジア美術館にて)			
【補足事項】			
4) 第3回韓国共同研究会の「古代東アジア文化交流史 共同学術研究会」(7月8日、韓国 慶北大学校)で当館職員1名が発表し、研究発表セッションの座長を務めた。 4) 立命館大学ユネスコ・チェア「文化遺産と危機管理」国際研修(9月15日、京都国立博物館にて対面)で当館職員1名が終日講師を務めた。 4) 第4回韓国共同研究会の「古代東アジア文化交流史 共同学術研究会」(10月7日、韓国 ソウル大学校)で当館職員1名が発表した。 4) ICOM-ICMS(国際博物館会議の博物館セキュリティ国際委員会)の年次会議(10月11日～13日、東京、日光)に当館職員3名が参加した。 4) ICOM-ICDAD(国際博物館会議の工芸とデザイン国際委員会)年次会議(10月10日～14日、ポルトガル・リスボン アジュダ宮殿博物館)で当館職員1名が参加し、研究発表セッションの座長を務めた。 4) IASSRT(国際シルクロード染織研究会)(10月15日～18日、英国・ノリッチ セインズベリー日本藝術研究所、ロンドン 大英博物館)で当館職員1名が参加し、研究発表セッションの座長を務めた。 4) ユネスコ・アジア文化センター 文化遺産に関わる国際会議(12月13日～14日、奈良)に当館職員1名が参加した。 4) 第4回世界津波博物館会議(12月15日、東北大学)で当館職員1名が参加し、パネルディスカッションで発表した。 4) 第5回韓国共同研究会の「古代東アジア文化交流史 共同学術研究会」(6年3月2日、韓国 慶北大学校)で当館職員1名が発表し、研究発表セッションの座長を務めた。 4) ”French-Japanese Workshop on Material Science for Cultural Heritage”(6年3月13日、東文研)にて当館職員1名が参加し、講演を行った。			
【年度計画に対する総合評価】 評価: B	【判定根拠、課題と対応】 コロナ禍の制約が大きく緩和され、国際間での研究員の招聘・派遣が可能となり、積極的な学術交流の機会が増えた。5年度は学術交流基本協定を締結しているサンフランシスコ・アジア美術館と協力し、同館において共催展と特別協力による展覧会開催や講演会などを実現できた。昨今の海外博物館との国際交流事業のなかでも、一定の成果を上げたといえるもので、Bと評価する。		
【中期計画記載事項】 2019年ICOM 京都大会の成果も踏まえつつ、我が国における博物館活動の先導的役割を果たすとともに、文化財とその活用等に関する博物館活動について、先進的かつ有用な情報を集積するため、海外の優れた研究者を招へいし、国際シンポジウムや研究会・共同調査等を実施する。また職員を海外の博物館・文化財研究所等の研究機関及び国際会議等に派遣し、積極的に研究発表を行う。			
【中期計画に対する評価】 評価: B	【判定根拠、課題と対応】 5年度は国内での国際シンポジウムの主催は無かったものの、海外の博物館や研究施設に赴く機会が増え、当地で会議やシンポジウム等に参加して海外の研究者や研究機関と多面的に交流することができた。積極的な事業展開により中期計画を順調に達成しているため、Bと評価する。		



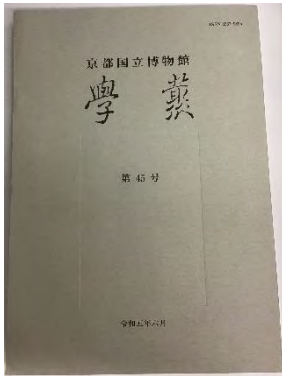
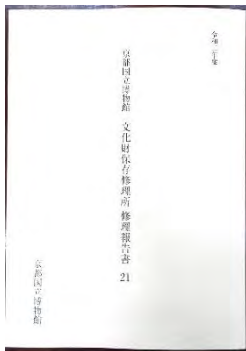
サンフランシスコ・アジア美術館館長、京都国立博物館副館長及び両館の関係者が『禅の心』展の開幕にて(11月17日 サンフランシスコ・アジア美術館にて)

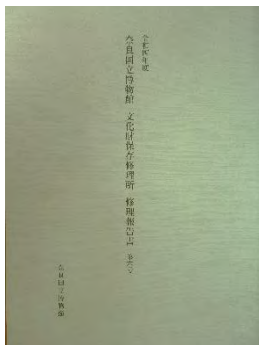
中項目	1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信		
事業名	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ③国内外の博物館等との学術交流等		
【年度計画】 ・ I-1-(4)-③ (4館共通) 1)、2)、3)、4)			
担当部課	学芸部	事業責任者	部長 吉澤悟
【実績・成果】 (4館共通) 1)学術交流協定を結ぶ韓国の国立慶州博物館から3名を招聘し、情報交換を行った。中国河南省代表団6名が来館し、日中文化交流について意見交換を行った。韓国の国立中央博物館研究員1名が来館し、当館のX線CTスキャナを用いた文化財調査の取り組みについて情報を交換した。中国の故宮博物院研究員1名が来館し、文化財写真情報システム構築等の業務に関する情報交換を行った。 2)職員10人を海外に派遣し、現地の研究者と交流を図った。中国1名、韓国4名、インドネシア1名、英国・仏国3名、アメリカ1名。 3)西安碑林博物館（内藤研究員）、国立慶州博物館・韓国国立中央博物館（井上館長・中川室長）、インドネシア国立博物館（三本主任研究員）、大英博物館・ギメ東洋美術館（宮崎室長・山口主任研究員・内藤研究員）、ボストン美術館・メトロポリタン美術館・クリーブランド美術館（松井アソシエイトフェロー）を訪問し、現地研究員と意見交換を行った。 4)当館開催の「正倉院学術シンポジウム2023」に米国ハーバード大学教授を招聘し、正倉院宝物の東アジア仏教美術史上における意義について討論を行った。国立慶州博物館に職員を派遣し、学術発表「八世紀の柄香炉について—正倉院宝物を中心に—」を行った。国際研究集会を開催し、国立慶州博物館からの招聘研究員による講演「朝鮮時代黒石寺如来坐像-チベット明様式仏像の比較研究-」を行った。			
【補足事項】  正倉院学術シンポジウム 2023「正倉院宝物と仏教美術」			
【年度計画に対する総合評価】 評価：B		【判定根拠、課題と対応】 新型コロナウイルス感染症の感染症法上の5類移行による海外との人的交流制限の緩和に伴い、学術交流協定を結ぶ韓国の国立慶州博物館への職員の派遣、及び同博物館研究員の招聘を本格的に再会することができた。また、職員を博物館等の海外の諸研究機関に派遣するとともに、海外の諸機関から研究員を招聘することで、対面による意見交換や国際研究集会での発表など、時宜に適った学術交流を行い、着実に計画を実行できた。	
【中期計画記載事項】 2019年 ICOM 京都大会の成果も踏まえつつ、我が国における博物館活動の先導的役割を果たすとともに、文化財とその活用等に関する博物館活動について、先進的かつ有用な情報を集積するため、海外の優れた研究者を招へいし、国際シンポジウムや研究会・共同調査等を実施する。また職員を海外の博物館・文化財研究所等の研究機関及び国際会議等に派遣し、積極的に研究発表を行う。			
【中期計画に対する評価】 評価：B		【判定根拠、課題と対応】 新型コロナウイルス感染症の感染症法上の5類移行に伴い、海外の研究者の招聘や職員の海外への派遣を通じて、対面での海外研究者との学術交流が本格的に再開できた。なお、引き続きオンラインを活用した海外との学術交流も行っている。またコロナ禍で中断していた正倉院学術シンポジウム及び国際研究集会を再開して海外の研究者を招聘するなど、多様な形で着実に海外との学術交流を実現しており、中期計画を順調に遂行することができた。	

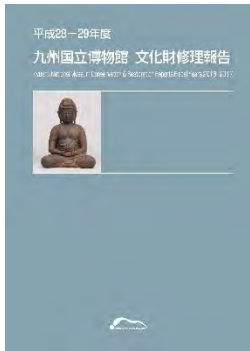
中項目	1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信		
事業名	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ③国内外の博物館等との学術交流等		
【年度計画】 ・ I-1-(4)-③ (4館共通) 1)、2)、3)、4) ・ I-1-(4)-③ (九州国立博物館) 1)			
担当部課	学芸部博物館科学課 交流課 総務課	事業責任者	課長 木川りか 課長 高椋剛太 課長 執行正一
【実績・成果】 (4館共通) 1) 4) 学術交流協定を締結している大韓民国国立公州博物館・扶餘博物館と相互に職員を派遣する人的交流事業を行った。(受入れ：6月5日～18日 派遣：10月16日～29日) 2) 韓国、アメリカなど7か国の博物館・美術館等へ延べ15人派遣し、各自の研究テーマに係る研究の推進及び研究交流を行った。 3) ・ 海外での日本美術作品の活用状況や、保存状況、そして修理の考え方について正確な状況を調査し、先方の考え方を十分に理解することを目的として、北米のメトロポリタン美術館 (MET) 及びスミソニアン協会国立アジア美術館 (NMAA) を訪ね、聴き取り調査を行った。 ・ 展示ケース内外で使用される材料は、文化財に影響を与えないよう、VOC (揮発性有機化合物) などを放散しにくいものが求められる。日本国内で入手可能な安全な材料の選定やそのための試験法などについて、メトロポリタン美術館 (MET) の担当者とオンラインで協議した。 4) 香港故宫文化博物館主催の「承前啓後-中国文物保護国際シンポジウム」に館長が出席し、講演「日本博物館における書画の修理について」を行った。 (九州国立博物館) 1) ・ 学術交流協定を締結しているタイ国文化省芸術局の要望を受け、水中遺跡出土品の保存処理技術の習得に係る技術研修を行った。(7月17日～22日) ・ 学術交流協定を締結している中華人民共和国南京博物院の90周年記念祝賀会及び祝賀行事に副館長が出席した。(11月5日～8日)			
【補足事項】  アメリカ、スミソニアン協会国立アジア美術館 (NMAA) における聴き取り調査 (9月11日)  アメリカ、メトロポリタン美術館 (MET) とのオンライン協議 (11月13日)			
【年度計画に対する総合評価】 評価：A		【判定根拠、課題と対応】 5年度は、海外渡航が再開されたため学術交流協定締結機関との往来並びに博物館等からの視察が増加した。学術交流協定締結機関とは引き続き交流を深め、博物館活動の充実を図る意思を確認できた。さらに文化財の保存環境など、海外の博物館と共通の課題を協議する場も設けることができた。さらに、アメリカのメトロポリタン美術館やスミソニアン協会国立アジア美術館などとも情報交換を行い、新たなテーマで研究交流が始まったため、左記の評価とした。	
【中期計画記載事項】 2019年ICOM 京都大会の成果も踏まえつつ、我が国における博物館活動の先導的役割を果たすとともに、文化財とその活用等に関する博物館活動について、先進的かつ有用な情報を集積するため、海外の優れた研究者を招へいし、国際シンポジウムや研究会・共同調査等を実施する。また職員を海外の博物館・文化財研究所等の研究機関及び国際会議等に派遣し、積極的に研究発表を行う。			

【中期計画に対する評価】 評定： B	【判定根拠、課題と対応】 5年度は学術交流協定締結機関及びアメリカの美術館等との間で人の往来を伴う交流を再開し、友好を深めるとともに相互に学ぶ機会を得た。
----------------------------------	---

中項目	1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信							
事業名	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ④調査研究成果の公表							
【年度計画】								
・ I-1-(4)-④ (東京国立博物館、京都国立博物館) 1) ・ I-1-(4)-④ (東京国立博物館) 1)、2)、3)								
担当部課	学芸企画部企画課 学芸企画部博物館情報課 学芸研究部調査研究課			事業責任者	課長 原田あゆみ 課長 村田良二 課長 小山弓弦葉			
【実績・成果】								
(東京国立博物館、京都国立博物館)								
1)、『東京国立博物館文化財修理報告 24』PDFファイルを当館ウェブサイトで公開し、研究情報の普及を図った。 (東京国立博物館)								
1)・「東京国立博物館研究情報アーカイブズ」の運用を継続しつつ、新たに「中国書画録」を追加し、インターネットを活用した収蔵品・調査研究等に関する情報公開の充実を図った。								
・ 刊行物等を収録する機関リポジトリ構築に向けて、JPCOAR（オープンアクセスリポジトリ推進協会）への入会や、収録対象一覧の整備と紙媒体資料のデジタル化を実施した。 ・ 特集印刷物リーフレット等12件のPDFファイル版を当館ウェブサイト上に全件公開することによって、研究情報の普及を図った。								
2)、『東京国立博物館紀要 第59号』を刊行した。								
・ 『法隆寺献納宝物特別調査概報 43 伎楽面 X 線断層 (CT) 調査』を制作し、PDF ファイルを当館ウェブサイトで公開した。 ・ 刊行物 (『東京国立博物館文化財修理報告』) のリポジトリを行った。 ・ 『修理調査報告 国宝 埴輪 挂甲の武人』を刊行し、『法隆寺宝物館』『東京国立博物館ハンドブック (中国語)』の増刷を行った。 ・ 『博物館でアジアの旅 アジアのパーティー』を刊行した。 ・ 特別展図録6件、特集等印刷物16件 (リーフレット12件、冊子4件) を編集・増刷等を行った。								
3)・研究誌『MUSEUM』703号～708号 (6冊) を刊行した								
【補足事項】								
【評価指標】	5年度実績	目標値	評価	経年変化	元	2	3	4
有形文化財の収集・保管・展示等に係る調査研究件数	49件	-	-		36	25	27	32
【年度計画に対する総合評価】 評価：B	【判定根拠、課題と対応】 紀要、『MUSEUM』等の定期刊行物を刊行するとともに、文化財修理報告等を刊行し、PDF公開を行った。特集展示の刊行物は、特別展と連動したテーマの刊行物を増やすことで充実した情報を提供し、PDFファイル版をウェブサイトに掲載することでさらなる情報公開に努めた。さらに、学術刊行物についてはリポジトリを導入し、過去の刊行物をウェブ上で公開することで広く研究情報の普及を図った。 また、研究成果としてのデータベースを新たに1件、「東京国立博物館研究情報アーカイブズ」にて公開した。 機関リポジトリの構築準備を進め、具体的な運用設計の段階に至ることができた。							
【中期計画記載事項】 文化財等に関する調査研究の成果を図版目録、研究紀要、学術雑誌並びに展覧事業に関わる刊行物などで発表するとともに、ウェブサイトでの公開等、調査研究成果の発信を更に拡充する。								
【中期計画に対する評価】 評価：B	【判定根拠、課題と対応】 研究紀要、学術誌並びに展覧事業に関わる刊行物などを順調に刊行した。 『東京国立博物館ハンドブック (中国語)』の重版や『修理調査報告 国宝 埴輪 挂甲の武人』の刊行により、販売部数を伸ばすことができた。 『東京国立博物館文化財修理報告』『法隆寺献納宝物特別調査概報』は当館ウェブサイトでの公開を開始し、特集展示リーフレットをはじめとして、インターネットを活用した調査研究成果の発信を行うことができた。							

中項目	1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信								
事業名	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ④調査研究成果の公表								
【年度計画】 ・ I-1-(4)-④ (東京国立博物館、京都国立博物館) 1)、(京都国立博物館) 1)、2)									
担当部課	学芸部		事業責任者		企画室長 山川暁 調査・国際連携室長 降矢哲男 保存修理指導室長 羽田聡				
【実績・成果】 (東京国立博物館、京都国立博物館) 1) 『文化財保存修理所 修理報告書』21 を刊行した。 (京都国立博物館) 1) 『学叢』45 を刊行した。『学叢』33 をウェブサイトへ掲載した。 2) 『社寺調査報告』33(〈禅居庵・大中院・久昌院〉陶磁編) を刊行した。									
					『学叢』第45号				
【補足事項】 (京都国立博物館) ・『文化財保存修理所 修理報告書』21は、2年度に文化財保存修理所で修理が完了した作品を掲載(修理報告139件、銘文報告14件。ただし、国指定の文化財及び当館以外の国立博物館が管理する作品はそれぞれ報告書が刊行されるため割愛)。 ・親鸞聖人生誕850年特別展『親鸞—生涯と名宝』の図録を発行した(発行は朝日新聞社、NHK京都放送局、NHKエンタープライズ近畿)。 ・特別展『東福寺』の図録を東京国立博物館と共に発行した(発行は読売新聞社)。 ・特集展示『弥生時代青銅の祀り』の図録を編集・発行した。									
									
					文化財保存修理所 修理報告書 21		特集展示『弥生時代 青銅の祀り』図録		
【定量的評価】項目		5年度実績	目標値	評価	経年 変化	元	2	3	4
有形文化財の収集・保管・展示等 に係る調査研究件数		15件	-	-		11	12	13	16
【年度計画に対する総合評価】 評価：B		【判定根拠、課題と対応】 社寺調査報告、図録等を年度計画通りに刊行することができた。『学叢』については最新の研究成果を論文として掲載し、質の高いものとすることができた。							
【中期計画記載事項】 文化財等に関する調査研究の成果を図版目録、研究紀要、学術雑誌並びに展覧事業に関わる刊行物などで発表するとともに、ウェブサイトでの公開等、調査研究成果の発信を更に拡充する。なお、定期刊行物等を前中期目標の期間の実績以上刊行する。									
【中期計画に対する評価】 評価：B		【判定根拠、課題と対応】 展覧会図録・研究紀要・各種報告書とも計画通り刊行できた。研究紀要である『学叢』は、刊行後10年を経過した時点で全文をWEB掲載する作業を継続しており、引き続きインターネットも活用して研究成果の発信に努める。							

中項目	1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信								
事業名	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ④調査研究成果の公表								
【年度計画】 ・ I-1-(4)-④ (奈良国立博物館) 1)、2)									
担当部課	学芸部			事業責任者	部長 吉澤悟				
【実績・成果】 (奈良国立博物館) 1) 『鹿園雑集』第26号を3月に刊行した。また奈良国立博物館ウェブサイトにも掲載した。 2) 『奈良国立博物館 文化財保存修理所 修理報告書』第6号を2月に刊行した。また、修理報告資料を整理しデータベース化につとめた。									
【補足事項】 1) 掲載内容は、作品研究2件、研究ノート1件、調査報告1件、研究報告1件であった。 2) 掲載内容は、修理概要13件、関係銘文集6件、材質調査(木造)3件であった。									
 鹿園雑集 第26号  修理報告書 第六号									
【定量的評価】項目		5年度実績	目標値	評価	経年 変化	元	2	3	4
有形文化財の収集・保管・展示等に係る調査研究件数		11	—	—		18	15	15	14
【年度計画に対する総合評価】 評価：B		【判定根拠、課題と対応】 刊行物については、定記刊行物、報告書とも、当初予定していたものをすべて刊行することができた。また、研究紀要については、当館研究員のみならず外部研究者が参加した原稿を掲載するなど、例年通り充実した内容で完成した。年度計画通り刊行できたと判断し、B評価とした。							
【中期計画記載事項】 文化財等に関する調査研究の成果を図版目録、研究紀要、学術雑誌並びに展覧事業に関わる刊行物などで発表するとともに、ウェブサイトでの公開等、調査研究成果の発信を更に拡充する。									
【中期計画に対する評価】 評価：B		【判定根拠、課題と対応】 刊行物については、計画していた出版物を順調に刊行している。研究紀要については、継続的に調査研究の成果を掲載しており、刊行・ウェブサイトでの公開等も着実に実施している。以上のことから、中期計画を遂行できていると考えB評価とした。							

中項目	1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信														
事業名	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ④ 調査研究成果の公表														
【年度計画】 ・ I-1-(4)-④ (九州国立博物館) 1)、2)															
担当部課	学芸部企画課 学芸部文化財課 学芸部博物館科学課			事業責任者	課長 伊藤信二 課長 野尻忠 課長 木川りか										
【実績・成果】 1) 研究紀要『東風西声』第19号を刊行した（発行部数850部）。 2) 『平成28-29年度 九州国立博物館 文化財修理報告』（発行部数600部）を編集、刊行した。															
【補足事項】 1) 研究紀要『東風西声』第19号では、15本の論文を掲載した（うち当館職員執筆12本、外部研究者との共同執筆1本、外部研究者からの寄稿2本）。 2) 『平成28-29年度 九州国立博物館 文化財修理報告』（第6号）では、28年度～29年度に当館文化財保存修復施設で行った修理及び当館経費による館外での修理の記録を掲載した。対象文化財の基本的情報、施工業者、修理前後写真、使用した材料、修理によって得られた知見等を掲載して、今後の修理の参考とするとともに、学術研究や修理事業の普及啓発といった多方面での活用に資する内容を公開した。															
															
東風西声第19号表紙			平成28-29年度 文化財修理報告表紙												
【定量的評価】項目	5年度実績	目標値	評定	経年 変化	元	2	3	4							
有形文化財の収集・保管・展示等に 係る調査研究件数	10件	-	-		18	18	12	10							
【年度計画に対する総合評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 研究紀要や特別展、特集展示等の図録等を刊行し、調査研究の成果を公表した。 また、文化財修理に係る記録を『九州国立博物館 文化財修理報告』第6号で報告し、年度計画を達成したことからB評定とした。														
【中期計画記載事項】 文化財等に関する調査研究の成果を図版目録、研究紀要、学術雑誌並びに展覧事業に関わる刊行物などで発表するとともに、ウェブサイトでの公開等、調査研究成果の発信を更に拡充する。															
【中期計画に対する評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 中期計画に沿って予定どおりに図録、研究紀要、報告書などを刊行し、調査研究の結果を広く公表することができた。引き続き、当館の調査研究等の取り組みを広く公開するために、印刷物を刊行できるよう努める。 さらに、研究成果のウェブサイトでの公表について、館内での検討を継続する。														

中項目	1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信							
事業名	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ④ 調査研究成果の公表							
【年度計画】 ・ I-1-(4)-④ (皇居三の丸尚蔵館) 1)								
担当部課	学芸部	事業責任者	学芸部長 朝賀 浩					
【実績・成果】 翌年度の「皇居三の丸尚蔵館研究紀要」1号の刊行に向けた準備をおこなった。								
【補足 事項】 ・ 開館記念展「皇室のみやびー受け継ぐ美ー」の展覧会図録を刊行した。 ・ 御即位5年・御成婚30年記念特別展示「令和の御代を迎えてー天皇皇后両陛下が歩まれた30年ー」の展覧会図録を刊行した。 ・ 作品紹介リーフレット・英語版「Illustrated Miracles of the Kasuga Deity」(日本語訳:「春日権現験記絵」)を刊行、配布した。 ・ 開館記念展「皇室のみやびー受け継ぐ美ー」第2期:「近代皇室を彩る技と美」の図録を刊行した。 ・ 開館記念展「皇室のみやびー受け継ぐ美ー」第3期:「近世の御所を飾った品々」の図録を刊行した。 ・ 作品紹介リーフレット「中世絵巻の傑作 国宝春日権現験記絵」を刊行、配布した。 ・ 宮内庁三の丸尚蔵館が発行した、過去の紀要等の調査研究成果を、宮内庁と調整のうえ当館のウェブサイト上にPDFファイルで公開し研究情報の普及を図った。 ・ そのほか学会誌等で発表をおこなった 4件								
								
刊行した図録								
【定量的評価】項目	5年度実績	目標値	評価	経年 変化	元	2	3	4
有形文化財の収集・保管・展示等に 係る調査研究件数	13件	-	-		-	-	-	-
【年度計画に対する総合評価】 評価: B	【判定根拠、課題と対応】 刊行物については当初予定していた図録をすべて刊行するとともに、各期の出品作品を網羅した図録を追加で作成するなど、収蔵品とその研究成果の普及に努めた。							
【中期計画記載事項】 文化財等に関する調査研究の成果を図版目録、研究紀要、学術雑誌並びに展覧事業に関わる刊行物などで発表するとともに、ウェブサイトでの公開等、調査研究成果の発信を更に拡充する。								
【中期計画に対する評価】 評価: B	【判定根拠、課題と対応】 着実に研究成果を発信し、中期計画を遂行している。ウェブサイトでの研究成果の公開をしており、更なる拡充にも対応し、中期計画を達成する見込みである。							